
CHAOS ONLINE

giallo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

CHAOS ONLINE

【Zコード】

Z2425J

【作者名】

あらすじ

【あらすじ】
シェイド「どうもはじめまして、私はシェイドという者です。このCHAOS ONLINEというVRMMOでギルドマスターをしております。さて、あらすじを言わなければならぬのですが・・・この物語は私が山あり谷ありのバーチャル世界で獅子奮闘してあらゆる敵を倒し、いろんなとの出会い、そして別れが描かれたゴフツ」

「トル、なんであんたがここにいる。みなさん騙されてはいけません。この物語は俺が主人公の俺が辿る軌跡を描いた物語です。この

人が言つたことは八割方嘘です。では、CHAOS
オンライン

「ごめん、くつろぎお読みください」

story1 始まりは唐突に（前書き）

いつも、はじめましてジャッロといいます。

VRMMORPG物を描くにあたつてこの話では説明が少なすぎる
といつ方・・・「安心下さい話が進むに連れて疑問に思う細かい部
分が入つくると思いますので御了承下さい。

あと、文章力も高くないので稚拙な文章になるかもしませんが暖
かい目で見てもらえるとありがたいです。

story1 始まりは唐突に

「生い茂る森、晴れ渡る空、微妙に湿つた土そこには一人の人がいました。めでたし、めでたし。」

「いや、待てい何がめでたしだ。そして、あんたなんについて来るので。」

そう、俺はとうとう売られたVRMMORPG『狩りをしよう!』をプレイしているのだが何故こんな状況になつたんだ・・・・。

30分ぐらいまえ

俺は、一日遅れだがVRMMORPG『狩りをしよう!』のソフトを手に入れた。

ソフトを入れ、ヘルメットから無数のコードが垂れ下がった装置を被り起動した。

セットアップ・・・仮想現実空間での自分であるキャラクターの設定を行つた後光りに包まれた。

おつと、名前を召乗つていなかつたな。

俺の名前は篠田亮シノダトオル、ゲーム内の名前はTHORでトール多分平凡な高校2年生だ。

光に包まれた後に動作確認用のステージにワープ（？）されて移動、攻撃、メニューの開き方などをノマドに手ほどきをつけた

そして、また光りに包まれ、はじまりの森に飛ばされた。

はじまりの森中央部ここがハンター達の出発点であつこの森を抜ける事が初めのクエストである。

いろいろ詳しい事が省いてあるがおいおい語るとして・・・まずは現状だ

そして俺は森を抜けるため進み始めて5分ぐらいで《やつ》が現れた。

ただ今5分ぐらいまえ～

歩いていると田の前に黒いロープに包また謎すぎる人がいた。いや、正確にいうなら木に背をあずけて何かを悩んでいた。

ロープのフードに顔が隠れていて男か女か判別できない……。と
りあえず話かける事にした

「失礼ですが、あなたは何をしているんですか。」

黒ロープは質問に何か悩んでいた。俺自身も変な質問したと思
つた。

だが、どう考へても彼がここにいるのがおかしい。なぜなら、
この森はゲームを始めたばかりの人しかいないはずだ。なのにこの
人は初期装備である布装備じやない。

と、そこまで思考してから別の事を考へはじめた余計な事を言
つたと

これは、MMORPGなのだいろんな人がいたって何も不思議で
はない。とりあえず弁解しようっと声をだした

「すみま……」

「いやー、実は暇してましてね。ふらふらしてたんですよ。」

弁解する前に質問に答えられてしまった。まあいいこれで悩むこともなくなつた。

「そつなんですか、じゃ機会があればまた」

「これで、この人とのコミュニケーションは終わったと思った。が、俺が進んだ後について来てさらによか言い出した。

「30分まえ回想おわり　　「ナイスつつこみ、ククク欲しいね
ーうちのギルドに」

俺はギルドといつ単語にかなり興味を惹かれたが・・・

「俺は絶対嫌ですけどね」

「これだけは思つ。こんな訳のわからない人のギルドは入りたくない

「まだ勧誘すらしてないのに否定はひどいんじゃない」

「名前も知らない人についてはいけません」

「うう」で、黒ローブは疑問をもつたようにみえたがすぐ解決した
よつだ。唯一見える口許がへの字から口に変わった。

「ああ、そういうえば姉はつこわつかれたばかりなのだけ。メニ
ューを開くといい、そしてマップを開き緑色の点を凝視するといい。
・・騙されたと思つてやつてみるとこう」

そんなことを呟かれるといつぱり聞こえない

俺は、左手を3回振り長方形のメニュー画面を開きマップを開
いた。

そこには、青点と緑点があった。言われたとおりに凝視するとH
ADEの文字と緑のバーが見えた。

「それが私の名前で緑のバーはその人のライフポイントですよ。
一応、名乗らせてもらうまじょつ。シハイドと申します。君は・・・
」

「トールです」と、短く名乗つた。

「ふむ、君はまだ知らないことが多いそつだが情報サイトなどで
下調べなどはしなかったのですか」

「ええ、偶然手に入れたソフトなんで・・・すぐにやりました」

「情報がないのか・・・なら、ますます私のギルドに入りなさい。うちはいいですよー皆いい人だらけですし」

何をもつてこの人はいい人を決めているのだろうか。いや、それよりもこの人自体がわからない・・・話を変えよう

「そういうえば聞きたいんですけどこの森にモンスターつていな
いんですか」

「え、私の提案スルー。まあいいですけどね。ちなみにこじら
へんのモンスターは・・・」

黒口ー・・・シェイドさんは言いかけて立ち止まつっていました。
俺は疑問に思い、「どうかしました」と聞いた

「リアライズ ハーベストサイズ」

シェイドさんの手に鎌ができました。ここではリアライズ
武器名と言つとセットしておいた武器を出せます。

でかい黒光りする鎌を見てかつて〜とか思つていたときにも田の前に正方形のポリゴンが少しづつ現れ広がつていった。

「トール君、これが突発性エンカウントです。これは最近よく起るようになった現象なんです。さがつていてください。」

意味がわからなかつた目の前にいきなり3メートルぐらいのドロゴンが顯れた。

storuy1 始まりは唐突に（後書き）

次回予告

ショイド（以下SH）「はい、始まりましたショイドの予告コー
ナー。わーぱいぱい！」

トール（以下TA）「シハイドさん、やつて恥ずかしくないの
か」

シH「おっと、恥ずかしくないです」

トー「とにかく、まだキャラ確立してないのにこんな事やる作者っ
て・・・」

シH「おーっと、もう時間がないですね。ではトール君

トー「次回、突発性エンカウント」

シH「最後にもう一回」

トー「とこつか次回、俺活躍しないだろ・・・・あつ逃げるな

「グオオオオオオオ」

ドラゴンが唸る声

その咆哮に俺は動くことができなかつた。

「早くせがりなさい。死にたいのですか」

死にたくないだが、俺の足は動かなかつた・・・いや、動けなかつた恐怖でびびつてた

「・・・・・」声すらでない

それを見たシェイドはしょいがないといつ顔をしていた。

「では、しつかり見ていなさい私の闘い方を」

シェイドが一步前に出た。それが闘いの始まりとなつた。

シェイド視点

トール君は・・・まあ、初めてこの世界に来てチュートリアルのネズミの後にこんなドラゴンを見たのだからしうがない。

私がなんとかしましょう。

一步前に踏み込んだ、ドラゴンが動き出した。

目の前にいるのはレベル58の一番弱いドラゴン。攻撃パターンを知っているし、無駄に物理攻撃力が高いことぐらいだ。

だが、背後にはレベル1のトール君がいる。

なので私は出し惜しみせずに『死靈使い』スキルの最大物理攻撃力を誇るアーツで倒すことにした。

1Jまでの思考時間0・12秒

アーツを使う方法は2つある1つはボイスアクション。名前でわかるかもしけないがこれはスキルにあるアーツを言葉に出すこと

によってシステムが補助してくれるもの。

もつ一つはフォームアクション。アーツにより型が存在しその型に
はめることで発動する。

私は、トール君の前であえてボイスアクションを選んだ。かつ
によくみせるためだよ。ふふつ

なお、ここまで思考も短いので一步足を出した時点ではトイ
ドの顔はにやけていた。（本人気づいてません）

トール視点

おい、あいつおかしいだらあんな化け物を前に笑つていやがる。

ショイドはにやけ顔のまま（本人気づいてません）鎌を後ろ
に引き

「アーツ デスセイバー」

ショイドが声に出した。ショイドの持つている鎌に黒い謎の物
質か纏わりつき肥大かし鎌の刃の長さが1メートルぐらくなつた
ところで、ショイドが跳躍した。

あとは、予想がつぶだれりの大鎌でドラゴンを斜めに振り落とした。

「ドラゴンは真っ一いつ……」

ありえないドラゴンの存在もだがショイドがもつとあつえない。

そんなことを考へていると、真っ一いつなつたドラゴンが光りの粉ようじてじて消えてくるときシロイドが近づいてきた。

「俺の、ギルドで強くならないか」

実力を見せつけられて言われた。ただ、この人ならついて行けるとなぜか思えた。

次回予告

シェ「シェイドの」アーツ紹介コーナーの時間でーす。わーーーー

「わざわざ盛り上げるの止めたが。そして次回予告せ……」

シェ「今回紹介するアーツは」こちら

ト、「俺の意見はスルーか」

「なんと、私のアーツ『デスセイバー』アーツレベル4 即死効果12・7% 『死靈使い』スキルで最大物理攻撃力をもつ」

トー「ていうか、スキルについてもアーツについてもまだ1つしかないし」

ショ「おおひと、時間のようだ。それではまた次回で。わたくなら

「一九、次回作成中……」
「が」

story3 勧誘（前書き）

いつも、ジャッ口です。

なかなか話しが進みませんが&トールが活躍しそうにありませんが
気長に読んでいくください。

「俺のギルドで強くならないうか」

ショイドに手を差し延べられた。

もちろん、俺は握手した。そして、言葉にした

「こんな俺でよければ入れてくれ・・・いや、入れさせて下さ
い」

頭を下げた。この時の俺はここに入れてよかつたと思った。
や、誰だって思うだろ強い人を目の前にしたら・・・

「そうですか、ではひとつ入れようと思つたのですが
このままこの森を抜けましょう。」

と、歩き始めた。ここで俺は疑問に思つたが
できただので歩きながら話しかけた。

「ギルドに入る方法つてどうやるんですか」

「簡単です。ギルドに入ってる人があなたに勧誘のメールを送つてその勧誘を承諾すれば入ったことになります」

「シェイドさん、ギルドの名前は何で言つのですか」

「ふふふー、私のギルドは『MISTY DREAM』霧の夢です。ああ、そうそうここいらへんのモンスターは私が狩りましたからリポップするまでできませんよ」

俺は話しているうちに、疑問が増えていったがこの森を抜けばいろいろ解決するだろうと

考えていたついに木が減っていき町が見えてきた

「ここが誰もが初めに来る王都セルテット。そして、多くの人が集まる場所です」

とりあえず俺の感想を言おつ。でかい。いや、広いといつべきか。だめだスケールが大きすぎて混乱している。

「では、ギルドに勧誘します。メニュー開いといてね」

俺は町の大きさにパニックになつて慌ててひらいた

SHADEさんから「ギルド」の勧誘が来ました。承諾しますか。
とこの文面がでてきた。俺はすぐに承諾した。

承諾したのが確認出来たのかショイドは笑顔で「やたー」とか
万歳していた。

「ではではちょっとばかし説明をギルドにはギルド間ができる
チャットやホームをもつ事ができます。MMORPGをやつた事が
ある人はお馴染みですね。まず、メニューにギルドの項目が増えま
す。メニュー画面見えたり使えたりするのは、ギルドの状況、ギル
ドメンバー、ギルドチャット、最後にギルド勧誘」

「いいやめどよのしこですか」とショイドに頷いた。

「後はホームについてからいろいろ説明しましょ」

なんでも彼のギルドにはギルドホームがあり王都にあるそうだ。
町に入つていろいろなものがあり且つ移りしている

「いろいろ見たり行つたりしたいかもせんがまずギルド

ホームまで行きましょう

武器屋街を抜け中央の広場まで抜けた。真ん中に大きな噴水がある事が印象に残った。

噴水に魅入っていたら、「こっちですよ」と呼ばれた。噴水を中心六本大通りがあつた。そのうちの赤い道を通つた。ちなみにわつきの武器屋街は緑の道だった。

「ここですよー」とショイドさんに連れて来られた場所は何と言つか屋敷という感じだ。いや、門とか塀はついてないがイメージにあいそつなもので言えば吸血鬼でもいそうという感じだ・・・

ショイドさんがわつきと進んで行き。俺もそのあとをついていった。

story3 勧誘（後書き）

次回予告

シェ「さあ、シェイドの次回予告」——

トー「これ、俺が主人公だよな」

シェ「なんと、次の回でキャラが一人増えたり減ったり！」

トー「あんたが消えてしまえ」

シェ「次回、ギルド。少年を待ち受ける者は何か」

トー「それ、俺のセリフだろ。くそ、また逃げられた」

story4 ギルド（前書き）

いつも、ジャッロです。

前書きもシノイドさんこまかせぢやいたいです。

俺はシェイドさんのいや俺のでもあるか・・・ギルドホームに入つた。

入つてすぐがボロボロの木造建築・・・ではなくてコンクリートで現代の建物だつた。1階はピロティのようでカフェテラスのような場所だつた。奥の方に大きな掲示板が見える。外と中が違う、違いすぎる点について考えていたら

「あ、お帰りなさいシェイドさん」 「どうでした」 「後ろのは誰ですか」 「お金貸して下さい」 などなど椅子に座つていた人や掲示板を眺めていた人が次々と声をかけてきた。

俺はそれにびっくりしてしゃべるタイミングをのがして黙つていたら

「はーい、少しだけ静かにしてください」と言った。だんだんと階のざわめきが静まっていき

「この子がさつきチャットで紹介した新人のトール君です。突発性エンカウントモンスターを狩つてた時に捕まえました。これらはみんなの仲間だ。よろしく」

そこでシェイドさんが「君も何か挨拶を」と言われたので
「トールです。これからよろしくお願いします」とだけ言つ
た。

すると頭が集まつてきて挨拶を交わしていくつた。

一通り挨拶を終えたのを見てシェイドさんが「今日は新人の歓迎会やろー」とか言い出した。まわりの人も「いいですね、やりましょう」「じゃあ、バーベキューにしよう」やら「ヘルナツツ早い大会やろ? やら「シェイドさんはひどいですよ」やら賑わっていた。

俺は本当にいいギルドに入れたと場を楽しんでいた。

30分後

俺はいろいろこのギルドの情報を手に入れた。まず、驚くことはシェイドさんはギルドマスターだった。まあ、ギルドマスターとは簡単に言つとギルド内で一番偉い人のことだ。初めて会った時ずいぶん生意気なことをいったかも知れないと後悔している。

シルクに聞いたのだが、ああシルクはこのギルドで俺と同じ年だったので仲良くなつた人だ。このギルドはなんでも屋みたいなギルドらしい。素材回収、モンスター討伐はたまた配達などいろいろな依頼を受け持つ。

シルクいわく「うちほど依頼が殺到している所はない」といつ。

そんな、なんでも屋だがトップの人達はこのストーリーの真実を突き詰める上位パートィーでもあるのでギルドの全体のランクでいうと第五位なのだそうだ。

あと、簡単な説明をギルドメンバーは全員で77人、ギルドホームは4つある。ちなみに王都には38人ぐらいいるらしい。今は出払つていて20人近くしかいないが歓迎会を開こうとしている。

「えー、えー、はいじゃあトール君の歓迎会を始めます。みんなさーん、後は全力で渝しめーー」「イエーーー」とまあ俺のために歓迎会が開かれた。

なんだらうか・・・」の皆さんのノリの良さ・・・いや俺が暗いだけか・・・

疲れているのだろうか・・・今日やつたことを振り返ろつ。

1・調子のいい黒ローブに出合った 2・ドラゴンの恐怖 3・町を眺め疲れた 4・ギルドでの歓迎会（現在進行形）

・・・・ハーデすきる

「あ、トール何やつて・・・・何か疲れ切つた顔してんぞ」

彼は先程でてきたシルク、銀髪ショート碧眼、身長は俺と同じぐらいで170センチ前後ちょっと痩せ型、白を基調にした装備をしている。

「ああ、うん、初日から無茶苦茶だなつて

「君はまだ良い方だよ、ドラゴンが顯れたんだつけ。もし、シエイドさんがないなつたらトラウマものだつただろ」

確かに、その通りである。上位のプレイヤーに助けてもらつてなおかつ上位ギルドにまで入れてもらつたのだから。

「でもなあ・・・・」と俺がぼやいていた時

「どうだ、愉しんでるか。」と黒の長髪黒眼、中性的な顔、服が全体的に黒い・・・・誰かわからなかつた。メニューを開いて確認するのも失礼だと思い

「すいますん、まだ名前を……」と言つたといひで

「アリカ、シハイドさん」とシルク

・・・・・は？思考が止まつた。

「どうしました、トール君何が固まつてますよ。おーい、やほ

「トール、おいトール、固まつてますね。ショイドさん」

「 そ う い え ば 一 度 も 素 顔 を 見 て い な か つ た 。 今 の 今 ま で 黒 ローブ で フ ー ド を 被 つ て い た イ メ ー ジ し か な か つ た 。 」

「え、黒ローブは」これしか言葉がでてこなかつた。

「何を言つてゐるんですか。こつこつ時はロープは外しますよ」
そんな事を言つていると「シハイドセーン」と呼ばれていた。

「ちゃんと眼を醒ましてくだれ」ね」とショイドは呟ばれた方へ行つた。

「なあ～シルク、あの人誰

「いや、だからショイドさんだつて」

「そんな言葉信じられるか

「諦めろ真実だ」「いやだ」「とりあえず君は一度眼を醒ますべきだ」などなど他愛もない話しがしている間に初日が過ぎていった。

story4 ギルド（後書き）

次回予告

シユ「今日はゲストにシルク君を向かえました。ぱちぱなぱな」

シルク（以下シル）「あ、どうも始めまして」

シユ「なんど、次回に私はでれないのです」

シル「はあ、それはなんと言えばいいか。普段の行いがよろしくないからでは」

シユ「かはつ、それだけの理由で……ガクッ」

シル「シユイデさん、シユイデさん……しかたない、コホン、次回、ゴニークスキル強すぎる力は破滅をもたらす」

ト一「…………」

story5 ユークスキル

昨日は酷かった。俺とシルクでしゃべっていたら、ヘルナツツ早食い大会が始まった（もちろん強制参加）。一粒食べただけで・・・やめようの話しさ

とりあえず今日はこの世界での一日だ。ん、ああこの世界では現実の1時間が36時間に相当するのだ。だから、現実2時間で3日間になる。

ちなみに、現実は春だがこっちは夏がもう終わりそう。

今日は、シルクにいろいろこちらの事を教えてもらひつもりだ。といつても目の前にもうシルクはいるのだが

「今日は戦闘全般について話すよ」とシルク

シルクのレベルは5彼もまた最近始めたばかり。ただ、持つてる情報の量に差がある。

「俺に教えてくれるのはうれしいがシルクはいいのか。レベルとかあるだろ」

「何を言つてゐるんだ。困つた時はお互ひ様だろ。それに、同じ年代でレベル帯も同じなのだから一緒にやつたほうがいいじゃないか」

俺、マジ感動

シルク、あんたマジ最高だ。

と、感動していたら話を進められていた。

「まず、スキルはわかるよな」から始まった。

俺は頷いた。スキル・アーツの大元、アーツを使うならスキルを覚えなければならない。

「スキルには種類があつてコモンスキル、エクストラスキル、ユニークスキル」

「なんだ、ユニークスキルって」

「悪い質問は最後にしてくれ順番にはなすから」

「ああ、悪い」とだけ答えた

「まず、コモンスキルだ。コモンスキルは覚えるのにぐんに条件はない。何か武器を装備するだけででてくるだろう。例えば、チュートリアルで選んで装備した武器のスキルを覚えていたとか」

その説明に、俺は理解した。俺は、チュートリアルで片手小剣の「モンソードと腕小盾のモンバックラーを選択したがスキルの中に《片手小剣》と《腕小盾》のスキルがあった。まあ他にも初期から《集中》や《索敵》や《気配》などもあった。

「次に、エクストラスキル。これは一定の条件を満たせば誰だつて習得することができる。例を上げよう。今、君にも《気配》と《索敵》スキルがあるはずだ。それらを熟練度500まで上げると《隠蔽》スキルがでてくる。このように何かのスキルを上げると出てくるのがエクストラスキル。熟練度についてもあとで説明するから。ここまでいいかい」

「ということは、エクストラスキルを上げたらでてくるエクストラスキルもあるのか」俺は疑問を消しきれなくつい質問してしまった。

「その通りだ。一番認知度が高い例がコモンスキル《初級炎魔法》だ。これを上げると、次に《中級炎魔法》またこれを上げると《上級炎魔法》さらにもう一段階あるんだけど、そんな感じでエク

ストラ上げた先にエクストラもあるんだ」

「悪い、ありがと。続けてくれ」

「うん、最後にユニークスキル。これも一定の条件を満たせば習得するはず」

「はず？」つい俺は聞き返してしまった。

「こればっかしは一律にこうだとは言えないんだ。まず、ユニークスキルは一人しか持つことができない。だから一人以上同じスキルを持っていたらただのエクストラ一人しか持つていなかつたらユニーク」

「でも、ユニークだったからって強いとは限らない……こともないのか」

「残念ながら、今あるユニークはどれもチート気味でゲームバランス崩壊するぐらい強いよ。トールは見たんだろ。『死靈使い』スキルのアーツを」

確かに、やばかった。

「ゼラ、ゴンが真っ一いつだった。しかも一撃で倒してたし」

- ・えーと、ドラゴンがでてくるのは最低でもレベル55からか。
- ・そんなもんなんだよヨニークスキルって

「ユニークスキル恐るべし。俺はそう思つたが同時に元にか手に入れられないかなと思つていた。そんな考えをシルクに読まれたのか

「ヨニークは狙つてとれるようなものじゃないからあきらめろ

そんな事を言われて俺はうなだれた。

「そろそろ復活しろ次の話をするから」とシルクは話し始めようとしていた。

stor y5 ニークスキル（後書き）

次回予告

ショ「え～、ショイドの次回予告「一ノナーナー」

シル「ん～、ん～」

シェ「どうやら、私の出番が当分ないとかなんとか」

トー「ん～、ん～」

シヒ「やいの一人つるせ。せっかく縛り付けておいたのに、これは私の『一ノナーナー』だ」

トー＆シル「「ん～～～」」

シヒ「次回、シヒイドさんの冒険。私を待ち受けるものはいったい」

トー「ふはあ・・・くわ、あのやー。俺達を縛つた揚げ句、嘘の予告までしゃがつて・・・もひ、いなー」

story6 シルクは良いやつ

「次は熟練度についてだ。まず、メニューを開いてスキル一覧を開いて」

俺はシルクの言われた通りにした。

「開いたか、じゃあまずスキルをどれでもいいから選択してそしたらアーツ一覧表とグレーのバーがでたでしょ。まず、グレーのバーは熟練度のバーです。熟練度が上がると左側から赤色になります。ちなみにバーの左にある数値は熟練度の数値です」

俺は《片手小剣》のスキルを見ながら理解した。

「次に、アーツ一覧表、今は少ないかもしぬないが熟練度を上げていくにつれてアーツは増えていく。さらにアーツは熟練度分だけ強化するために振り分けることができる。例えば《片手小剣》のスキルがある。熟練度が10ちなみにどれであっても熟練度は最高1000だから、《袈裟切り》のアーツがあるとする。《袈裟切り》は攻撃力と攻撃速度を上げることができる。そこで熟練度分の10を《袈裟切り》に振り分ける事ができる。といつても《袈裟切り》の場合攻撃力も攻撃速度も10振り分けないと変動はないのだけどね」

説明を聞いて、『袈裟切り』を見たが『片手小剣』スキルが練度0だったのに今はいいと思った。

「じゃあ、最後にスキルはスキルスロットにセットしないと意味がないんだ。セットした状態で戦わないとアーツは使えなかつたり熟練度は手に入らなかつたりするから。スロット数は10、この数字は減りもしないし増えもしないよ。だから、どんなプレイヤーも常時セットしたスキル10種類だけしか使えないんだ」

「ということは、対人戦だとスキルの探り合いもあるわけだ。スキルの知識の有無で勝敗が決まりそうだな」

そんな俺の考えを言つたらシルクは苦い顔をして言った。

「多分、認知度の高いスキルなら見破れるかもしねーが、何せ戦闘スキルの種類はだいたい500種類以上あるって言われるし僕だつて知らないスキルはまだまだあると思うよ」

こんな事を聞いて俺は「これは楽しめそうだ」と「そんなたくさんあるのかよ」がいりまざつた。でも、俺はマイナス思考な考えは捨て前者を口にだした。

「そいつは楽しめそうだ」

「僕もそう思っている。このゲームの醍醐味はそれにあると思
う」

「このシルクの言葉を聞いて前者を書いてよかつたと思った。

「よし、じゃあそろそろ話すだけもなんだから実際にモンスターと戦いに行こう・・・と思ったがその前にアイテムを揃えに行こう低レベル者用の店を紹介するよ」

俺は内心では「マジ感謝、あんた本当にいいやつだよ」と思っていたが「助かる」とだけ言った。

シルクと俺は噴水のある町の真ん中まできた。ここでシルクは何か思ったのか

「やつこえ、この地理についてまだ知らないよな。この噴水のある広場がこの町の中央部分なんだ・・・」

「これで、シルクからいろいろ教えてもらつた。まず初めて入った緑色の道は武器や防具やアクセサリーなど装備品全般が固まつる。このように他の道も赤色の道はギルド関連、青は消耗品関連、白は宿屋、飲食店関連、黄色は闘技場やカジノなどのアミューズメント関連最後に・・・」

「最後に黒色の道・・・」Jは王の住む城につづいてる。いろいろな店があることで便利なんだ。でも、城は違う。城には王はないくてモンスターが徘徊する王城跡になつていいんだ。間違つても入ろうとするなよ。モンスターの平均レベルは60だから

「城にモンスターついてどう設定なんだ」俺は疑問を口にした。

「シナリオの設定では王やその従者や騎士達が一夜で謎の死を遂げたつてなつてる。だから中にはアンデット系や死靈系ばかり、スペクターとかデュラハンとか。まあ、今の僕達には関係ないさ」

とまあこんな風にあらかた王都について説明してもらい縁の道を進んで行つた。

story6 シルクは良いやつ（後書き）

次回予告

シェ「はい、私の「一ナーダ」がやつてまいりました」

トーラー「いや、次回予告だろ、てか久々に俺喋れてるな」

シェ「そう、つまるとこ最近ずっとシルク君のターンなのです。
つまり、シルク君を消せばぐえつへつへつ」

トーラー「なあ、俺って主人公なんだよな」

シェ「シルク君を消し・・・闘いにいざ行かん」

シルク「次回、武器。トールは何を選んだのか」

トーラー&シェ「シルク「君~~~~」

俺達は緑の道を進んでいた。噴水から歩くと5分。盾の前に剣が×を描いた看板がある武器防具屋という店についた。

「ここがそなのか。えっと・・・・『マルチーズ』」

「うん、ここはね、初級者から上位者まで幅広く武器防具を売っているんだ」

「うん、アリはね、シルクから聞いた話ではここは同じギルド霧夢の人らしい。」

「へい、らっしゃーい」

「どうも、ここはまじんさん」

「はじめまして、昨日入ったトールです」

彼のネームはGUNジン、ギンじゃないよ。見た感じ年は20ぐらい。身長は2メートルはあるのではないか大きい。そして、輝くヘッド・・・失礼、スキンヘッドの眼の色はグラサン

をかけていてわからなかつた。

「おう、よひしきな。俺はジンだ。主に鍛冶をしてくる。とりあえ、今日は何のようだ

「ええ、彼の装備を調べようと思こまして」

「おう、見てけ見てけ。そして、買つていってくれ

「いいで、また補足だが同じギルメンなら5%割引してくれるらしい。

俺は悩んだ。何を武器に選ばうか。もしかん臨機応変にいろんな武器を使えばいいのだが・・・

「うへへへへん」

「何に迷つてゐるんだ」

「なあ、シルクは何使つてゐる

「僕は、片手小剣と腕小盾だよ。将来的に《魔法剣士》になりたいからね」

「あ～、そつか将来的になりたいもので決めてもいいのか。」

「普通はそういうじゃないのか。じゃあ、君はどんな闘い方が好きなんだ？」

「……」
「大技をどんどん出すよ！」

「魔法職じゃないのか…………だつたら、これほどだ」

指を指していたのはショウウケースに入っていた剣、いや普通の剣じゃない長さは一メーター半両刃で幅も長い、いわゆる大剣という部類だ。

「……《ゲイルソード》、装備制限LV.1、攻撃力はコモンソードの倍か……うん、いいかもな」

「じゃあ、買おうか。ジンセーん」

呼んだジンさんがやつてくる時に気づいた。金が足りないと。

「なあ、シルク金が足りない・・・」

「え、・・・高いな」

そこには10000コと書いてあった。ここでの通貨単位はコ、ノールである。俺の所持金は950コ描写はなかつたが昨日宿に50コ使つた。全然足りない。

一人で『ゲイルソード』を前に落胆している

「おっ、そこつかとつと持つてけ。武器一つはショイドさん
が払つてくれるやうだ」

・・・・・はい?

「本当に、ショイドさんが・・・」俺は疑つたが、ジンさん
から手渡しされ手に入れた。

「いやーショイドさんもたまに良い事するなー」と、ジンさん

「僕の時はなかったのにね」と、シルク

「」まで聞いて俺はショイドさんに感謝していた時

ぴぴぴっ、ぴぴぴっ、とメールがきた時の音がなつたので俺はメールを開いた。件名にショイドよりと書いてあつた。

俺はメールの文章を開いた

メール文

件名 ショイドより

本文 どうですか、そろそろシルク君と一緒に武器でも購入してひとつずきな武器を私が替わりにだすという事を知ったのではないでしょうか。それは、私からのほんのした饗別です。どうか、受け取つて下さい。

ついしん もう、受け取っちゃいましたね。これで君は私に借りをつくっちゃいましたね。ははははは。ジンさんもグルなんだよ。いやーこの借りは大きいですよ、何ていったって一万ですからね。低レベルの君にはつらいでしょうね。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ああ、初めは感動したよ。なんだよ、って。何が、ついしんだ。くそ、はめられた。だいいち何で本文より追伸のまづが長いんだよ。ぶつくさぶつくさ・・・・・

えているジンさん。

メール文章おわり

俺は、無言でシルクにメールの内容を見せた「うわー」とだけ言われた。

その後、ジンさんを問い合わせたが、「君らが、甘いだけだよ」と言われて言い返せなかつた。

店を出て購入した武器防具を装備して

「でも、その『ゲイルソード』かなり良質な武器だよ」と、シリクに言われた。

実際、その通りで攻撃力が高いのはもちろん風魔石という鉱石を使ってジンさんがオーダーメイドした。奇跡の一品で風属性が付加されてたり、本来大剣は攻撃速度が遅かつたり、重量があつたりするのだが・・・・とまあ借りをつくつてしまつたがどんないいものを手に入れてしまった。

storuy7 武器（後書き）

次回予告

ショ「はい、どうも。お待ちかねのショイドの次回予告ローナー
です」

トー「多分、俺よか人氣でしょ、うよ」

ショ「どんどん卑屈になつてゐるトール君に耳寄りな情報だ」

トー「…………」

ショ「これから2話後に君が活躍しますよ」

トー「な……」「…………？」

ショ「よひやく、主人公っぽくなれますよ。よかつたですね……
・死んじやえぱいのこ」

トー「田代の行いがいいせいかな。ショイドさん、俺は主人公な
んですね」

ショ「いきなり復活しましたね。ですが残念です。《デスセイバー
》」

トー「ちょっとまじ。俺はまだかつや」

ショ「次回、トール君の死。トール君はいつたい誰に」

シル「嘘さんだまされては」

シエ「『テスセイバー』・・・ふふふ」

story8 『ゲイルソード』（前書き）

いつも、ジャッ口です。

最近になって気づいたミスですがショイドさんが某メーカーのティズシリーズの大佐と一文字違いだしネクロマンサーだしこぶりまぐりな事に気づきました。
・・・・・ま、いいか。

story 8 『ゲイルソード』

『マルチーズ』で装備を調えたあと、一番安い薬瓶を五本買って赤色の道を通って町を出た。

「…………」見渡す限りの草原に俺は言葉がでなかつた。

俺が景色に見とれていたら。シルクが「おいでござ」と、言われたので気を持ち直してついて行つた。

20分後

「はあ、はあ」俺は息を切らして、向かってくるホワイトウルフを『サイドステップ』で交わし『ソニックエッジ』で斬撃と衝撃波の一つのダメージで白狼を倒した。

また、向かってくる白狼を『バックステップ』で交わし、シルクと背中があつた。

「そっちは、何倒した

「五匹倒した。そっちは

「同じ」と短くいった。まだこっちだけでも七匹は見えた。

どうして、こうなった。

10分戻す

俺達は、草原にある整備された道を通って行き、森に入った。

この森には、わかりやすい名前がついていた。『狼の森』、名前通り、狼系モンスターが頂点にいる。といつてもこの森のモンスターはレベル1～10なのでよっぽどへマしない限りは死なないそうだ・・・シルクの情報より。

確かにそのとおりでレベル3のチャイルドウルフを相手に着実とアーツや闘い方を身につけていった。俺はレベル4、シルクはレベル6となつた。

もう少し、奥の方へ行こう。という事になつて行つたら、前から五匹、左右背後からも何匹かに囲まれて今にいたる。

ついたき倒した白狼でレベルアップのファンファーレがなつ

たが喜んでる場合ではない。

「何か、大技はないのか形勢が逆転するよつな」と、俺

「そんなものがあれば使っています。」と、シルク

「じゃあ、地味に一体ずつ倒すしかないのか

「ええ、じゃあまた」とシルクは背後にいる方の狼を倒しにいつた

俺はまず数を減らすためにチャイルドねらいでいた。

アーツ《ダッシュ》によりシステム補助の加速をして、チャイルド一匹を斜めに切って一撃で葬った。

一匹が襲ってきたので、アーツ《バックステップ》で交わし、スキル《両手大剣》のアーツ《ソニックエッジ》を使い、隙だらけの白狼一匹に衝撃波を当て消し飛ばした。

- - - 残り四匹。

思いの他一撃で葬れているのは、一概に『ゲイルソード』にあつた。トルの使うアーツのほとんどが風属性にあたるので『ゲイルソード』の風属性付加がいい作用をもたらした。

この後、^{ダッシュ}切る、『バックステップ』のパターンに嵌めてそろからないうちに倒した。

俺は七匹を倒し終えたのを確認して振り返った。シルクも最後の一匹なのか『袈裟切り』を使い倒した。

シルクは振り返り走つてこっちへ向かって來て

「急いで、この森を抜けよう。これは異常だ」「ああ」と言つた時には手遅れだった。

俺達二人の目の前にポリゴンがいくつも出てきたからである。

story 『ゲイルソード』（後書き）

次回予告

シユ「シユイドの次回予告」コーナー。今回はジン君をゲストとしてお呼びしました」

ジン「どうも、ジンです。霧夢ギルドで生産職をやっています」

シユ「ジン君は生産職として店を持つていますが『両手大槌』使いとしても優秀です」

ジン「ヒカルでシユイドさん、シルクとトールは」

シユ「…………彼らは用事があつてでれないそうです。ふふつ」

ジン「シルク、トールいたら返事してくれー」

シユ「それでは、また次回予告です。さよならトール君シルク君

ジン「ー」

不幸にも俺達は突発性エンカウントに出くわしてしまった。

俺達の目の前のポリゴンがすぐに完成していった。

銀色の毛並みの狼、《判別》スキルによつてレベルと名前が見えた。

シルバーウルフ、レベル20・・・10以上も差があつた。
俺のレベルは7、シルクも上がつているだろうがせいぜい9レベル
ぐらいだろう。

「どうする」

「僕が時間を稼ぐから君は逃げてくれ」

「何普通にカツコイイセリフを言つてるんだ」

「いや、僕は・・・」

「俺はぜつたに逃げない。たとえ死んだとしても友を見捨て
るような真似はしない」

「トール・・・」

トール内心

よつしゃー、決まった。今のは我ながらなかなかいこと言つ
たぜ。シルクの好感度アップ成功。

「死力を尽くそうぜ、それでダメだつたら悔いる事はないじゃ
ないか。・・・・・行くぜ」

「ああ！」

トール内心

俺、こんなにカツコイイセリフ連発していいのだろうか・・・
・まさかの死亡フラ・・・いやいや、まさかね〜

俺は《ダッシュ》で銀狼の正面に突っ込んだが途中で《サイド
ステップ》により直角に横にずれた。すると俺の背後で今まで隠れ

ていた炎球が銀狼に直撃した。

これは、チャイルドを狩っていた時に出来たコンビネーションアタックだ。銀狼から見れば俺が前にいて死角になっていたので俺がされた時に突然炎球が出てきたように見える。

一割とまではいかないが目に見えるぐらい減ったことがわかつたので、倒すことは可能だ、と確信した。

俺は、銀狼が炎で怯んだ隙を見逃さなかつた。《ダッシュ》で近づき《ソニックエッジ》を斬撃と衝撃波の一いつともを浴びせた。

銀狼のライフポイントの三割は削つた。さすが大剣としか言いようがない威力だ。白狼を一撃で消すアーツは伊達ではなかつた。

だが《ソニックエッジ》はもう一回しか使えなかつた。大技は決まってAPの消費が大きかつた。ここではMPマジックポイントのようなものでAPアーツポイントを消費する。

一回でも外せばそのぶん決定打を入れられなくなる。シルクも同じであつた。スキル《初級炎魔法》のアーツ《ファイアーボール》を四発撃つ分しかなかつた。

俺は、隙をつくるためにも銀狼に立ち向かった。

『ダッシュ』をして銀狼の横腹目掛けて大剣を振り下ろした。

だが、空を切るだけだった。初めは奇襲でうまく攻撃できたがここからはそういうこともないことを悟った。

銀狼は速かった。チャイルドや白なんて比較の対象にもならぬい。

接近戦を俺にまかせていたシルクも参戦したが、いつこうにかすりもしなかつた。

唯一の救いは攻撃は見切れるだけだった。

攻撃の瞬間、初動があつて・・・・ん？

いや、待て。攻撃見切れてるよ、という事は・・・

俺は、銀狼の攻撃の初動。体当たりに近い突進する前の後ろに下がるのを再度確認した。

やつている

俺は突進を交わし、次の突進の初動を待つた。

・・・・・ きた！

俺は、《ダッシュ》で出来るかぎり距離を縮め、《ソーックエッジ》をお見舞いしてやった。

さらに、その隙を逃さないために「シルク、袈裟切りだ」と銀狼の横方向にいたシルクに指示を送った。

シルクの《袈裟切り》もヒットし銀狼のライフも残り五割を切った。

ここで俺はさらに《袈裟切り》で怯んでいる銀狼に突進気味に突きをし切り上げた。

銀狼のライフの残りが四割を切ったのが見え、「よし」と俺は口にだしてしまい。それを聞いたシルクも顔に余裕ができたように見えた

だが、銀狼はただの狼には終わらなかつた。

storuy9 銀狼（後書き）

次回予告

シユ「なんと、今日はいつもより長めで行つ。シユイドの次回予告
「一ナーハー」

シユ「なお、今回は私一人での「一ナーハー」

シユ「……こじりがいがないのでやつぱり誰か呼びます。メー
ルを送るわ・・・『早く来なさい、来ないと・・・ふふつ』と、
これでいいでしょ？」

シユ「ではまあ、『あらの「一ナーハーから』

シユイドさんのアーツ紹介「一ナーハー

シユ「『あらでは説明不足だったアーツを紹介する「一ナーハー』です」

トーラー「着いたわ」

シユ「いいところへ来てくれました。これから君が使っていたアーツについての紹介ですよ」

トーラー「いや、まず呼び出した理由を・・・」

シユ「えへ、今回は多用に使用されていた《ダッシュ》について
・・まず、このアーツは《歩法》というスキルのアーツです」

トー「これ、次回予告か…ショイドさんの気まぐれで呼ばれてなかつたのか」

シエ「そこ、うるさいですよ。おつと失礼。アーツ《ダッシュ》は左足に重心を傾けて一秒間ためて前進したらシステム補助により直線で速く移動することができなおかつAPも消費しない優秀なアーツです。ただし、再度使用するには20秒待たなければなりません」

シル「失礼します。遅くなりました」

トー「よつ」

シル「あれ、トールも呼ばれたのか？何かショイドさん語つてるけど」

トー「俺にわかることはアーツについて語つてることこれが次回予告ということだけだ」

シエ「続いて《ソニックエッジ》。このアーツは《両手大剣》スキルのアーツです。剣で縦切りをしてついでに風属性の衝撃波が飛びアーツです。技の速度もそこそこ早いので大剣使いの人は上位の方でもよく愛用されます。ただし、APの消費には注意です」

トー「なあ、俺達なんで呼ばれただろう」

シル「僕が分かるわけないじゃないか」

シエ「ふう、終わった。それではまたの次回予告でお会いしましよう」

トー「え、終わった？なんで呼んだ」

シル「トール、たとえ勝てないとわかつていても鬪わないといけないことがあると思つんだ」

シヒ「いや～、呼んだのはいいんですけど……おっと、鬪つ戻ですか。いいじょう。…………ふふっ、まめり、ひょひょ」

シル「ありえない。あ――」

トー「シルク――、ちくしょ――。よくもシルクを――」

シヒ「ふはははははは。むだむだむだ」

トー「あ―――。ばけも・・・・・・」

シヒ「ふふふ、ほんとに残念です。」

銀狼のライフを七割近く削ったが、ここからが悪夢だった。

グルルウと唸り声を上げたすぐに銀狼は身体を鋼鉄のように金属化していく。いうなら銀化か

「こいつ、ライフが致死量になつたらアーツを使うのか

「え、モンスターもアーツ使うのか

「あとで説明するから今攻撃のチャンスだ、行くぞ

俺は、知らなかつたモンスターがアーツを使つことを……いや、今は目の前の敵に集中だ。

身体が全部金属化するまで動けそうにないのを理解し完全に金属化するまえに攻撃した。

俺は頭を、シルクは背中を狙い切りつけたが、キイイイイインといつ音ともに弾かれた。

だが、俺は諦めず最後の《ソニックエッジ》をお見舞いしてやつた。

それと同時に銀狼は完全に金属化したので《ソニックエッジ》
ヒット^{バックステップ}後で距離をとった

信じられないことにライフはほとんど削れる事はなかつた。さ
つきまでとは物理防御力違いすぎた

完全に金属化した銀狼は軽く飛び上がり回転し始めた。

俺もシルクもその行動に一つだけすぐに理解した、攻撃がくる
と。

俺とシルクは高速回転し始めたものに集中した。

その直後に、回転している銀狼が動いた。

車のタイヤの如く前進してきた。

- - - 速い！

ほぼ一直線だがかなりのスピードで俺とシルクの後ろにあつた木を一本破壊していた。

俺とシルクの間を通して後ろの木に衝突したようだった。驚愕の威力だった。

防御力がありえなくなっているのに攻撃も威力が増してはもう勝ち目がない

そんな風に考え俺は「なあ、逃げ・・・」まで言えたがここから先はシルクの言葉に消された

「トール、君は言いましたよね。死力を尽くそう、それでダメだったら後悔はないと、僕らはまだ戦えるライフが尽きるまで」

その言葉にはっとさせられた。

そうだ、まだライフは残っているのになに諦めているのかと

「悪い、シルク。俺は全力で奴を倒すぜ」

この俺の言葉とともに二人は動いた。

俺は、弾かれながらも着実に金属の身体に打ち込んでいった。

シルクも《ファイアーボール》を確実に当たるように狙いを定めて一発当てた。

その攻防戦をおこない俺の残りライフが一割を切って、銀狼ももはや一割。

やれる！と思ったがダメだった。最後の最後で大剣を弾き飛ばされてしまった。

無防備になつた俺を銀狼は無視する訳がなく突進してきた。

死んだ、と思ったが

残り、目の前一メートルぐらいだろうか、そこで一本の槍が金属な銀狼を貫いていた。

次回予告

トーハー「はい、今日は余計なものがないので本来の次回予告ローナーです」

シル「ちなみに、余計なものはギルドの会議でこれなくなりました」

トーハー「ええと、次回では新キャラがでてくるやつです」

シル「……余計なものがいないだけです」
トーハー「平和ですね」

トーハー「さういえば、まだまだアクションシーンも入ります」

シル「次回……」

シヒ「待つた——、次回、ヴァリアブルアタッカー。三つの武器
が交錯する。それでは」

？？「待て、くそ。何処に行きやがった」

シル「副ギルドマスターどうしました。しかも、本編に出てないか
ら名前の表記?になつてますね」

？？「そんなことはどうでもいい。シハイドはビリした。あの野郎
会議中にいきなり抜けだしやがった」

トーハー「シハイドさんならあつたにありえない速度で走って行きまし

たよ
「

？？「助かる、サンキューな。・・・・・ショイドオオ、姿顯せ～」

トー「結局、ショイドさんに搔き回されたな・・・次回予告も持つ
ていつたし」

シル「トール、僕らは所詮このパートナーでは活躍出来ないんだよ」

トー「オチもないしな」

シル「ああ」

トー&シル「・・・・・」

story11 ヴァリアブルアタッカー（前書き）

いつも、ジャッ口です。

文章が短くて話数が増えてもあとがきのネタは尽きない・・・
とても不思議です。

突如としてあらわれた槍によつて銀狼はライフを失つた。

「ふう、やれやれ。大丈夫か？」

槍が飛んできた方からその声が聞こえたのでそつちへ向いた

茶髪で短髪、耳に銀のイヤリングの眼は黒、体型はスリムで筋肉質、身長は180ぐらいそんな人がいた

「んん。シルクじゃねーか。俺だ、俺、ハンクだ」

「え、どうしてここに。ハンクさんはクロル山脈に行つてたのでは」

「この人はどうやらハンクという名前らしい。ちなみにクロル山脈は下級ドラゴンがわんさかいるらしい場所だ

俺は話しつついていけなかつたのでそのまま二人の会話を聞いていた

「突発性エンカウントあるよな。ここに銀狼のエンカウントが
多数確認あるから行くつこでに調べてついでに倒しとけとショイド
さんに頼まれたんだが・・・・・はあ」

「そりなんですか、」ちぢらハンクさん。じつは最近入ったト
ールです」

やつと紹介されたので俺は名乗った。

「トールです。やつせはあつがとうござれこました」

「ハンクだ。なあに、困った時はお互い様だ。よろしく」

俺達は一旦王都まで戻ることにした。ハンクさんはクロル山脈
へ行くには一度森をでないといけないので一緒に森を出ることにし
た。

森の中を歩きながら会話している時にシルクがハンクに質問し
ていた

「やついえば、ハンクさんレベル上がったのですか」

「いや、それがショイドさんの報告で銀狼が五体はいるって言われて『全部片付けておいて下れ』って。で昨日からこもつてやつきて五体目……はあ」

「ため息がたえませんね」

「シルクにトール、くれぐれも気をつけろ。レベルが高いとその分ショイドさんに頼まれ事が多くなるからな」

そんなハンクさん大変そーだなー、と呑気に構えていたら

田の前にまたポリゴン群が出現した。

「あー、くそっ、お前ら一人は下がつて。俺が片付ける」

俺達が下がった時にポリゴンが形を生成して一匹の黄金色の毛並みの狼が出てきた

俺は即座に《判別》で確認した。『ゴールドウルフ、レベル?、判別スキルはレベル差20まで見ることができるが、今の俺のレベルは銀狼の経験値で11になっている。だから金狼はレベル31越えのモンスター

俺は微力だが力にならうと前に進んだがシルクに止められた

「トール何やつてるんだ」

「シルクっ、あのモンスター・レベル相当高いぞ少しでも加勢しないと」

「落ち着け、僕らだと一撃死だと思つからいつても無駄だ。それに・
・・・・」

「それには」

「ハンクさんはかなり強いよ」

と、最後にシルクに言われハンクさんと金狼の闘いが始まろうとしていた。

ハンクさんが先に動いた。そして終わりの始まりでもあった。

ハンクさんは槍を投げた。もちろんただ投げた訳ではないスキル『長槍』のアーツ『スローランス』だ。

さらにハンクさんは槍の後を追つよう走り出した……よつて見えた。うまく言えないのは彼の攻撃、移動が早過ぎるからだ。

槍は命中して金狼の肩を射ぬいた。さらに追い撃ちといわんばかりに《片手斧》スキルの《ストライクスイング》をお見舞いしていた。・・・・「」でありえない事実に俺は気づく。

彼はメニュー画面を開かずに武器を交換していた。

普通はメニューの装備欄に武器を一つだけセットできるが、そこでの武器をセットし直さなければ武器を交換する「」とはできない

俺はおかしいのではないかと思いそのことにについてシルクに聞いた

「なあ、シルクあれはなんだ。なんで武器がなんども変わっているんだ」

「……普通は武器は一つしかセット出来ないし戦闘中に武器を交換はできない。けれどハンクさんの持つているスキルがそれらを可能に出来るんだ

『ヴァリアブルアタッカー』というスキルなんだけどこのスキルの初期アーツの中に『三器装備』というものがあつて片手剣、長槍、片手斧を一つずつセット出来るんだ。

そして、『連鎖攻撃・剣』『連鎖攻撃・槍』『連鎖攻撃・斧』がある戦闘中に武器を変えれるアーツだよ。例えばさつき使っていた『スローランス』からの『ストライクスイング』これは『連鎖攻撃・槍』のアーツで一つの技なんだ

・・・・あ、もう終わるよ」

ハンクは斧を持っていた。金狼は金属化していたが、すでに残りライフは一割とちょっとしかなかった。

ハンクは『片手斧』スキルの『フォールインパクト』空中に跳躍して斧を思い切り投げ落とすアーツを使い小さなクレーターが出来ていた。交わされたはずが、金狼は足を引きずらせていた。

謎はすぐとけた、ハンクさんが持つていたのは片手剣しかも『片手剣』スキル『スラスト』のアーツ使用後の構えで地上にいた。

物事をうまく理解し遅れているのはハンクさんの動きが加速しているからだった

その後、ハンクさんは片手剣で一度ほど金狼を斬つて倒した。

story11 ヴァリアブルアタッカー（後書き）

次回予告

シユ「シユイドの次回予告」コーナー。今日は名前もまだ出でない副ギルドマスターの『ペー』です

? ? 「いや、シユイドお前なんで俺を呼んだ。今話にでてきたハンク呼んでやれよ」

シユ「『ペー』は、ギルド内でペーしていく、最近よくペーしていたりします」

? ? 「おい、シユイドさつばこ『ペー』を『ペー』あるな。ええい、齧『ペー』い」

シユ「ははははは。ざまあみろですね。キャラも確立しませんしふァンの方もまだいないはず。いつも、私を追いまわ・・・・・暴力反対ですよ」

? ? 「よし、黙らせた。次回、副ギルドマスター。俺がでてくるぜ、ヒューパーー。待て、シユイドオオオ」

story12 副ギルドマスター（前書き）

いつも、ジャッ口です。

前書きに顯れたが何もない事実！
ごめんりとお読み下さい

ハンクさんの闘い方は芸術の域だった。武器三つを巧に操る様はすこかつた。

「よし、いまのでレベルが上がったぜ」

「何レベルになつたんですか」

「レベル68だ、ちなみにさつきの金狼は58レベルだったわ

『うつで強いわけだ、と俺は思った。

その後、俺達三人はギルドまで戻った。

ああ、ハンクさんは金狼との戦闘でレベルが上がつたので一旦戻る事にしたらしく一緒にギルド戻つた

ギルドホーム前

「ねえ、何か中騒がしくない」と、シルク。「何となくわかり

「そうだ」と、ハンク。いや、騒ぎの現況一人しかいないだろと、思つて口にしようとしたら

「そんなの……」

「と~~~~~。おや、ハンク君達お帰りなさい。今、私は忙しいのでさらば」

「ビュウウン。という効果音がつきそうな速度で街中の人混みの中に消えていった。

それにしても速い。と感心しているともう一人腰に剣を一本吊つた人が顯れた。

「くそ、ビヨ行きやがった。おっ、ハンクかショイド見なかつたか」

「見ましたが追つかけるなら無理ですよぉ

「あああああつ、くつそ、ギルド別の大会打ち合せがあるといいのに。あ~~~~~」

紹介しよう。ショイドさんの事を呼び捨てできる人の一人副ギルドマスターのベクトさん。

さらに補足すると副ギルドマスターの方は四つの支部がある、ギルドホームに必ず一人いるようにしてありベクトさんは「王都支部」にいます。

「お前ら、今戻ったのか。だつたら掲示板確認しつけよ。おもしろいイベントがあるぜ」とそんなことを言つてベクトさんはホームに戻つていった。

「ベクトさんでもショイドさんは捕まえれないんですね」と、何気なく呟いた。それに

「ん~、ああ単純な速さだけだったらショイドさんに追いつける奴あうちのギルドだつたらホリイさんとシエルぐらいだぞ~」とハンクさんが答えた。

ちなみにホリイさんとシエルさんは一人とも霧夢ギルドの副ギルドマスター。面識はないが聞いた話だとどちらも女性プレイヤーでホリイさんはユニークスキル『魔人』を持っていて、シエルさんはユニークスキル『虚構』を持つてるらしい。

霧夢の副ギル全四名はみんなユニーク持ちらしい。

そんな会話をしながらホームに入り掲示板を見に行つた。

『第一回ギルド対抗闘技大会』

でかでかと、掲示板を埋め尽くしていた。細かい内容が下に書いてあった

『一週間後に行われる二回目のこの大会。各ギルドから四人一組のチーム一つとギルドマスター一人の一チームでトーナメント形式で行われます。

参加するギルドは前回と同じく第一位から第八位のギルドです。なお四人チームには副ギルの四人に選びました。

不服のある人は誰でもいいので副ギルを一人倒してから講義へ来て下さい。

予約チケットのみ参加ギルドは半額となっています。当日チケットは通常料金ですので注意してください

「これは、また一波乱おきそつな気がした俺だった

次回予告

トーハー、始まりました。次回トーハー

シル「今回はゲストに霧夢の魔ガルドもあるベクトさんご来てもらいました」

ベクト（以下ベク）「おう、よろしく

トーハー「では始めこ、うさこから伝言があります……『やあ、ベクトめんどくさいから代わつて出とこトナセ』だわつです」

ベク「なあ、そのうせんショイドだひ」

シル「続きまして、うさこからの報告です……『来週の定例会あります』だそりです」

ベク「こや、おこ出席しろよ。お前はガルドマスターだひ」

トーハー「次回、シェイドの陰謀。俺達はシェイドさんの手のひらの上に躍りきれてこむ」

シル「ベクトさん、僕達はシェイドさんの指示通りに動いていたのです。嵌められましたね」

ベク「へへ、シェイドオオオ~~~~~」

トー「やひしなこと次回予告では生きていいなー!...」

story13 実力（前書き）

いつも、ジャッ口です。

最近どんどん文章の質が落ちているような気がしてならない。

・・・・仕切りなおして、今回は文章量を増やしてみました。

今後一話ごとの文章量を増やすことに伴って更新速度が変わるかも

しません。

気長に待つてもらえるとうれしいです。

一週間後にあるギルド対抗戦。掲示板に書かれた言葉にア然としていた。

『不服のある人は誰でもいいので副ギルを一人倒してから講義へ来て下さい。』

この記述だ。これってシェイドさん的に何を考えているのだろうか

「ほう、こいつあ・・・よし、ベクトルさんと決闘していくぜえ」と、ハンクさん

「ハンクさん。うちのギルドってこんな身内を倒してこいつてことはよくあるんですか」と、俺は疑問をなげつけた。

シルクも似たことを考えていたのかハンクさんの顔を見ていた。

「滅多にないぞお・・・あ、そうかトールもシルクも前大会を知らないのだったなー。だったら俺が教えてやるか

前大会もこれと同じことがあったんだが・・・あー、めんどくせ～からシェイドさんの意図だけ簡単に言つた。

副ギルは全員ユニークもちだろ～。今はもう少ないが『強さ』を求める奴は多くいるから、腕試しでそいつらがシェイドさん達に決闘を受けにくるわけだ。

ま～、そのことじとくを拒否した訳だが、さすがにギルド内でも煮えたぎらないな奴らが多くいたからな、『副ギルを倒してチームに参加したい』を理由にこの期間だけ決闘していい事になつてるんだ。

シェイドさんの大きな気まぐれだと思つがな

長い説明を俺達は聞き、ハンクがベクトさんの方へ行くのを見た。

「ベクトさん、決闘いいですか」

「お、ハンクか。いいぜ受けてたづせ」

そんな、会話が進んでいてホーム内の人達もいろいろ言いだしだ。

「ハンクがんばれ～」「負けんなよ」「ベクトさんなんて倒してしまえ」と、ほぼハンクさんを応援する声しかなかつた

「なあ、シルク。ベクトさんとハンクどっちが勝つと思つ

「ハンクさんが勝つでほしにナビが分ベクトさんが勝つと思つ
」

と、俺達は俺達での決闘について話していく。

「みんな、ハンクさんしか応援してないけどそんなにベクトさんは強いのか

「僕は実物を見たわけじゃないからどうす」このか知らないけど、ベクトさんの《神速剣》ってこのゴーコースキルがすごいらしいよ

そこまで言つてみんなが動き出しおので俺達も動き出した。

このギルドホームには闘技場があり、みんなそこへ向かつた。

「」と叫びが訓練や一対一での戦闘を行うには申し分ない広
きである。

みんなが見る中一人が一定距離で立っていた。

上方にREADYと出できた。

- - - 始まる。

fighterの表記がでて真っ先に動いたのはベクトルさんだった。

速い。ともかくにも速い。シェイドさんやハンクさんも速い
がベクトルさんはさらに一段階上をいつていた。

ベクトル視点

俺は、シェイドのように『力』の出し惜しみはしないタイプだ。

だから、俺は開始と同時に《神速剣》アーツ《瞬動》を使った。
俺の敏捷パラメータは一倍に跳ね上がる。

一気に間合いを詰めた俺はアーツ《分影剣》を使い虚像の分身
一体を飛ばした。

だが、ハンクは冷静に《スローランス》、風の刃を剣に纏わせ
リーチを伸ばして斬撃をおこなう《スラスト》のコンボで《分影剣》
の虚像は倒され俺の剣とかちあつた。

「やるじゃねーか、ハンク」

「こりは余裕ないですよ、ベクトも。」

と話して、一旦距離をとった。

次に攻撃を仕掛けたのはハンクだった。

《片手剣》アーツ《ウルブストライク》突進系の攻撃で剣を前に飛び込んできた。

ベクトは考えた《ヴァリアブルアタッカー》を使うハンクの攻撃はどれもが次の攻撃への足掛かりになると、だから次に繋げるとしたらどのアーツを繰り出してくるか。

すぐに、二つ《ウルブストライク》に繋がる技を思い出した。一つは《槍》アーツ《旋風》に繋げるか、もう一つは《斧》アーツ《ストライクスイング》に繋げるか、二つに一つ。

だが、俺はすぐに予測がたつた。《旋風》を使うと、《ストライクスイング》は確かに攻撃力が高くていいが技の初速が遅いこれは俺だとわざるとハンクは分かるはず。だから、当たらない《ストライクスイング》は使わず初速が速い《旋風》を使うことを。

剣を前に飛び込んできたハンクの攻撃をかわして槍に武器が変わっていることを確認した。

そして、流れのような動作で《旋風》の構えにつづりつづりしていた。

もともと、読んでいたので《旋風》を止める攻撃をした。

《神速剣》アーツ《三瞬斬》俺の一降りと風の刃二つで三回回時に切り付ける攻撃で無理にでも槍で防がせた。

俺は、このチャンスを逃さなかつた。《神速剣》アーツ《瞬影連閃斬》を使った。こいつは、このアーツの攻撃コンボ中だけ敏捷パラメータを四倍にできる

初撃は突き、次は右肩への斬撃、次は槍への斬撃、次は・・・・と、計48連続攻撃を浴びせた。

ハンクのライフは残り一割を切っていた。

「よし、終わりだハンク。俺の勝ちだ」

勝ち負けの基準はライフの八割を削つた方が勝ち。逆にいえば残りライフが一割を切れば負け

「はあはあ、ありがとうございました。やっぱり強すぎますよ～ベクトさん」

トル視点

俺は、最後のシーンに言葉もでなかつた。微かにしか斬撃が見えなかつたが、あれは間違いなくかなりの連続攻撃。

ハンクとベクトさんが握手して、周りから歓声と拍手が挙がつた。

その後、俺とシルクはさつきの決闘について語り合い。大会の

予約チケットを購入し宿へいった。

story13 実力（後書き）

次回予告

ショ「ファイ ルファン ジー??最高」

ベク「お前は初っ端から何言つていやがる」

ショ「だつて今回story13じゃないでですか」

ベク「ああ、そーだなー。てか、お前クリアしたのか」

ショ「そんな」とはビリでもいいです

ベク「お前がふつた話だよな」

ショ「はい、今回は名前はあるけど容姿についてあまり語られてない人達の紹介です」

ベク「あ~、せめてホリィがいればいいんだが・・・・」

ショ「ストップです。ホリィさんやシヨルさんの情報はどうせ大会が始まつたら紹介があるのでしうつから今回はなしという方向で」

ベク「おい、どうせつて本人聞いていたら知らねーゼ」

ショ「全力で逃げるので大丈夫です・・・おつと、話が脱線しますね。ではではまずこちらにいるベクトサン綴りはVECTSUN

・・・・・

ベク「嘘つくな。誰がベクトサンだ。さんを棒読みするな、そして名前に加えるな」

シユ「しかたありませんね。彼の名前はベクト、綴りはV E C T 身長は・・・何センチ？・・・ああ、そうでした172センチです。黒髪ショートヘアの赤眼ですね」

ベク「お前紹介するなら覚えとけ途中で聞くな。とつ、次は俺が言う番か・・・・・トールか、こいつ主人公なのに容姿の説明もなかつたのか・・・あ〜、身長は168センチ。青髪黒眼、髪型は・・・説明しずらいな。言わなくていいか？・・・いいのか・・・以上だ」

シユ「今は」いろんなものですかね」

ベク「なんか後半できとーだったが。まあ、いいか。帰つて寝るか」

シユ「それではまたの次回予告で」

story14 レッドプレイヤー（前書き）

いつも、ジャッロです。

ユニーク1000人越えていました。

読んでくれている方ありがとうございます。

あれ、何か日本語がおかしいな。でもうれしいからいいや

今はハンクさんの決闘があつた翌日の朝。

昨日、シルクにパーティー組んでレベル上げをしようと誓ったが先約があつたようで断られた

なので今日は一人なのである

「そういえば、俺って今のところシルク以外仲いいやついないな」

といつてもまだ一歩しかたっていない。あまりにも一歩間の内容が濃すぎたため時間が長く感じる。

俺は何にしてもこのまま宿屋で待機しているわけにはいけないと愚いとあえずギルドへ向かった

- - - ギルドホーム前 - - -

また何か中が騒がしい。まあ・・・どうせショイドさんが元凶だらう。と思いながらホームに入った。

中でざわめいている集団のほとんどが掲示板の前に密集していた。

俺は何があるのかわからないから近くの人聞いてみた

「すいません、何かあつたんですか」

「ん、ああ、レッドプレイヤー、ギルドが一つ崩壊したんだよ。しかも三日前ぐらいに、ギルド間で注意があるほどのギルドがだ

レッドプレイヤー……プレイヤーキルPKを複数人行ったプレイヤーのギルド。

ここでは、プレイヤーには三種類ある。《判別》系スキルによりプレイヤーは三色の色により見分けられる。緑、黄、赤。まず緑、これは普通にゲームをプレイしていればこの色である。

つぎに黄色、決闘以外の時に他プレイヤーに攻撃したり、一人までPKをした場合に黄色になる。ただし、誰にだつてミスはある、ということで黄色になつてこけらの時間で20日間誰にも攻撃を加えたりしなければ緑にもどる。だが、逆にまた人に攻撃したりしたら赤になる。

最後に赤、危険域だ。黄色の際に期間内に他プレイヤーへの攻撃、もしくは複数人をPKした際になる。基本的に前者はうつかり、後者は故意にやっている場合が多い。そして、比率でいっても前者より後者の方が多い。

もちろん赤に一度なつてしまつたら黄にも縁にもどれない。

だが、赤プレイヤーにはデメリットがある。デメリットとして、一つにデスペナルティが1レベルダウンになる。そして、もう一つモンスターと同じ対象になる。

普通に考えるとこれほど厳しいものはないが、ほとんどの赤プレイヤーはPKによるアイテムドロップをおこなつている。

決闘以外の方法でPKをおこなうとPKされた人の装備品の一つが一定確立でドロップされる。

他にもいろいろ理由があるかもしだいが主にそれらだ。

いろいろと周りの人々が喋っている情報をまとめるとこうだ。

二日前まで活発に動いていた赤プレイヤーギルドが一夜で崩壊した。そのギルドは暗殺や無作為に人を襲う危険なギルドで人数も30ぐらいと多く平均レベル70ぐらいとかなり強くちょうど二日前に霧夢ギルドの上位の人が一人PKにあつていたらしい。

そして、第一位のギルドが偵察に何人かで見張らせていたらしいが昨日の夜に偵察にいた人達全員が何者かに気絶させられ気がついたらギルドホームが崩壊していたそうだ

・・・長々と考えてしまつたが今の俺にはとくに関係のないことだ。上位グループ側の方はここからだとかなり遠いのだ。そんな奴らはあまりここ王都にいない。

俺は話せる相手を探した・・・・ハンクさんがいた

「おー、あ～～～トールか。なあ、君の躊躇がなんだ？」

今ホームに入ってきたばかりのハンクさんを呼んだので状況がわかっていなかつた

俺は整理した情報をハンクさんに伝えたら、驚かれた。

「ハンクさん、皆さんも驚かれてますけどそんなにすごい事件なんですか」

「お前っ、あ～そうかこっちに来たばっかだつたな・・・・・・。いいが、まずそのギルドは赤ギルでも五本に入るほどやばいんだ。なによりレベルが高いのもあるがあいつらは必ずハ人パー ティーで来るんだ一人に対してだ」

かなり、えげつない話だと思った

「そんな集団行動のエキスパート達が固まっているギルドホームを潰すことはかなり厳しいはずなのにその正体不明の奴はたった一夜で滅ぼしたんだぞ。誰だって驚くぜ。第一そんなことが可能そうな奴は大半有名人だ。そんな奴がギルドを潰したなら名前がでてくるはずだ」

「この喋る直前に得た情報はそのギルドを潰した人はたつた一人だということ

「『とこう』とは、潰されたことにも驚きですが。そんなすごい人がいることも驚きの一つなんですね」

口調が変わっているが今言つたのは俺だ。いくら俺でも相手が尊敬

できる強い人や年上には敬語ぐらいは使つぜ。

「そういえば俺を呼んだが。すまねえ、なんか用があつたか」

「ええ、低レベルの時、何してましたか」

「ああ、俺の場合あの狼の森でレベル上げしていたな・・・。
・まあ、お前ならあの銀狼と結構いい勝負していいたしソロでいつた
らかなりつまいんじやないのか」

やはりあそこは今の自分のレベルにちょうどいいのか。しかし・・・

考えていた俺をみたハングクさんが

「もひ、銀狼金狼はでね~ぞ~。あいつらは金狼を狩った時点
であこにはもひSEはsudden enco

といつ情報をくれた。ちなみにSEはsudden enco
untの略で突発性エンカウントのことだ

「ありがとうございました」と礼を言い、「の一週間何をやる

かを決めた

あの森でソロプレイ！

次回予告

シユ「ベクトルへ、最近あなたばかり出でていますか」

ベク「じゃあ、さらに追い打ちかけるぜ……お前は本編に当分ででこない」

シユ「な……」

ベク「さあまあみろだ。田のむりのおこないがわりいからに決まつてつだろ」「

シユ「私のどこがいけないです。少し面倒だから会議を抜けだし、ひなたぼっこ日和だから会議を抜けだしたり、蝶々が飛んでいたから会議を……」

ベク「抜けだし過ぎだ。そして、最後のは嘘だろ」

シユ「おお、神よ私をお助けください」

ベク「お前なんか助けるかつて」

シユ「なんですよ、助けてくれないなら私が神になる神倒す」

ベク「おい、どこに行く。……いや、途中からわけがわからんがあれは今からある会議への……ちくしょう、まちやがれ……」
・・・次回、ソロプレイ。あ、なんで俺が言わなきゃならん

いつも、ジャッ口です。

布団の魔力から逃れられない今日この頃。
話が進んできたので一度読者様の質問に対して答えたいたと思つています。

活動報告に質問用のを作りますのでどちらのメールもしくは感想など
で書き込みをお願いします。

期限はとくにありませんので疑問に思つたことはどしどし書き込んでくださいできるかぎりお答えします。

最後に、答えられなかつた質問はこの先本話で語られる・・・と思ひますのでご承下さい。

・・・・・慣れない」とはするべきじゃないのだらうか・・・・・
まあいいや。

まず、ソロプレイのメリットと「トメリット」について語らひ

メリットとしては倒したモンスターから得られる経験値、ドロップ品をすべて自分のものにできること

デメリットとして、モンスターに囮まれたり状態異常があつた際に一人ですべて対応しなければならない。要は死ぬ確率が高くなるわけだ。

俺の今のレベルは11あの森は入口付近は3~5レベル帯、真ん中ぐらいになると5~10レベル、さらに奥へ行くと12~15となる。

シルクといった際には真ん中ぐらいのところだつたと思う。奥まで行かなければ俺一人でも大丈夫そうなレベル帯だ。

自慢じゃないが俺の攻撃力はゲイルソードによつてかなり高くなつてゐる。レベル8までの狼なら『ソニックエッジ』の衝撃波だけで倒せる。

「ここまで思考してギルドをでて準備をすることにした。

そういうこの前、最後はハンクさんに止めを刺されたが銀狼からアイテムをドロップしていた。

『銀狼の尻尾』……これは高く売れるのだろうか。わからぬこのどりあえず《マルチーズ》へ行くことにした。

「へい、いらっしゃい」と迎えてくれたのは久しぶりの登場のグラサンに輝くヘッドのジ……ローラン

「どうも! ぶりです。ジローさん」

「|田しがたつていなによな……俺の名前はジンだ」

おつと俺としたことが失敗した。ジンさんでしたねこの人

「で、ジンさんこのアイテムなんですが……」と俺はメードーにある《銀の尻尾》を物質化させ見せながら

「どのくらい値がりますか」

「ん~、銀の尻尾か……2万ってど~か……お~今や
れ在庫切らしてるから俺に売つてくれるか」

「えつ、2万。2に〇四つで……まじ。これってそんな高い
んですか」

「いや高いって……あ~すまねえ、つこじちの金銭感覚
で言つてしまつたな。今のお前なら確かにいい値だ。だがこれから
強くなつていくと100万といつ単位がぽんぽん動くぞ」

2万なら申し分ない売りつ……だが

「じゃあ、売りますが1万で」

「お、なんで」

「ジンせんじを忘れたんですか1万の借り……これ返さない
と弱みにされるでしょ」

「あの剣の代金か。おう、わかつたぜついでにシヨイドせんじ
も報告しへば『貸し借りはなくなつた』って」

『銀の尻尾』を売りお金もらい店をでた。

後は回復アイテムの仕入れだ。

回復アイテムは前回と同じく一番安いライフ回復用の怪しい緑色の液体が入った瓶を10本買った。ちなみに味はリンゴ味だ。

必要なアイテムを揃えたので森へ行つた

- - - 『狼の森』 入口

着いた。

まず俺は入り口付近にいる子狼で闘いに慣れようと三匹ほど一対一で闘つた。攻撃パターンは狼系はほぼかわらないのでいいショーミレーションになる。

慣れてきたので次は三匹固まっている子狼に一対三で挑んだ。奥の方へ行つて万が一複数の白狼と闘わなくなつたさいのショーミレットは必要だ。

三匹を倒して奥へ行つた。

- - - 30分後

「はつ、はつ」

俺は息を切らしながら走っていた。なんだろうか、また白狼に囲まれた。今回は逃げ道があつたがしつこくついてくる狼13匹

俺は再使用可能になつた《ダッシュ》で差を開いた。余裕ができたので後ろを見た。だいぶ離れているが明らかにこちらに向かってきている。

ふと思つた今敵は固まつてまつすぐこちらへ向かつてきている
と・・・・チャンスじゃないか

白狼を一発で消せるアーツ《ソニックエッジ》だが欠点がある
としたら一つ衝撃波が届くまでにラグがある。しかたないことだ中
距離から放つと動きが速い狼には当たらない

だが、今の状況はかなりいい。どんな生き物でもまつすぐ加速
したものが曲がつたり減速したりすることは容易にできない

俺は田の前から向かってくる狼達に《ソニックエッジ》をお見舞いした。

1~3匹中6匹の消滅。さらにまだ距離があったので再使用可能時間まで待ち一発目も喰らわせた

残り2匹。後は普通に近接戦闘、斬つて躰しての繰り返し。

倒しきれておもつた。これはいい作戦じゃないかと

次回予告

ショ「へい、大将なんにしやすか」

ベク「……」

ショ「おっと、反応が冷たいですね。にぎやか」

ベク「悪いショイドーつづつ消化をかけてやるわ」

ショ「ええ、かまいませんよ。はい、グレートマスの『じゅつ

ベク「おひ、わり・・・・じやなくて。なんで板前の格好なんだ。なんで寿司握つてんだ。そして最後になんだ始まりの喋り方は・・・・はあはあ・・・・」

ショ「まづ一番最初の答えは板前さんになりたかったから、2つ目は『板前』スキルを獲得したから、最後のはギャップ萌え」

ベク「だめだ、つづく要素がまだあるのにつつこみ力が足りねえ」

ショ「ははははは、あなたのつっこみ力では私のボケ力にはかなわないのですよ。はははははははは・・・・トゥービーコンティニューー」

ベク「続かねーぞ」

story16 謎の祭壇（前書き）

どうも、ジャックです。

アクセス数が増えてニヤニヤしてしまつ今田この頃

次回更新が諸事情により執筆速度が遅くなるかもしれません。

・・・前回にも似たようなことを書いたような気がしますがで
るかぎり頑張ります。

俺は再度森の中を走った・・・いや走り回った。

なるべく多くの狼を集めるために白狼がいる場所へわざと行き
おびき寄せる

そつ、やつとと同じ要領で《ソニックエッジ》で一方的に倒す
ため

俺はこいつらの闘い方のパターンを見つけるのが得意らしい。そして、
それを見つけることが好きである。最終的に効率ばかり考えてしま
うことが欠点だが・・・

そんなことを考えながらまた一つの群れを倒した

それからどうだろ?頃について6時間ぐらい経つただひとつ
周りは森のせいか暗い。

最後に自分のレベルを確認したときに達成感があった。俺のレベルは16になっていた。

そして、俺は初日レベル上げを終え、ギルドへ向かつた

-----ギルドホーム内

「よつ、シルク

「トールが、ハンクさんから聞いたよ。どうだった

「すげえ順調、一気に5レベル上がった」

「え、ほんと」と疑われたので俺のステータスを見せると同時に今日やっていたことを言つた

「あ～そうか、君は攻撃力があるからそんなことができるのか。
考えもつかなかつたよそんな方法」

「そういうシルクはどうだったよ」

シルクの先約は他の人とパーティーを組んで行くということだつたが

「酷かつたよ。何故か僕が行つた時には・・・・・」

と成果や愚痴などを語り合つて今日が終わった

- - - 五日後

結局俺はあのやり方が一番効率がいいと思い五日間同じ方法でレベル上げをしていた。いや、真ん中のレベル帯だとだんだん経験値がものたりなくなってきたので、奥へ行つた。

奥にいたのは相変わらずの白狼ではなく、白と銀の強さの間のグレイウルフ灰狼がいた。だがスピードが少し上がったのと防御力が高くなつたので始めは苦戦したがなんども闘つにつれて攻略していった。

今の俺のレベルは19になつた。そうそう、あと《両手大剣》の熟練度496（上限1000）と上がり、新しいアーツも7つ増えた。

そんな大会が催される2日前だ

- - - 『狼の森』 奥地

「ラスト」

俺はレベル15の灰狼と戦闘をおこなっていた。こいつを倒せば『両手大剣』スキルの熟練度が500になりレベルも20となる。俺は、始めて突進系アーツ『スラッシュ』を使い敏捷パラメータの上昇とともに突き攻撃をした。

灰狼は左の方にこれを躱したが俺はそれを読んでいた。

即座に左へ向き『ソニックエッジ』の強化版『ソニックエッジ・散』を放った。

赤色の衝撃波が灰狼へ向かった。途中で刃のような衝撃波が六つの刃に分裂した。灰狼に六つの刃が襲つた

灰狼に五発命中させている中俺はさらなる追撃をおこなつ

『両手大剣』スキルはとにかくダメージ技が多い。灰狼ぐらいいだとアーツを一つほど当てれば消せるぐらいに・・・

アーツ《フレムレイド》・・・斬撃と爆発の剣撃・・・を使い灰狼に当てた。

爆発音が森に響きながら狼は消滅していった。

「よし」と言つて倒したことを再確認して自分のステータスを確認した。

レベル20《両手大剣》スキル熟練度503・・・といつ目標が達成できつい「よっしゃ」とガツツポーズしてしまった。

だがこれだけで終わらなかつた・・・帰り道で事件は起つた

俺は、目標達成できたことに喜びながら道を戻つていたが一向に森をでない。

おかしいと思った俺はマップを開いた

「うおっ、なんだ」

マップの画面は真っ黒になつていた。バグか?と思いログアウトしようとしたが・・・

ログアウトが使えない・・・いや、正確には敵から攻撃を受け続けている常態と同じ扱いになつていて。

ログアウトできるのは戦闘常態以外の時、敵から攻撃をくらえばその後30秒待たなければログアウトできない。

とりあえずわけがわからぬがもしかしたら歩き続ければ出られるかもしれない、と思い歩みだけは止めなかつた

歩いていくうちに冷静になつたが、今度は謎ばかり増えてきた。

うんうん唸つていたその時前の方に石造りの建造物が見えた。
そこへ向かつて走つた。

- - - 祭壇

石造りの祭壇のようなものだつた。

奥の壁に狼の絵らしきものがりその前には蒼い大剣が突き刺さつていた。

蒼い大剣は気になつたがまづは壁画を見た。大量の狼とそこに
ある蒼い大剣を持った人

見た感じ蒼い大剣を持った人が狼達を操つて いるように見
える。

他に何か変わつたものはないか祭壇を調べたが・・・とくに何
もなかつた。

・・・・この大剣あからさまにあやしいのだが確実に持つたり
したら何かありそうだよな・・・・

「あ～もう考えるのも無しだ。どうせこれしかもうないから手
に入れてしまえ」

俺はなかばやけくそになつて剣を掘んで抜いた。

「・・・・何も起きね・・・・・時間差かよつ・・・・」

時間差で大剣から眩しく光りだした。

ん、といふ言葉とともに俺は起きた。さつき灰狼を倒した場所だった。

「リアルな夢だつたな・・・・・ん」

リアルな夢だと思っていたが右手には蒼い大剣を持っていた。

「あ・・・夢じゃないのか・・・」

ちよつとぼんやりしていたが、冷静になり自分に異常はないかステータスを確認した。

ステータスは・・・異常なしと装備、装備・・・『蒼剣ウルブソウル』?・・・ああ、この大剣か・・・武器の説明は・・・・

『蒼剣ウルブソウル・大剣・蒼狼の魂が宿つた蒼剣。この剣を持つものは狼を操る力を持つ』

なんて大層な大剣だ装備上限は・・・『蒼狼』スキル保持・・・

そんなスキル俺は持つて・・・

そこで、俺はすぐにスキル表を開いた。

・・・・ある。なんだこのスキル・・・

わからないことが増えてきた。大分こちらがわの知識をもった
と思ったがわからなかつた。

とりあえず、シルク達に相談するべくギルドへ向かつた。

story16 謎の祭壇（後書き）

次回予告

ショ「はい、始まりました。ショイドの次回予告コーナー」

トー「久しぶりにまともな前フリだな」

ショ「謎の祭壇に迷い込むトール君」

トー「夢でも見てるのかなあ」

ショ「そして、そこで手に入れた謎の大剣とスキル」

トー「ありえないショイドさんあんたは本当にショイドさんなのか」

ショ「次回、魔武器。彼が持つてしまつた力は・・・」

トー「ベクトや～ん、ショイドさんがおかしいです。まともない」と
しか言つていません

ショ「それでは、またの次回予告でやりますね」

story17 魔武器（前書き）

“いつも、ジャッロです。

PV10000アクセス突破！

多く読んでもうだいてうれしく思います。

-----ギルドホーム内

そして、俺は難無くギルドに戻れた。

まづ、ホームにシルクやハンクがいないか探した・・・・見当たらぬ。

「ひじょうが、と悩んでいた

「おせわ、おじましたかトール君」

「うお」

背後からこきなりしゃべりかけられた。そんなことをやるのは、ついのマスターのショイドさん。俺は突然のことにつづいた

「うお、とは酷いですね。せっかく困つていやうだから話しかけたのですが」

「すこせん・・・・・・

いや、なにがこのではないだらうか。ショイドさんならわからぬことがなさそうだし

「あ～、ショイドさん少し聞きたかったがあるんですナビ・・・・・

「ふむ・・・・・」

俺はショイドさんに一連の出来事を話した。

「・・・・で、これってなんでしょうが?」

手に入れた蒼剣を見せた

「多分、これ魔武器ですね。それと君が手に入れたスキルはユーニクスキルだと思いますよ」

蒼剣は魔武器で《蒼狼》はユーニクスキルだったのか・・・・・・

「・・・魔武器つてあれですか。この世界に一つしかないって

「つ感じの・・・

「ええ、そうです・・・・・まずトール君、君が行つた祭壇での剣を手に入れることがそのスキルの発現条件でしょう」

まあ、やうだらうなと思つた。

「・・・・・」ひいらに来なさい。今ゴニークスキル持ちが血さん
に知れたら一騒ぎになるので・・・・・支部長部屋で話しましょ」

俺はついていった・・・・・いくら俺でもわかることがある・・・・
・ゴニーケスキルや魔武器のよつなレアなものは誰だつて知りたが
る・・・

- - - 支部長部屋

「おや、ベクト。いたのですか」

「むしろお前がいるほうが驚きなんだが・・・ん?あ~と・
・トールか」

「どうせ、ベクトさん」

「ちゅうじよかつたベクトーにもいて欲しかつたんですよ」

「なにがだ？・・・またやつかいことじやないだひつな？」

「・・・・・トール君がユニークスキル持ちになりました魔武器
もちやんと持つてます」

「あれ、だして」とショイドさんと言われたので蒼剣を物質化
させた。

ベクトーさんが近づいてきて蒼剣をじっくり見て

「確かにこの蒼色の大剣は今までに見たことがねえな

ベクトーさんは定位置らしい椅子に座った。俺やショイドさんも
椅子に座った

まず、始めにベクトーさんが口を開いた。

「つーことはだ、当分トールを守る存在をつくったり、そのス

キルについて調べたりしなければならないのか

「そうですね、一日後に大会があるじゃないですかその日になつたらシエルさん達も集まります。なのでその際に今後のトル君の処遇について決めたいと思います。・・・いいですか？」

俺は頷いて肯定したが聞きたいことがでてきたので聞いてみた

「やつぱりこいつのつて噂になつたりするんですかね」

ショイドとベクトは顔を見合させて苦い顔をしたベクトさんが

「いや、すげえぞ実際。俺の時なんかホーム選択した家の前に人がうじゅうじゅいたぜ・・・・つかあればトラウマになる」

続いてショイド

「私の場合は赤プレイヤーに幾度となく襲われましたね。いやですね~魔武器欲しさで狙つてくるのは」

「そりこやーツール。お前の剣名前は何で言つんだ?」

「『蒼剣ウルブソンウル』です。ベクトルさん達の魔武器つてなんですか？」

「俺か？俺のは『神剣レム＝ルーン』と『速剣ヴァル＝ギオン』だ。そんで……」

ベクトルがシェイドの方に顔を向けた。

「私は……」

ドン！という効果音があいそつなぐらい力強く扉が開いた

俺はドアの方を見た。

そこには一人の女性が立っていた。

「シェイド、来たよ」

次回予告

トーリー「…………トールです……『魔葉は陰の謎』」

ベク「よくあた……まあ座つてくれ」

シル「では、始めた」と思います。……前回の次回予告が普通だった件について……ジンちゃんお願ひします」

ジン「これから調べた結果……何かをしてくる」とが判明しました……何かは依然わかりませんがそれに忙しくて次回予告に手がまわらなかつたようです」

シル「ありがとうございます。ハンクさんも何かあつたそうですね」

ハンク（以下ハン）「ああ、あれは俺がバナナの皮でこけた時だつた……普段のショイドさんなり眼を一つで終わらせるはずがないのにバナナの皮だけだつた！」

ベク「なんだトーリー。ショイドがバナナの皮一つしかできない理由はなんなんだ」

シル「皆さん、一度落ち着きましょう……最後にトールがショイドさんの動向を探つていたはずですね」

トーリー「えーっと……ありえない事実が発覚しました……昨日18時39分二箇所でショイドさんを確認……どれもショイドさん

本人と面識のある人の証言です」

ベク「待て、その時間は俺といったはず・・・」

トー「実は違う場所でシルク、ジンさんも会つていました・・・」

全員「・・・・」

ベク「・・・わからない」とが増えたが引き続き我らHUSH（シエイド究明委員会）はシエイドの調査を行つー」

全員（ベク以外）「「「イエッサー」」

ベク「じゃあ、以上で解散だ」

「……………」
「……………」

「……………」
「……………」

story 8 シュイードリヒト（前書き）

いつも、ジャッロです。

毎回前書きにあらわれますがでないと私の存在が忘れられちゃうで・・・

・・・そりシルクやジンのようこ・・・

「ショイド、来たよ」

扉を開けた所に立っていたのは紅髪ツインテール紅目炎のような紅ではなく血のような紅、身長は俺の首ぐらいの少女・・・・面識は俺ではない

「おやおやホリイさんじゃないですか。早かつたですね」

「よつホリイ久「ねえねえ、ショイド」俺はスルーかよ」

二人が話し込んだのでベクトルさんにホリイさんについて聞いた

「ベクトルさん、あの入つてうちの副ギルなんですよね」

「おう、そうだ。うちのギルドの副ギルで『魔神』スキルを持つていてSFC・・・ショイドファンクラブの会長だ」

「へ～そ～うなんだ・・・つてなんだSFCって

「ベクトやんSFじつてなんですか・・・」

「なんども言わせんなつて・・・そりこやお前あんまショイドの事しらねーのか。しかたね～ショイドはな・・・」

とりあえずベクトさんからのショイドさん情報をまとめる

- 1、かなり、モテている。ファンクラブがある
- 2、強すぎる
- 3、レベル123
- 4、謎が多い

まあ1、2、3はよしとしたくはないがしようつ・・・4はベクトさんで謎つてたまにショイドさんがわからん

「とまあ、そんな感じだな・・・あとなホリイは見ての通りショイド以外興味ももたないから下手な」としてみろ・・・死ぬぜ」

そりやつ霧夢の中の女性の二分の一はSFじだそりだ。そりに余談だが黒ロープでフードを顔を隠すように被つてるのは顔を見られたら『死靈使い』としても霧夢のギルドマスターとしても有名すぎるので騒ぎになるからだとか・・・なんだろ?この人凄い人なのに全然尊敬できないな

ベクトルさんとショイドさんがついで喋っていたら

「トール君、今から模擬戦をしませんか?」

「いや、ショイド。お前とやつたらあんま模擬戦にはならねーだろ」

「いえいえ私がやるのではなくホリイさんがやるんですよ」

「ちよつと待つて下さーい。なぜ俺が模擬戦を・・・」

「ええ、そうですね。理由としましては君のスキルと武器と今
の実力の把握ですかね・・・確かに強さに差がありますね・・・
・ではタッグ戦にしましょう私とトール君、ベクトルとホリイのタッ
グで・・・え、なんですか・・・いやこうしないと実力差が開きま
すし・・・」

ホリイさんをショイドさんが説得し始めた時ベクトルさんが話しあがけてきた

「あ〜、そういうもーう一つ言ひてなかつたことがあつた。実は
な・・・」

えへっと、これは言つてもいいのか……いいか。なんと、ホリイさんは一度ショイドさんに告白したそうですね……で、ショイドさんはふつたらしい……」が曖昧なのはベクトルさんは直接現場を見たわけじゃないが泣きながら戻ってきたホリイさんの言葉が『いつかぜつたい振り向かせてやる』だそうです

「とまあ、昔はそれなりに修羅場つてたんだがそのあとすぐこできたのがJFひつてわけだ」

と言われても反応に困る俺は無言でいると

「おっとい、そんな深く考へんな。そんな話があつたべらつこ」と

確かに俺が悩んだからどうだつて話だな……と思つていったら
『ひやら説得が終わつたらし』

「ではでは闘技場へ行きましょうか」

それはいいんですがなんかホリイさんがこいつは殺氣全開で睨
まれているような……・・・・・さつき聞いた話だつたらそういうよな

あ～補足しどくと俺のスキルや魔武器は知られたらいけないの
で闘技場に侵入不可になつてるので副ギル以上の権限がないと入
れなくなつてゐる

「では、まずスキルアーツに何があるか確認しましよう。」
もうらん武器は魔武器で

俺は《蒼狼》にあるアーツを確認した。。

「一つ質問いいですか」

「なんでしょう」

「ユニークスキルってアーツ初めから三つあるんですね？」

普通どんなスキルでも初期にあるアーツはレベル一のアーツ一
つだ・・・」のスキルには三つある

「ええ、そうですよ。ちなみに私は四つありました」

とりあえず、考えるのを放棄した・・・ユニーカスキルは規格外・・・常識が通用しそうになさそうだ

「ええと・・・とりあえず三つありましたが一つずつ使ってみます」

「じゃあ、俺に使ってみる」

「いきます」と言つて俺はまず《狼波》を使った。

型は《両手大剣》の《ソニッケエッジ》と変わらなかつた・・・剣を振るう蒼い衝撃波が飛び出した・・・ここまでただのソニッケエッジだったが途中から衝撃波が狼?の形になつた

「うおっ」と・・・って追尾機能があるのか「そんなことをいいながら躲して衝撃波を斬撃で消し飛ばした

次に接近技だったのでベクトさんにはガードしていくつもり」と二・・・

また、声を掛けてからアーツを使った《狼牙尖旋》・・・剣に蒼いライトエフェクトがついて流れるように四連撃を繰り出した

最後の一つか召喚アーツだった。召喚するのせひつて簡単「サモン アーツ」で召喚できる

「サモン、チャイルド・ウルフ」この掛け声により田の前に小さな魔法陣が出現し白い子供の狼が顯れた。

キヤウツといつ声とともに下狼は擦り寄つてくる・・・すげえかわいい

ついでにいろいろ命令してみた「おて・・・おかわり・・・ふせ・・・シャイドさんに噛み付け・・・おお~」完全にこいつとを聞いてくれるこれはいいな

「ちょっと、トール君私何もしてませんよね」

「俺は何もしませんよ。その子が勝手にしただけです」

とまあ、アーツについては確認が終わつたのだが魔武器である蒼剣はただのちょっと強い剣でしかなかつた

ベクトさん達いわく武器に経験値ためることで武器が強くなつたり特殊効果がつくそうな、とりあえず今は保留だ

「ではいろいろと確認も終わりましたしそうそろ模擬戦をしま
しょうか」

二人組に分かれた

次回予告

第一回SSC会議を始める・・・何かメンバー
ベク「それでは、減つてねーか」

ト「えつと・・・みんな用事があるからつて来ませんでした」

ベク「そうか・・・俺達一人だけか?」

トーマス

シェ「バンツ！」

ベク&トーラ「わっ!!」

「よ シュ「やーお久しぶりです。次回予告にシエイドが帰つてきました

ベク「なぜここがわかつた・・・まさかメンバーがないのは」

シェ「ええ、私です。ちなみに第一回の会議には私もいましたよ」

ベク「なにー？」

to be continue

- - - ベクトル視点

なんで俺目線かつて？そりゃーここにいらっしゃる幼児体形の我が儘お姫様が前話ででてきたのにまつたく喋れていなからわざわざひけひらがわに・・・

「なんで、あんたとタッグ組まなきゃいけないのよ。こうなったのもあの少年が・・・ぶつぶつ」

「いや、だからバランスをとるために・・・いやトール殺すじゃなくだな・・・あ〜〜〜わかったもうお前はトールをやれ俺はその間ショイドを足止めしつゝ、俺達はほんの一に作戦をたてた

- - - トール視点

「ショイドさん、俺は何をすればいいんですか？正直いって勝つのは無理でしょ」

「ええ、まああなたは全力で闘つてくれればいいんですよ。これはあなたの実力を見るものなんですから」

そんな風に言われて少し気がはれた・・・とりあえず全力をだ
そう

シェイドさんに一人のスキル構成どんなアーツを使つてくるか
など攻略方法をいろいろ教えてもらつた

「では始めますよ。フィールド形成は森、時間は1時間で」

闘技場に木や草が出現し始め森ができた。その後、フィールド
はじまで転移された。

3 . . . 2 . . . 1 GO

この表記がでて模擬戦が始まった

が、始まつた直後地鳴りとともに何かが近づいてくる音が聞こえた

「シェイドさん・・・これってけつこうしまずい状況ですか？」

そんなことを言つていたら徐々に前方が赤い光で・・・さ
すがに危険だと思ったので今いる場所から離れた直後に、「ゴウッと

いつ頃とともにさつあまで立っていた付近の木が灰になつた

・・・・えへつと、多分今のはホリイさんの『魔弾』だと思
いますがアーツレベル4の予備動作なしの炎弾でかなり威力がある
とのシェイドさんからの情報だったのだが・・・アホかかなりどこ
ろじやないだろ予備動作なしで木を灰にできるものをかなりで片付
けるなつて話だ

あつ、何かこっちに近づいてきてる・・・あれはツインテール、
ホリイさんか・・・・・・逃げよう

とりあえず俺はそこらへんの木に隠れた。

「トール君出ておいで、でてこないと後で・・・チツ、ここ
にはいなか・・・殺る」

わお、とびつきり殺る気満々じゃないですか。呼んだあと殺る
気しかないじゃないですか・・・そういうえばいつの間にかシェイ
ドさんいねえ！やばい一人でこの人と鬭えとか無茶すぎ

俺は草や木で隠れながら距離をとつた。

よし、だんだん離れてきて『パキッ』・・・なんで枝木が・

：

「見つけた」

なんかあの人、目光つてますよ口から煙は・・・さすがにでて
ませんが

しかたがないので剣を構えることにした・・・徐々に接近して
きそうなのでツインテールに『ソニックエッジ・散』をつかって牽
制をいれた

六枚の刃がツインテールに向かって飛んでいったが

「しゃらくせー」

六枚の刃を突如出現した巨大な炎球で消滅させた。

あれは、確か『ディスチャージ』だつたはず炎球を前に出現さ
せるだけのアーツ・・・接近戦でつかわれたら躲せね・・・

六枚の刃を囮に俺は全速力で逃げた

・・・ふむ、これは《魔弾》っぽいのですね。とりあえず躲しどきましょ。

ショイドはトールと逆側に躲した。

あ・・・トール君あつちですね。ならば、私もあつらに行かな・

ザツという音が聞こえた

ガキイイイイン

大鎌と剣がかちあつ音

「たく・・・なんで俺の攻撃を見切れるんだお前は」

「長年の付き合いじゃないですか。勘ですよ勘」

鎌で弾いて距離をおいた

やつてきたのは、そつベクト。

「ベクト、私はトール君の実力を見ないといけないんですけど・

・」

「うひせえ、俺はお前を足止め・・・あわよくば倒しに来たからな。そつちの言い分は俺を倒してからにしろ」

ベクトは最後にかつこよく剣をショイドに向けた

「しかたありませんね」と言つて大鎌を構えた。それに合わせてベクトももう一本の剣を抜き一本の剣を構えた

story20 続・模擬タッグ戦（前書き）

どうも、ジャッロです。

なんだか執筆がかなり速いペースでできた休日がありました・・・。
・ので何話か一気に更新！

- - - トール視点

まあ、とりあえず・・・逃げてる最中だ

「待ちなき〜。私におとなしくやられろ〜」

「こんな感じだ・・・ちなみに今全速力で走つてます

「いい加減につ、逃げるのやめる〜」

ホリイは右手を開いて前に突き出した

あれは確か『魔弾』！と理解した時には光りが見えて・・・

ゴウッ

また周りにあつた木や草は灰と化した。俺はといつと間一髪で
躲してまた木に隠れた

- - - ホリイ 視点

「一発目の『魔弾』を撃つたがまた外した。撃つた後『魔弾』で前方が見えにくいので当たったかわからない・・・がこれは闘技場内なのでライフがゼロになり死んだらシステムアナウンスによりわかるのでとりあえずは生きていることはわかる

「隠れるなー出てこいー」

叫んで・・・！」ようやく落ち着いてきた。

あ～そういえばこれってあの少年・・・トール君の実力量るための模擬戦だつけ・・・まあ、またシェイド関連で暴走してた！でも～トール君も悪いんだよ～私が久しぶりにシェイドと会つたのに私以外の人の話ばつか・・・

ガサツ

物音が聞こえたので音がなった方にすぐに構えた

物音がした草むらからでてきたのはチャイルドウルフ模擬戦を始める前にトールが召喚していた子狼・・・

ホリイはすぐに子狼は凹で隙をつくるためということを理解して周りを見渡そうとしたら

- - - トール視点

かかつた！

シェイドさんからこの方法を教えてもらつた・・・子狼で注意を引きその隙に奇襲するという作戦だ

俺は完全に子狼に注意がいつているホリイさんの背後からアーツをくりだした。

『両手大剣』のアーツ『レイ・エッジ』をつかつた・・・・

・俺の蒼剣は光に包まれて光の剣となり光属性の四連撃今俺が持つ

ているアーツで一番強い技

完全に隙だらけだったホリイに四連撃を当てる手ごたえがあつたが

「そんなせこい方法じゃ私は倒せないよ

声の方向からホリイが背後に立つてゐることがわかつた

目の前のホリイは霧散した・・・・・アーツ《空蝉》一瞬だが自分の分身をつくれる・・・・・

不意をついたつもりがそれを利用された・・・・負けだった

「とにかくで私の勝ちね。じゃあ一緒に闘技場からリタイアしましょ・・・・多分今シェイドとベクトがプチ本氣で闘つてると思つよ」

シェイドさんやベクトさんの闘いを見たいと思ったので提案をのんだが・・・ホリイさん性格変わつてね?

- - - 闘技場・観客席

モニターにシェイドさんとベクトさんが映つていた・・・・・・戦況は圧倒的にシェイドさんが優勢・・・・シェイドさんのライフの残量は八割に対してベクトさんは残る一割

「やれやれシェイド~」

ホリイさんはショイドさんしか見えてないし・・・

- - - ベクトル視点

ガキイイイン

また攻撃を弾かれた。

「はあはあ・・・『瞬動』使ってなくても俺はそれなりに速いはずだがなんでお前は見切ってんだよ」

一応、模擬戦だから俺は敏捷パラメータを上げる『瞬動』は使わないことにしていたが・・・攻撃系アーツは限定してない・・・攻撃系アーツにも攻撃中だけ敏捷が上がるものがあるがこと、とにかくあの扱いすらそうな大鎌一本で捌ききりやがる

しかも、シェイドは今のところ魔法系のアーツを一度も使っていない・・・

「どうしましたかー、もうギブアップですかー。そろそろ諦めてくれませんかねえ」

「うひせー、俺のライフはまだあるうひつの」

あいつは余裕過ぎだろ・・・一か八かで大技をだそう

まず、刺突系アーツ《スキュラー》で隙をつくる！

ベクトルはシェイドに向かつて敏捷パラメータ二倍になつた突進と突きをした

「あまいですよ」

シェイドは突きをした一本の剣をすくうように大鎌で弾いた

来た！

「これはベクトルの読みの範囲内・・・

「《ライトニング・バッシュ》」

『初級光魔法』の閃光を放つ田くらましの魔法系アーツ。大鎌を振るつていてダイレクトに光りを見てしまったはず

シェイドはバックステップして距離をおいていた・・・よろめきながら

今だ!

俺は、この隙を見逃さず接近し繰り出すのは俺の最強の技の一つ『瞬影連閃斬』ハンクと闘つたときは剣一本だったが今は一本手数が倍になり攻撃回数も倍に・・・96連コンボ!

「残念!出させません」

斬る瞬間にそんなことを言つてきたシェイド・・・だが、こっちの攻撃は止まらないはず・・・と思ったが

シェイドは大鎌をもたず素手で

「『戦烈虎砲砲』」

『上級格闘術』スキルの拳から青い気弾を放つアーツ

待て待て待て！いつの間にシェイド格闘系スキル上げてたんだよ。今まで使ったの見たことねーぞ

剣が届く前にベクトルが吹き飛びあまりの衝撃に気を失った

- - - - ドール視点

模擬戦が終わってフィールドの木々などが消えた

なんだらうねあの人達なんだらうね・・・ダメだ冷静になれ

「まだまだですねえ、ベクトル君は」

そういうにいる金髪が肩までかかる綺麗なお姉さんのように冷静な・・・・・誰？

「あつ、シエル久しぶりー元氣してた？」

「あなたほど元氣じゃないですけど元氣ですよ」

「いえ、いえ、いたいしたことじゃないですよ。シェイドと『二人だ
しいんだけ』」

「ちよつと、シエル。なんであんただけ知つてゐるのか教えて欲
しいんだけ」

「ベクト君しょぼかつたですねえ。多分シェイドが『上級格闘
術』のスキルを持っていたことを知らなかつたんでしょうけど・・・
」

「そうだよ、いつ格闘系スキル上げてたのよ！私も今知つたよ
「え？ 知らなかつたんですか？・・・じゃあ私だけが知つてた
んですね」

なんか勝ち誇つたような笑みをホリイさんに向けています・・・
・これつて、シェイドさんめぐつてのですよね・・・シェイドさ
ん早くきて、絶対これ次わかるような状況だから〜

もちろんこなこと口にはだせず

け』でいろいろしてただけですか？から・・・おや？決闘ですか？い
いでじょう久しづりにあなたと闘うのも

そりや、決闘にもなるでじょうよなんかシエルさん『一人だけ』
をわざと大きな声で言って挑発してるし・・・うん、俺にはかん
けーない。わあ、どこかく

「おやおやシエルさんも来てたんですね」

いまからショイドがやつてきた

次回予告

ベク「なぜここがわかつた・・・まさかメンバーがないのは」

シエ「ええ、私です。ちなみに第一回の会議には私もいましたよ」

ベク「なにー?」

トーナ「なぜなら、僕らが協力していたからです」

ベク「トール、シルク、ハングにジン・・・」

シエ「そう、あなたは始めるから私の手の平の上で踊らされていたのですよ」

ベク「うわあああああ・・・」

みんな（ベクト以外）「ハハハハハハハハハハハハ

シエ「おわり」

- - - ギルドホーム支部長部屋

「なにー・シェルも来てたのか」

まず、『氣を失っていたベクトルが起きやま』といった言葉だ

「ええそうですよ・・・あとライカ君だけですがそろそろくる
でしょ」

ズドンーといつ地響きがした

「ね」とかショイドさんが言つている

「ベクトルさん、ライカさんつてどんな人ですか?」

「ライカはなんつーか野生児?・・・つとな〜ヨニークスキル
で『調和』スキルつていうものを持っていてだな〜・・・あ〜だめ
だ頭が回つてねー後は本人に聞け簡単に答えてくれるだろーから」

「じゃあ、ついでにライカ君をここに連れてきて下さい。まだ外にいると思いますから連れてきたものは闘技場に入れればいいと黙って入れて」

「連れてきたもの？意味がわからん……まあ、話しさ聞きたいから行くか……」

-----ギルドホーム前

……………だけえ虎とだけえ鳥がいる…………あつ、虎の上に人がネコミミワードを被つてる小柄な…………ビツやうらあの人がらイカさんりしい…………とあります呼んでみた

「ライカさん」

「はいませーーーい

「この人で正しかつたらしい

「ショイドさんちが支部長部屋に浮んでもますよ」

「おっ、ソーヴィーさんです。ねーねーついでにこの子がいる

連れてけとかなかつた?」

「ええ、闘技場に入れればいいと言われています

「あんがと。じゃ あリンリンに乗つてあつ、リンリンつてこの子でこっちのガーネットトイーグルはガーちゃんよろしくしてね」

虎がリンリン、鳥がガーちゃん・・・ネーミングにケチつけ
ちゃいけないよね

とりあえずお言葉に甘えてリンリンの背中に乗せてもらつた・
・かなりフカフカだ

・・・・・ギルドホーム内ロビー

いろんな人から声をかけられた俺じゃなくライカさんに

「つおつHンシヨントタイガー」「いじは動物園じゃねーぞー」

「ガーちゃんが俺のつまみを」

ライカさんも「わかってるよ~」やらい「あとで返すから~」と

か言つていた

- - - 觗技場観客席

ドーンー、ドーンー！ズタタタタタタ！ガキンー、バーン！

「ういえ、そだつた・・・・・・ホリイさんとシエルさんが決闘しているんだつた

「うわ～まだあの二人けんかしてゐんだ」と、ライカさん

ちなみに一人ともライフが半分になつてゐ

「君名前は・・・トール君ね・・・ふむふむ・・・今からあれに乱入するからや！」にこひねリンリンGO！」

ライカさんはリンリンと一緒に覗技場にはいつていつた

- - - 觗技場内 - - シエル視点

本当に私達つて互角ですよね・・・・めんどくさくなつてきました

「ね～そろそろ止めにしませんか？」

「シエル！ いまさら謝つたってゆるさないわよ！」

・・・あれ？ 会話での解決策がなくなっちゃってる？ いえいえ
いくら猪突猛進なホリィでも話しが通じないよ！ 」

やつちやつた、と思つていた時に

ズシンズシン

ライカが乱入してきた

あ・・・ライカちゃんだこの子なら

「ライカちゃん、すべて悪いのはホリィなの一緒にホリィを止
めましょう」

「これで万事オッケー

- - - ライカ視点

「ライカちゃん、すべて悪いのはホリイの一緒にホリイを止めましょう」

「うわー」

「これは嘘だよなー。シエルさんってよく人を利用するからな・・・」

「シエルさん、理由はビビセショイードさん絡みでしょ？で、多分どっちも悪いんでしょ？」

突然の乱入者に驚き止まっていたホリイがしゃべりだした

「だって、シエルが私の知らないことひど・・・」

「どつかの言い訳も聞きません！私のリンリンとガーチャんがいれないじゃない。どつしてもつていうならけんか両成敗です。『調和の咆哮』を使います」

「ちょっと待つて、『めんねライカちゃん勝手ばかりしてもうやらないから』

「『今は』やらないですよね？」

「……チツ」

「あ～今シエル舌打ちしたよライカ」

「ホリイさんも止めますか？」

「……はい、ごめんなさい」

- - - 鬼技場観客席 - - - トール視点

凄いな～、ライカさん実質的に女性の中でも一番権力あるのでは？

そういうえば、三人が話している間にガーチャちゃんと仲良くなつた

- - - 乱入した時

あ～俺の出番なさそつだな・・・そういうればフライドチキン買

つてあったような・・・おひーあつたあつたさて・・・

ジ――

後ろのガーサンの視線が気になる・・・これからフライドチキンか田的は・・・

俺はフライドチキンを動かしてみた。ガーサンの田線がフライドチキンを追っている・・・5分ほどやった・・・十分に時間つぶしと楽しめたのでフライドチキンはガーサンにやった

・・・・共食いじゃないのか?と思つたがそれ以上は気にしないことにした

とまあ、そんな感じだ。

「やあやあ、歯わん揃つてますね」

またこんなタイミングでショイドさんはありわれた

次回予告

シユ「最近華やかになつてきましたねえ～」

ベク「なあ、せつかくてきたホリイとかシエルとかライカとか呼ばないのか？」

シユ「ええ、この前のことであつと……」

ベク「この前つていつの話だよ……ん？」

ホリイ（以下ホリ）「シユイドは？」？そして略しかたが氣にくわないのでホリイのままで

ベク「シユイドなら……いつのまに……」

ホリイ「あんた捕まえときなさいよ氣が利かないな～」

ベク「つーかまじでホリイのままかよ……ホリイ様一回予告をやつてくれたらシユイドが後で人には言えないことをしてくれるとか……」

ホリイ「え？ほんと？……しかたないな～……次回、たまの暇。これあんまし面白くないよ……シユイドビ」だ～～

ベク「あ～なんか失敗だらけだが……まついいか。次回にまた会おう

えつと、今は大会前日の朝ですね・・・え？ 昨日のあのあと？

- ・まずシードさんがあらわれた・・・ついでにベクトさんも・・・
- ・シードさんに言われた

大会終わるまで町からでないこと・・・今の俺だともし何らかの方法で情報を得て魔武器狙いで赤プレイヤーが襲つてきたら死ぬからだとか

んで、そのあと大会に向けてのコンビネーションの練習やらなんやりで忙しいからなんとかで解散になつて今

今は宿にいる

・
・
・

・・・・「暇だ」

今まで戦闘ばっかだったから突然ダンジョンへ行けないと言わ
れてもやることがない

・・・・『マルチーズ』に行こう

- - -『マルチーズ』店内

「へい、いらっしゃい」

久しぶりに聞く声の主はジニーさん?「或多分ジニーだ

「久しぶりですジニーさん」

「なあ、俺の名前ってそんなに覚えづらいか?ジンだ。ジン...」

そんなやつとつをして暇つぶしに来たことをわざわざこつた

とりあえずこりこり喋つて適当に出了

よそへ考へたりあまつ町を見てなことに気がついた

「だったら町探索もいいか」

町を見てしまつた

・・・日が暮れた

・・・迷つた

「…………？」

えつと整理しよう。まず、大通りを見てまわつた、次に畠田そ
うだから路地裏に行つて少しして今の現状・・・

なんかいい方法ねーかなーと思つたが

「ママ見りやいじやん」

「こんな簡単なことに気づかないとほ……

「……あれ？」

なんかまたマップが見れない……でも今回のは妨害系スクリのせいだとすぐわかつた。ちゃんと『マップを表記できません』つてでているから

誰だろうかこんなところで『マップジャマー』を使ってる奴は……とりあえず視認できる範囲には人はいない……

まだ他にここからでる方法はないかな……あ

「サモン、チャイルドウルフ」

子狼がいるじゃないですか。

魔法陣から子供の狼がでてきた。

「よし、じゃあシェイドを探してくれ。ほら模擬戦で黒い人」

子狼はキヤウッと鳴きながら尻尾を振つて走りだした

お? わかつたか? とりあえずついてこいつ

- - - 5分後

まあまだ着かないだろう

- - - 10分後

・・・・そろそろかな・・・

- - - 30分後

・・・まだか?

- - - 1時間後

「だ〜〜〜」

「こいつを信じた俺が馬鹿だった。ぜってーわかってねえ。

「でもう一度マップを見てみた……直つてやがるしかもそこに左に曲がったら霧夢のギルドホームだ……まさかちやんとこいつは……

「ちゃんと連れてきたことが分かった俺は子狼に上等な肉を貰って宿へ行き一日が終わった

「この日の謎といえばあの『マップジャマー』はなんだつたんだろ？謎は謎のままに終わった

次回予告

ライカ（以下ライ）「はー、どうも次回予告が始まりました」

シエル（以下シエ）「ライカちゃん固いわよ・・・ほら肩の力を抜いて・・・はあはあ」

ライ「変なトコ触り出した！変態だよそれじや。落ち着いてシエルさん」

シエ「お姉さんを甘くみてもらつてはいけないわよ・・・まあ、私のことをお姉ちゃんと呼んで！」

ライ「やつぱただの危ない人だよ・・・あつ、シエイドさん助けてー！」

シエ「おやおや、ライカ君びうしたのですか・・・シエルが変態？・・・私の身も危険そうですね・・・ライカ君私は時間稼ぎます私を置いて逃げなさい」

ライ「シエイドさん。それ死亡フラグだよ」

シエ「大丈夫、すぐに追いつきますよ」

ライ「完成させちやつたよ・・・シエイドさんの死は無駄にはしません・・・わよひながら」

ショ「・・・次回より大会編が始まります・・・これが最後の言葉になるのでしょうか・・・・・嫌です。まつて〜〜ライカく／＼＼＼ん」

ショ「ショイド、ライカちゃん待つなさ〜い」

ベク「なあ、トール・・・最近あんまり立たねーな」

トー「俺なんかまだまじですよジンさんに比べたら」

ベク&トー「・・・・・」

story23 大会初日（前書き）

いつも、ジャッ口です。

大会編が始まります！そして、またトールが活躍しません！
・・・・この作品はどこに向かっているのでしょうか？私にもわから
りません

今日はギルド対抗大会の初日だ。今、シルクとギルドホームで待ち合わせしていたので俺はギルドホームへ向かつた

-----ギルドホーム内

「よつ、シルク」

「やつと来たのか。じゃあ闘技場《神》へ行こう

ベクトさん達が闘う場所だ

この大会は上位八位までのギルドで行われる。で、各ギルドにギルドマスター一人とメンバー四人のパーティ一組の一組が出場権を持つていてトーナメント方式で行われる。どことどこが当たるかは今から行く闘技場で抽選で決まる。

ちなみに数が多いので会場は闘技場《神》と《霸》が使われるらしいどっちの闘技場も一万人は入れるらしい

-----闘技場《神》観客席

俺達は予約チケットを見せ会場の席についた。そろそろ抽選会が始まるはず・・・

バン！バン！

花火が打ち上げられた。始まりの図

ドンーという音とともに闘いの場であるフィールドの中央が爆発した

そこには一人の男が立っていた。

「レディース＆ジェントルマン・・・紳士って少ないですよね・・・レディース＆メーン。総合同会兼選手の霧夢ギルドマスターのショイドがお送りさせていただきます」

ショイドさんだつた。そして・・・

「「「キャーーーー」」」 やう「ショイド様ーー」 やう「つきあつてーー」 やう「結婚してーー」 などなどしゃ

「俺の彼女返せ——」やら「お前のせいだ——」やら「なんであんたはいつもいつも——」などなど

前者が主に女性、後者が主に男性

ちなみに今のショイドさんはいつもの黒ローブではなく黒スリッ姿。顔がばっちりわかる

「歓声ありがとうございます。私からまずは簡単な説明をします。抽選会がこの後ありますが人数の関係上闘技場を一つ使ってトーナメントA・Bという風にします

分けることによりもうひとつ会場の試合が見れない!という心配はござ無用。運営側に協力を要請して頭上をご覧下さいあちら側の映像が見えるようになっています。ちなみにあちらの司会は《ミラー・メイト》のギルドマスターのリンさんがやっています

抽選会場はこちら側なので今より代表者が転移してきます

とショイドさんが言った後すぐに大きな魔法陣が出現し何人も転移してきた

会場にいろんな歓声が飛び交った

「では、これより抽選会を始めたいと想っています。ではまず・・・」

抽選が始まり・・・結果がきまつトーナメント表が出来上がった

シェイドさんがトーナメントで闘技場《覇》へベクトさん達はトーナメントでじつひで試合を行ふことになった

「せつそく私はあちらへ行かないといけないですがリンクさんもこちらがわに来るので、では決勝に進めたらまた会いましょう」

シェイドさんや《覇》の方で闘う人達は転移していった司会が変わった

「はいはい。シェイドさんに変わりまして、《ミラー・メイト》のギルドマスター、リンクです。シェイドさんに握手とサイン貰いました!いいだるー・・・可憐一じやなくて、もつと悔しがつて~」

『ミラー・メイト』のギルドマスター、リンク。青髪青眼のゴスロリな女の子。みんなのハートをわじづかむ容姿。男性陣はもちろ

ん女性陣もシホイドやんといつりやめじこじをじてこるがそれより
も田の前の可憐なにやられてこる

「わーーー むつにによこんな司会止めてやる」

あつマイクを投げた

飛んだマイクを誰かがキャッチしたそして・・・

「すこません。私は《//ワード・メイト》の副ギルをしています
ロートと言います。司会を変わらせていただきまわ」

田滑な流れ・・・これは初めから予想されてたな

「まず、トーナメント表は頭上スクリーン北側から見て左上に
載せておきます勝った組は赤色の線で線が進んでいきます。なお、
会場内に限つてメニュー画面のアイコンに会場スクリーンの項目が
増えています。それを使つとメニュー画面サイズで頭上スクリーン
を見れます」

俺はメニューを開き確認した・・・・ある

「では、第一回戦《神》の《ミスティ・ドリーム》PT対《俺の道》ギルドマスターと《霸》の《聖騎士団》PT対《深緑の森》ギルドマスターです。試合開始は今から20分後ですので時間をあ間違えのないようお願ひします」

大会に関する説明が終わって

「なあ、シルク先生《俺の道》のギルドマスターってどんな人？」

「来るとと思つたよその質問つていうか先生つて……。
・《俺の道》ギルドマスター、名前はショウ。ユニーカスキル《慧眼》の使い手……この《慧眼》スキル、相手のセットしたスキルを見ることができるらしい……さらにエクストラスキルの《歌》と《高位槍術》がかなりすごいらしいよ」

セツトしたスキルを見られるのはかなりつらい。とくに対人戦だとスキルがばれることは攻撃が読まれるということだ

大丈夫かな?と思いながら試合開始時間になつた

story23 大会初日（後書き）

次回予告

ジン&ハン「ハーハッハッハ」

シル「え～と、このコーナーは最近出番が減った人と一緒にいろいろ辛いことを語る余地だつたのですが」

ジン&ハン「ハーハッハッハ」

シル「酒を飲んで暴走しています」

ジン「しるくよ～最近よ～出番もね～しよ～・・・・・

シル「・・・ジンさんは寝ました・・・ついでにハンクさんも寝ちゃいました・・・せつかく出番をもらえたのに

シエ「もつたいないですね」

シル「・・・こきなりあらわれないでくださいシエイドさん」

シエ「いこじやないです。わざわざ次回予告しちゃつて下せー

シル「・・・次回、大会一回戦・・・」のサブタイトルひどくないですか？」

シエ「ではまたの次回予告で」

シル「結局シニイドさんとのパートナーに・・・」

story24 第一回戦（前書き）

いつも、ジャッロです。

過去の過ちを消去してないかと思します・・・

さて、大会編ではいろいろキャラが出てきて、トールは?とい
うになりますが大会編が終わったら活躍・・・すると思します。

- - - ベクトル視点

俺達は闘技場内に入った。歓声が上がった

反対側でショウが入って来た。「ちらには

「アニキー」「やら」「ボスー」「やら」「お頭ー」などの声が
聞こえた

ショウの特徴は黒髪短髪、黒眼鏡のものはシャツとジーパン
そして右耳の方に眼帯

「あ～う、ボウズ～久しづり～

「あんた、慧眼は使わねーのか?」

「あほか、お前らはパーティー全員がユニーク持ちとかふざけ
たチームじゃね～か。全力を出させてもらひづせ」

といつてショウは眼帯を外した。右目には謎の紋章があつた

そして右目が開眼したとき試合が始まった。

スキルがばれたからといつてもアーツを見切れるわけじゃ
ない

「ノービネーションだ」

といって、俺は『瞬動』を使い一倍速でショウに近づく

「はつ……！」

ショウが大声でいった。《歌》スキルのアーツ《ビッグボイス》一定音量を越えたら吹っ飛ばす衝撃波がショウの周りから発生する。

もちろん俺は吹き飛ばされるが

「たあああああー！」

俺の後ろから来ていたホリイが『魔弾』を放つたがこれは躱された。
・・がこれもまだ許容範囲

頭上からのガーチャンによる攻撃、突進系モンスター『アーツ』
『ファイアーバード』また躱される

まだ、連携は続いているシエルの『幻散雨』矢を上に放ち万の矢を降らすアーツ・・・当たらない・・・一発も当たらなかつた

『』まで四連携ましたが攻撃が当たらない

だいたいギルドマスターは『』んぐあいの連中ばかりだ・・・
この人もそんなうちの一人

「おいおい、それでおわりか? へぼいぜーおい。来ないならこ
つちからいくぜー」

ショウが突撃した狙いは・・・

「やつぱ、俺かよ」

ベクトだ

「わりいな。あんま女子供をなぶるのは『気』が引けるからな」

二人は一対一で闘い始めた

シヨウの《三連槍》三連続の突きを放ってきた。

ベクトはこれを一本の剣で弾いて躱した

だが攻撃はまだやんていないそのまま《旋風》を使い一本の剣を右側に弾かれた

シヨウはなぜかバックステップをして距離をおいた武器を弾かれた今の俺は隙だらけなのに・・・

ズンー・ズンー・ヒュンヒュンー

意味がわかつた・・・ホリイやシールの攻撃がこっちに飛んできたからだ

何万の矢と炎球が飛んできた・・・コンビネーションA3・・・

・多量の攻撃の雨の中目標を駆逐する戦闘方法・・・俺は敏捷パラメータを上げることができるので簡単に躱すことができ、雨の中でも躱える！

距離をおいたショウに《スキュラー》で距離をちぢめ突き攻撃を放つ

躱される・・・現在進行形で攻撃の雨も躱している・・・決して俺のように敏捷が高いわけでもないのに躱している・・・いや、見切っている節さえあるなぜなら頭上から降つてくるものを見上げずに躱している

・・・すべてはあの眼に鍵がありそうだが・・・《ライトニング・バッシュ》いやいや強さの次元がシェイドレベルなのだからそんなもん通用するはずがない・・・とりあえず攻撃の手を止めないことにした

・・・隙をつくる！

手始めに《三瞬斬》・・・槍で防がれる・・・次に《分影剣》ショウの背後二方向と田の前の俺の斬撃・・・《旋風》で背後一体と田の前の俺が吹き飛ばされる・・・《ライトニング・ソード》光の剣を三本対象に放つ魔法・・・槍で三本とも消滅された

まったく攻撃が当たらない行動のすべての意図が見えていふと
しか考えられない

今だショウのライフは九割対して俺は五割後衛にまわっている
三人は無傷だが俺が死んだら簡単に崩れるだろう

・・・・・しかたがない・・・・・こんなところで出したくは
なかつたが切り札をだそう - - - 大技三連続！

「いつを使うとAPの七割が減る・・・もし倒せなかつたら俺
は戦力外だが、かまわん！」

親指と中指を立てて手を上げたこれが俺の切り札を切る合図

矢と炎弾の雨がやんだ

「お?なんだ?サレンダーか?」

神剣に向けて「今から俺の究極でショウ・・・あんたを倒す

- - - ショウ視点

「今から俺の究極でショウ・・・あんたを倒す

は？おいおい・・・俺だつてな、ギリギリ何だぜ？なんだよ究極つて・・・ぜつて・・・

意味がわからない読者に俺のスキル《慧眼》について少し教えてやうつ

俺の《慧眼》スキルには相手の情報を読み取るアーツが多くある。まず《技瞳》まあ相手のセットしたスキルを見る事ができるのはこのアーツのおかげだ。次にこいつの派生で《連索》、《技瞳》で見えたスキルのアーツを見れるんだが・・・こいつがな、どういつた規準で見える見えないが決まるかわからね、んだわ・・・まあ見えるアーツと見えないアーツがあるんだわ。ちなみにその四人・・・ベクトには《神速剣》に四つアーツがわからんのあるし、ホリイには《魔神》に二つ、シエルも《虚構》に二つ、ライカには《調和》に三つ・・・こいつらには隠し玉がまだまだある・・・今まで躱せていたのは《軌瞳》を使ってあいつらの攻撃の軌道を把握できたからだ・・・これダジヤレだよな・・・とまあ俺だつて把握できないこともあるわけで

せつてー俺が把握していないアーツを出すに決まつてやがる

俺にもとつておきの切り札が三枚あるが・・・しゃーない一枚ぐらいなら見せるか・・・

- - - ベクトル視点

「おひ、そつか。だつたら俺もとつておきを見せてやるぜ」

槍を構えて言われた

俺も剣を構えた

・・・・いぐぜ！

ベクトルは消えた・・・のではなく早過ぎて見えなくなつた大技
三連続においての第一段階《神速》・・・《瞬動》の強化版敏捷パ
ラメータ三倍・・・何よりもベクトルの闘いは速度を基調している・・
・誰にも追えない速さで勝負する

だがベクトルにはショウが俺を見えているよつて思えた

まづはこの《神速》状態での斬撃の雨

ガキン！ カン！ カン！

「じどじ」とく槍でガードされるひとつやうただ速いだけでは倒せそうになかった

ショウの前方に立つた……第一段階……《瞬き》ただの居合切り……敏捷パラメータが一倍になる……そして単発で一番物理攻撃力が高い技

剣を鞘に戻し居合の構え……狙いは槍

真正面から居合の一撃……狙いは槍

ショウはやはり見えているらしく槍でガードしようとしていた

ガキイイイン！

ガードを越えるダメージを与える……ショウのライフが一割減る……嫌な顔をしていた

が、まだ第二段階は終わっていないなぜなら剣は一本あるのだから……抜いてない一本目の至近距離《瞬き》当てにいかず槍狙いショウも槍でガードするしかなさそうで槍でガードした……

割をまた削る

そして、攻撃は続く最終段階《瞬影連閃斬》最後の締めはこれだ《瞬き》からそのまま一刀による96連撃

・・・がよかつたのは30連撃までだった・・・

ドン！

吹き飛ばされた・・・何でかはよくわからない・・・俺のライフは死きていた・・・気が遠のいていった

- - - シエル視点

あ～あ、調子に乗ってあんなに接近するから・・・でも今は何が起きたかはつきりわからなかつたわね・・・

- - - ホリイ 視点

さまあみる一人でカツコつけるからいつもいいところで負けるんだ・・・・といつても今の五割も削つたのはなんだろう？

- - - ライカ視点

・・・結果見えてたよね？なんか皆冷静だし・・・やつぱりシエイドさん以外の男には微塵も興味ないのかなあ？

つてこんなこと考えてる場合じゃなかつた！ベクトルさんがやられたから司令塔は私になるじゃん

「ホリイさん今のうちに『魔神弾』溜めて、リンリン、ガーチゃんいつて。シエルさんリンリンの援護とホリイさんの防衛」

とりあえず指示をだして私は笛を取り出した。

戦闘はリンリン達に任せている私は『笛』スキルによる補助系アーツを上げている

（）（）

主に皆の補助リンリン、ガーチャンの攻撃力や敏捷を上げる

- - - ショウ視点

・・・・はあ～、やつと一人倒せたよ・・・・ベクトルお前死んでもなんかすっげーな飽きれ顔しかねーんだが「ホリイさん今のおうちに『魔神弾』溜めて、リンリン、ガーチャんいつて。シエルさんリンリンの援護とホリイさんの防衛」なんか対応はえ～し、『魔神弾』つてアーツ見えないアーツの一つだし・・・・・『魔眼』ばれてなさそうなのにこれ以上つかつたらネタバレしそうだしな～・・・・でも第四位のギルマスが第五位に負けるのはしたくなえな・・・・しゃーないネタバレ覚悟で行くか・・・・・まずは・・・・

- - - シエル視点

さすがライカちゃん一人一人にちゃんと指示だしてくれるあたりがどつかの誰かさんと違うわ

シエルは詠唱していた

「・・・・貫くは炎の槍『フレアーランス・改』」

三本の火の槍がショウ目掛けて飛ぶ・・・躲される

「これは凹で真の狙いは死角からのガーチャんの『ファイアーバ

シヨウの背後上空からの突進攻撃・・・しかし、横にステップして躰される

・・・・・どうもわからない誰だつて《慧眼》というのだから眼に関係しているのだろうけど死角ですら見通していくように思える

「ガーサン！」ライカの叫び声

ガーサンに何があったのだろうか？ガーサンを見ると・・・・ライフが五割近く削られている・・・攻撃は受けていないはずなのに・・・

「ホリイー！後どれくらい《魔神弾》撃てるまでかかる！」

「あと3分だから何とかして！」

3分・・・短いようで長い時間・・・

この声を聞いたのかシヨウはホリイの方に走りはじめた

「リンリン、アーツ《ライナント・フォース》」

リンリンの体から電気が帶びてバチバチいつている・・・そ
の状態でショウに突進した

が、リンリンもベクトと同じように吹き飛ばされた・・・ライ
フも五割ぐらい削れている

なぜ?と考えている時間がなかつたショウはどんどんホリイに
近づいていく

「シエルさん!」

すぐ後ろにいたライカちゃんに呼ばれた・・・ライカちゃん
の方を見ると『あのアーツをだすよ』というのが見てわかつた。

私は首を横に振つた

「でもホリイさ「私が『あれ』を使つから」」

私のカードを切ることにした

- - - ショウ視点

・・・つたく、まだ未知数の能力隠し持つてゐるからな、今から起きる『魔神弾』とやらはなんとしても食い止めるとな、・・・お？『使いの嬢ちゃんが接近戦か？・・・どうやらまだ俺の『魔眼』に気づいてね、よ、だな・・・蹴散らしてくれぜ！

- - - シエル視点

ショウの笑う顔が見えた・・・うざい・・・だが今からあの顔が変わることろが見えると思うとぞくぞくしてきた

『はもういらない・・・・・・・・・『虚構』スキル・・・アーツ』
フェノメノン』・・・私を中心にも法陣が広がっていく・・・

魔法陣は半径20メーターまで広がった

・・・この範囲内では対象の重力支配ができる・・・今は常にななりのGを与え続けているそして、私はかなり軽くなっているすぐシヨウを魔法陣に入れた・・・これでショウははいつくばるはずだった

ショウは魔法陣内で普通に立っていた

ショウが喋りながら「」ちに近づいてきた

「不思議そうだな？お前のそれは絶対領域系の重力操作系だろ？知ってるか？絶対領域に対する対抗手段それはな・・・」

ショウは槍を構えた。体が動かない

「対象の絶対領域よりも上位の領域で塗り潰せばいいんだぜつて伝える術がなくなつた

槍の一撃でライフは尽きた

ショウの能力を理解したがもう手遅れだった。負けて転移されて伝える術がなくなつた

がんばれ、ライカちゃん。とだけ願つた

- - - ホリイ 視点

やばいじやん。シエルの重力支配突破しちゃつたよ。あとちょ

つとなのにて・・・つて、あれ？準備オッケーじゃない？3分たつて
るじやん

「オッケー！ライカちゃん上空に避難してね」

- - - ショウ視点

「オッケー！ライカちゃん上空に避難してね」

・・・・・あっ、ミスつた3分しかねーんだつた・・・・これ以上カード切つたらぜつて～ショイドとかイークに勝てね～どうな・・・どんなアーツなんだろうな～（あきらめています）

- - - ライカ視点 - - 上空

「シエルとついでにベクトルのかたき。いつくよ～」ホリイさん
の声

『魔神弾』はね、なんていうかもう、イジメ？な技です。溜め
が必要何ですけどね。

ホリイの上げた手の上に10個の巨大な炎球が突然でてきた

でね、ホリィさんはこの巨大な炎球を好きなように操作できてい
ね10個の球で相手を囲み・・・

ホリィの手の上にあつた球はショウを囲み逃げ道がなくなつた

ジリジロと近づけてライフを徐々に削つて・・・

「熱っ、おこ」ひりひわざとやつてんだろ」ショウの声

ライフが少しずつ減る

で、最後にライフをギリギリのところまで減らしたジユウと

「つるるるるるるーーーーーーーー」ヒシコウの声

「「「アーキーーーーーー」と観客席で《俺の道》のギルメン達
は叫んだ

「うーーー回戦はなんとか突破した

「なあ、俺達つて出番じでじょくちょく会話するだけか?」

「そりだらうね・・・僕はもう慣れたよ・・・」

男一人も何かに負けていた

第一回戦勝者

『神』 - 『ミスティ ドリーム』 PT

『覇』 - 『深緑の森』 ギルドマスター

次回予告

トーラー「トールの新キャラ紹介コーナー……本編であまり役がないから」つむにまわされました……なぜだ…」

ショウ（以下ショウ）「あ～う、気にすんなぼ～ず～」

トーラー「はい、この人は第四ギルド『俺の道』ギルドマスターのショウさんです」

ショウ「よろしく～」

トーラー「では、ショウさん。あなたのギルドでは主にどんな活動をしてこるんですか？」

ショウ「俺のギルドは情報を取り扱っている。……探偵や報道なんかをやってる」

トーラー「へえ、そなんですか。では次に身長、体重、血液型を教えてもらりますが？」

ショウ「身長168センチ体重54キロ血液型はB」

トーラー「……ちょっと待ってください……それって俺の個人情報…まさか」

ショウ「そのまさかだ。とあるシテよりお前の情報をもつてるぜ！そ

して、俺の情報は誰にやらせりと…」

「…え…・・・と、だいたい一八〇センチぐらいで体重は…・・・

ショ、「俺の情報はやらんと言つていろんだらうが…・・・『三連槍』」

「…く・・・そ・・・なんで俺がこんなめ

story25 じーれーすかーと運よつなせんよー（前書き）

どうも、ジャッロです。

予定よりフライング気味に投稿！

最近の悩みはサブタイトルをどうつけようか？です。

- - - 観客席 - - - トール視点

「ヤベーよあの二人が対決だぜ！」「気にくわねーが俺は影にかけるぜ」「何言つてんだよあのマスター オブ パペットが負けるはずねーだろ」「つーか《神》のほうじやないのが悔しいぜ」などなど観客席の声

「なあ、先生」

「先生言つなーどうせ《マリオット》のギルダマスターのことだろ？」

俺は頷いた

「第三位ギルド『マリオット』のギルドマスター、ヒルケはま
ず優秀な『人形使い』『人形技師』として有名なんだ。この人が創

る人形の性能が凄いらしい。さらに本人もユニークスキル『城壁』でいうかなり防御力に長けたスキルを保持してるから人形使い本体はなかなか死なないからその間に人形にボコボコにするらしいよ

「さすが、情報量だけは一級・・・じゃあついでに今から『神』の方でやる試合は?」

「こっち見てるつもりが?・・・まあ君の勝手だからいいけど・・・」

俺はそんな映像を見るよりも生の試合を見る方が好きなんですね

「まず『愉快賊団』第八位ギルドのギルドマスター、キーリー。『一二丁拳銃』の使い手でユニークスキルに『ラック』っていうのを持つてるんだ・・・この『ラック』言つてしまえばただの運まぜな能力らしいよ・・・で、次に第六位ギルド『WG's』・・・これねダブルジーってGGっていう意味でさらにこれってグレートジーさんズの略なんだとか・・・まず平均年齢60以上の爺さん婆さんの集まりで第六位に入るぐらいの実力を持った人達なんだ・・・まあ、試合見ればわかるよ」

長つたらしい解説（頼んだの俺じゃん）を聞いていたら試合開始時間だった

入つて来たのはまず、赤い羽帽子、赤いコートに眼帯（眼帯流行つてんのか？）ないかにも海賊の船長という服装の「せんちょーみんなこっちの試合見てませんよ～」・・・回りの人は自分のメニューの画面を見ている「うつせ～俺は俺の決闘をするだけだああ！」船長叫んだ

んでもつて爺さんが多いらしい方は・・・爺さん三人と婆さん一人どの人もすこぶる元気そうだ・・・まず一人目ムラマサさん名前の通り『刀』の使い手、『剣帝』とかいう二つ名がついているらしい。二人目ゲンさん『機械技師』メカニック『機械使い（マシーナリー）』を使うらしいなんか右腕にごつつい機械を装備してる。三人目オトメさん名前とおりおばあさん『法衣』『古代光魔法』を使う回復・補助魔法のエキスパートらしい。最後にテツオさん格闘系スキルをほぼマスターしているらしいこの中で唯一ユニークスキルを持つ・・・『悟り』だとか・・・シルクからの情報より

- - - キーリー 視点

おう、俺様はキーリー泣く子も黙る『愉快賊団』の・・・何？自己紹介はいらないだと？待てよ。これから俺視点でいくために読者の皆さんと打ち解けた方がいいだろ！わりい、少しこっちのトラブルが・・・とつとと話を進ませるだと・・・しかたね～俺の活躍見ててくれよな！

「せんちょーとりあえず粘れ～」

あれはうちのクルーの……失礼

「言つなり、俺の応援しちゃおおー。」

「何言つてゐるのですか。じつは勝てません」

あいつは赤の他人だ気にしないでくれ……おおひと決闘が始まるよつだ

「爺さん婆さんでも俺は手加減しねえぜつー。」

「かまわんよ、本氣でかかつてきなぞー。」

おつと俺としたことが心の中だけにじとくはずだつたがつこ口にだしちまつたぜ。だがこの刀を持つたじーさんすつづー威厳あるなあ、後で威厳をじりやつたら持てるか聞いつ

試合が始まつた

まず、動いたのはムラマサさんとテツオさん左右に分かれてキーリーの左右からの挟みうちをした

うおつーじーさんなのに速え！だが慌てるなかれ俺様の一丁拳
銃が唸るぜ

『ツイン・ニアバレット』両サイドに吹き飛ばし効果がある空
気弾を撃つた・・・テツオはガードして吹き飛びムラマサは躱して
接近してきた

あの刀持つたじーさんやべえな俺の空氣砲を躱すとは

バキュンバキュンバキュンカチッカチッ

ちつ弾切れか「リロード、ノーマルバレット」弾の補給は主に
この言うとできるんだぜ

ちつきから撃ちまくつて近寄らせなによつこじつなど当たん
ねーなー

撃つ、躱される、撃つ、躱される・・・「若僧、じつちをわす
れどるの〜・・・？」

今言つた人の方を向いた・・・ゲンの右腕の機械がガトリン

グ砲になっていた

・・・おこおい待てよ待て、そんなもん・・・ひい、くそ運に任せて《アブオイデンス・コイン》表来い

ドシドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド

カラソカラソカラソカラソ

弾はすべて・・・当たらなかつた

突如、キーリーの前に顯れたコインが船の絵・・・表側で落ちていた

来たああああ、成功！教えてやるぜ《アブオイデンス・コイン》はな、『ointerで表だと一定時間あらゆる攻撃が当たんね～んだぜ・・・何？デメリットもちゃんと言え？しかたねーなー今俺は気分がいい。もし裏だつたらどんなに躊せようが必ず当たる

ゲンさんは不思議そつに見た・・・が、すぐに次の行動に移つた

「アホせんちょ～とつとと動けぼけ～まだ終わつてね～ぞ～」

アホとはなんだ！ぼけとはなんだ！……まあいい確かにうちのクルーの言つとおりだ。まだ終わつてなかつたなこの決闘が終わつたら勝利の美酒と洒落込もつ

「リロード、レインバレット」

レインバレット・散弾

「れならさすがのじーさん達にも当たるだろ

バン！カキンカキンカキン
バン！カキンカキンカキン

・・・・・うおおおおおお、馬鹿な！刀持つてるじーさんは刀で弾くし手甲嵌めてるじーさんは手甲で弾くし、なんだこのじーさん達！

ムラマサさんとテツオさんは徐々に距離を縮めていった

まよい、こつなつたら「《ヒット・コイン》」表来い、表来い、表来い、来たあああああ！「リロード、エクスプロードバレット」

「じーちゃんがた・・・Show timeだ！」

Hクスプロードバレット・爆裂弾

俺はとりあえず刀を持つたじーちゃんと手甲を嵌めたじーちゃんを倒すこととした

ムラマサとテツオに入っている弾六発すべてを撃つた

「血迷ったか！こんな遅い弾、じゃ・・・ぬおー！」

ムラマサは完全に躲したと思ったが弾がありえない軌道を描いた

「ムラマサさん！こんなもの叩き落とせば・・・！」

つぎにテツオに向かった弾はテツオがジャブで打ち落とそうとしたが、パンチを躲すように軌道を描き体にまともに弾丸が当たつた

俺の《ヒット・コイン》は説明するまでもないな！表だったから必ず当たるよになんだけせ！

ムラマサ、テツオともに残りライフが一割を切っていた

「《エンジニアック・ライト》」

ムラマサ、テツオに光が射した・・・一瞬でライフが全開になつた

しくつたあああああ！あのばあさん回復職じゃねーか！なんで
気づかなかつたあああ！くそつ、まずばあさん倒さねえと・・・

が簡単にはできなかつた。つねにムラマサ、テツオはキーリー
に対して攻撃を入れオトメさんは回復に専念し、ゲンがそれを護つ
ている・・・四対一の闘い方としてかなりえげつない戦術であ
る・・・たまの隙ができたらゲンがバズーカやガトリング砲で狙つ
くる・・・このピンチを《アブオイデンス・コイン》でなんとか回
避するが運は何度も向くわけがなく

くそつ！またバズーカか「《アブオイデンス・コイン》」・・・
・・・裏だと！

直撃した

キーリーはぶつ飛び空中で体勢を整え着地した。ライフが一割減った

「イタツ！ とうとう運命の女神は俺様を見捨てたのか！ だが負けるわけにはいかない俺には信じて待つてくれている『せんちよ』もう無理じゃないですか？ 」 クルー達が「あ、こっちの試合白熱してますよ」と見ましょ

「ウチの娘は、お嬢様……」

なんかもう泣きてーぜーへそつーじつなつたら見返してやるー

「《スロット》！ 来い！」

突如としてスロットマシーンが出現し回りはじめた

一つ目觸體 二つ目觸體 三つ目觸體 一列觸體ができた

来たぜ！

「チエイン、《シェアリング・フィールド》」

爺さん婆さんの足元に魔法陣が出現した

「複合アーツ《デス・ゴスペル》」

突如として四人の老人の足元の魔法陣から黒い障気が噴き出し

「なにー?」「なんじゃこれは」「キヤアアア」「・・・・・

老人達のライフが一瞬でゼロとなつた

決まつたぜ!なんか反則くせえ技に見えるだろうがな確率論だけでいくとかなり成功確率が低いんだぜ?まず、《スロット》対象一体にてたスロットの役の効果を与えるものだがまず役が揃うこと自体が少ないさつきのは髑髏が三つで《デス》という即死アーツを出したんだが四人いつぺんに倒したよな?あればな《シェアリング・フィールド》によつて單一アーツの効果を複数にすることができるんだぜ!だがこの《シェアリング・フィールド》も発生確率があるんだが見事どつちも成功して勝つちまたたぜ!

「ヒヤッホウ〜〜〜!

「まだだよ、若僧」

！？

テツオが立っていた

なん・・・だと？

「あれは即死系のアーツかね？正直言つて驚かされたよ・・・。
だがな、私の『悟り』スキルはねAPをすべて消費するかわりに
イフ全開で復活するのだよ」

卑怯だろ！俺が言えた口、じゅねえが復活なんてあつたのかよ俺
はまもつギリギリなんだが！

「・・・・・・」

速いーーのjeeーーをさつきまで全力じゃなかつたのかよーーあき
しょーこつはさつきのコンボでAPに使える分ねーぜーいづな
たりとことじかんこつきあつてせんせー

「リロード、アバレット、アバレット」

「ライブバレット・速弾

格闘系スキルのほとんどはAPを使わないものが多い・・・。テツオにとつてAPがないことはたいして問題ではないのだ

テツオもキーリーもほぼ接近戦

テツオは拳や蹴りでの攻撃、対してキーリーは二丁の拳銃で拳や蹴りを受け流したり隙をみて撃つたりしている。

「ほう、なかなかやるじゃないか若僧。ただの臆病な遠距離タップと思っていたのだが考えをあらためんとな〜」

「じーちゃんこちやるじゃねーか・・・もつとも勝つのは俺様だがなー!ロード、《ライフバレット》」

俺はまた賭けにでるぜ!《ライフバレット》ライフルを削って巨大なエネルギー弾をぶつ放すアーツだ一気にかたづけるぜ!

「いくぜじーちゃん

キーリーはテツオに向けて撃つた・・・・・キーリーはエネルギー弾と言つたが実際は極太レーザーだ

一丁だつたら当たらなかつたかもしけないがキーリーには一丁拳銃があつた

一丁田の拳銃からのレーザー

「ぬおつ！」

命中

「まだまだまだあ」

連射する弾丸によるコンボを繋げるよう撃つ当てる撃つ当てる

だがテツオもただやられるわけがなかつた

「ふんぬつ！」

レーザーを《空手チョップ》で割り始めた・・・レーザーが切斷される・・・もちろん切斷しているからと言つてダメージがないわけではない

なんてじーさんだ！俺のライフは・・・一割^{二三}発分・・・じーさんも一割・・・どっちかがまともな一撃を入れたほうが勝ちだな

キーリーは前進した狙いは至近距離での《ライフバレット》の命中

また始まる接近戦

テツオの左ストレート右の銃で受け流す、右ハイキック少し体を後ろに反らして躰す、隙ができた

今だ！

テツオに向けて撃つた・・・・が、それはテツオの狙いだつた。あっさりと躰される

すぐに空いている右手の銃をテツオに向けて撃つたが銃を弾かれ変な方向に撃ち右手の拳銃は跳んでいった

・・・冷静になれ！俺にはまだ運命の女神がついているはずだ・
・・・一か八かこの方法を・・・

テツオの左の拳がせまる

・・・・・当たったキーリーの胸にテツオの左の拳がめり込
んだ・・・

力チャツ

テツオの背中に固いものが当たった

「そいつはにせもんだ」

テツオは目の前にいるキーリーが霧散するのが見えた・・・
・・アーツ《空蝉》うつせみ 一瞬だけの分身

「愉しかつたぜ」

ドン！

零至近距離、《ライフバレット》を当て試合が終わった

- - - 観客席 - - ツール視点

あのせんちょ～馬鹿なのかと思つたがかつけ～じゃねーか・・・
・・そういえば、シェイドさんの試合どうなつたのかな?上のスク
リーンだつたら終わつてるようだが・・・

「なあ、シルク。シェイドさんどうだつた?」

「・・・・・凄かつた・・・・・」

「?もう少し詳しく」

「ありえないよ・・・ヒルケさんの人形《血濡れた人形》^{ブランチディードール}がも
のの5分で破壊してヒルケさんの《城壁》の防御アーツのことび」と
くを無力化していつて10分で試合が終わつてしまつた」

とりあえず俺には人形の凄さがどれくらいか《城壁》がどんな
優れているかはわからなかつたが試合時間の早さだけはわかつたさ
つきからやつている試合はどれも30分以上の闘いだつた。で、試
合のレベルもかなり高いそんな中で10分は早過ぎる・・・一体

何をしたのだろうか後でシルクに聞こう

- - - - 『覇』試合終了間際 - - - ヒルケ視点

「はあつ・・・はあつ・・・」

「この人はありえない・・・・・私の最高傑作『血濡れた人形』をものの5分で攻略し破壊するなど・・・しかも私の結界は聞いてないのか？」

『覇』の闘技場は今闘いの場に魔法陣が全域に展開されている。
・・この魔法陣はヒルケの『城壁』スキルの『不可侵』というアーツによって展開されており魔法陣内ではヒルケ自身の防御力が上がり敵はすべて攻撃力、敏捷のダウンがあるはずなのだが

「この程度なのですか？残念です・・・そろそろ終にしましょ
うか」

奴・・・シェイドは今だライフが一割しか削れていないしかも・
・・・

まったく攻撃力、敏捷が衰えない！

大鎌が近づく・・・斬り裂かれた・・・躰す」とすらできなかつた敏捷が衰えるどころかまだ加速した

「あなたはいつたい？」

「第五位、ギルド『ミスティードリーム』ギルドマスターのショイドです。以後御見知りおきを」

第一回 戦勝者

『神』・『愉快賊団』ギルドマスター

『覇』・『ミスティードリーム』ギルドマスター

次回予告

キーリー（以下キー）「おおひとい、やつてきましたあー。キーリーの俺様紹介シヨー」

トーチがうわー！新キャラ紹介コーナーだ・・・・・氣を取り直して、今日は《榆海賊団》ギルドマスターのキーリーさんと《WG,s》のオトメさんです」

オトメ（以下オト）「あらあら元気ねえ～」

キー「あつー回復職の影がつすこばあさん」

トーチ「……………のせせつてねきましょい。失礼ですがオトメさんは何歳ですか？」

オト「今年で……………七十歳かねえ？」

キー「俺様を無視するな～」

トーチ「…………失礼。もしもし、ええ、ええ、お願ひします」

キー「何の電話だ？」

トーチ「気にしないでください…………はい、続きましてキーリーさんにも質問です」

キー「よし来た———さあ、なんでも質問するがいい」

クルーA（以下クA）「せんちよ～」

キー「何故だ？クルーの声が聞こえるー」

クA「ギルドの方が大変なことになつてます。すぐに帰つて来て下さい」

キー「何！質問はまだ後だ！それじゃくな～」

ト一「…………フフツ」

クルーB（以下クB）「トールさん、そちもわるよのぉ」

ト一「こんな簡単に追い出せるとは思わなかつたな…………まあ、こつちはひるさくて迷惑そつちは変なこと言い出さないよう口止め…………利害が一致したわけだ」

クB「それではまた機会があれば」

ト一「…………時間が余つたな…………クルーA、頼りない、騙されやすい、実はさつきのも騙されてやらされていた。クルーB、悪人、いい性格、なかなかの策士、本編ではあらわれないだろう…………こんなものか。ではまたの次回予告で」

シェ「あえて語るつゝ、オトメさんは素晴らしい回復職だと…なによりその存在の薄さ！回復するまでまったく注意が（以下略

“えりや、ジャッロです。

今日はひどいです・・・文章が
カラッと読んでください。

story26 準々決勝前

- - - - ドール視点

ヒューットードオオオオオオン

今、隕石が落ちてきて第四回戦の幕がありました

「準々決勝は明日あるからぜつたい見にきてね。レンからのお願い
だよ」

最後にウインク。

今国会をしてこむのは『リバー・メイト』のギャラグマスターのレン
である

はあー、スゲー鬪いだつた。よし、明日もあるし帰つて寝よつ・・・
・え？ 二回戦と四回戦はつて？ ・・・ しかたがない終始をまと
めて教えてやるよ

『神』

『ミラー・メイト』ギルドマスター
対

『愉海賊団』PT

勝つたのは前者の方だ……何と言うか『愉海賊団』って感じだな。レンさんが「せんちょ～」とか言っていた人達をギタギタにした。もう少し情報を付け加えよう……『愉海賊団』の方は戦う前に「えっ、俺達出ないといけなかつたんすか? せんちょ～聞いてませギヤ～～～～」・・・・・・こんな感じだ

『霸』

『聖騎士団』ギルドマスター

対

『深緑の森』PT

一回戦の逆。まず『聖騎士団』ギルドマスターは白を基調にした軽鎧、腕楯、片手長剣……とにかく真っ白……純白な装備をしている人。対して、『深緑の森』の四人は全員が弓装備だった……・・・・とりあえず結果だけ、勝つたのは『聖騎士団』の方……俺は『神』の方の試合を爆笑しながら見ていたから結果しか知らない

『神』

『WG, S』ギルドマスター

対

『ミラー・メイト』PT

ではまず『WG, S』ギルドマスターについて。黒いローブに黒いトンガリ帽子になんか凄い杖のいかにも偉大な魔術師です、というじいさん。『ミラー・メイト』の方は機嫌を損ねたレンに対して素早く対応したロートと他二人がいた。・・・・この試合は前のより酷かつた・・・じいさんは『究極魔法』のユニークスキルをもつていて隕石を降らすアーツ『メテオ』を連発してきた・・・普通なら連発なんかしたらAPがすぐに切れてなにもできなくなるはずだがこのじいさんは違つた・・・装備品をすべてAP自動回復品にして効果によつて一分間にAPの一割が回復するようになつていた。最後まで粘つたのはロートさんだったが初めにあつたあの隕石が最後で倒された。

『霸』

『俺の道』PT

対

『マリオット』PT

この大会初のPT対決。『俺の道』は博識そうなメガネキャラが男

女一人ずつと柄の悪い感じの男が一人。こっちの柄の悪い人の武器がおもしろい、一人はどすでもう一人はメリケンサック。《マリオット》は人形使いギルドなので、四人全員が人形を使っていた。・人形使いは基本人形に前線を任せて本体が後方で魔法を使うというスタイルが一般である・・・ということもあり手数的には《マリオット》は八人になる。まず、結果だけ言うと勝ったのは《俺の道》P.T.・・・なんかあらかじめ今回でるP.T.には対策が練られているらしい・・・シルクから聞いた話だが《俺の道》の博識そな人の男の方、副ギルでショウの弟で兄よりも切れ者らしい。人形が四体すべて破壊したそうだ。・・・これで、《マリオット》は今大会に敗退した。

とまあ、こんな感じだ。うーん(伸びをしています)・・・ずっと座つて見ているから疲れたな

「なあシルク、明日のつて？」

「変な質問するなよな。明日は闘技場《聖》であるからな・・・・まあ、また明日ギルドで待ち合わせよう」

「サンキュー、また明日だな」

俺とシルクは別れた・・・何か聞くことがあつたような気がしたが長時間椅子に座つていたことの疲労で早く寝たいという気持ちに負けて気にかけなかつた。

そして、宿に着き俺は寝た。

次回予告

シユ「やあやあ、久しぶりの私の『一ナーナー』

トーライドさんとロードさんが来るはず……」
トーライドさんとロードさんが来るはず……」

シユ「細かい」と気に……ワタシハナニモヤツテマセンヨ？
疑つてますね」

トーライドさんとロードさんが来るはず……」
トーライドさんとロードさんが来るはず……」

シユ「残念、実は私は今回何もしていません。レンさんが駄々をこ
ねて来なくなりました」

トーライドさんとロードさんが来るはず……」

シユ「あれ？ トールくん？」

トーライドさんとロードさんが来るはず……」

シユ「私に謝るべりいしてもいいのでは？」

トーライドさんとロードさんが来るはず……」
トーライドさんとロードさんが来るはず……」

シェ「…………まよいですね。彼の『スルー』スキルが格段に上
がってきていい!」（『スルー』・次回予告限定スキル、シェイ
ドの言葉を無視し続ける（＝ツッコミをいれない）だけのスキル）

story27 正々堂々？（前書き）

どうも、ジャッロです。

やつぱりサブタイトルつけるのが下手です・・・文が短いのも原因の一つではありますが・・・とにかく変ですね。

- - - ギルドホーム

「もう少しあの辺に行こう」

そう言って俺は椅子から立ち上がった。シルクも俺が立ち上がったのを見て立った。

「ああ、じゃあ行こつか

- - - 鬪技場《聖》

鬪技場《聖》・・・《霸》や《神》の一倍の大きさ・・・」
で準々決勝の四試合を行う。

順に第一回戦

《深緑の森》ギルドマスター

対

《ミスティドリー》ギルドマスター

第一回戦

『聖騎士団』 ギルドマスター

対

『俺の道』 PT

第三回戦

『ミステイドリーム』 PT

対

『愉悦賊団』 ギルドマスター

第四回戦

『ミラー・メイト』 ギルドマスター

対

『WG・S』 ギルドマスター

こんな感じだ

でもつて、今からショイドさんの試合が始まる

二人の人があらわれた。一人は真っ黒な鎌を持った人、もう一

- - - 戦技場『聖』 戰場

人は金髪の長い髪に緑色の軽鎧に身を包んだ人。

真っ黒な鎌を持つた人は《ミステイドリーム》ギルドマスターのシェイド。もう一人は《深緑の森》ギルドマスターのカリン・・・
彼女は軍刀と小楯を装備している。

「久しぶりに会ったわね、シェイド」

「ええ、お久しぶりです。今日は正々堂々と闘いましょう」

「あなたが正々堂々って・・・・」

カリンはシェイドに否定的な目を向けた

「あやー、私がそんなことをいつたら変で「変」すね、はい。」

シェイドは変ですかと尋ねつとしだが途中に答えられ肯定的な言葉になつた。

「あつ、そろそろ始まるわね」

カウントがはいった

始まつた

直後にシェイドが加速してカリンに向かつて行つた。

瞬間的にカリンの目の前、シェイドが大鎌を振るう。カリンはそれを腕に装備している楯で防ぐが・・・破壊された。

すかさずカリンはサーべルの水平斬りでシェイドに斬り掛かつたがシェイドはバックステップで躲しさらに下がり距離をおいた。

「こちら、シェイドーいきなり武器破壊はないでしょ！いくら魔武器じゃないからってこれだつて結構いいものなんだから！」

「試合中にそんなこと言つてけやダメですよ～。試合に集中してないからそつなるんですよ～」

またシェイドはカリンに向かつて加速した

「同じ攻撃は通じないわ・・・みー」

よーのヒュードアーツ《ストレンジ》 - 前方に16回の突き -
を放つた

真っ直ぐ向かつてきしたシェイドに命中・・・だがシェイドは
霧散した

『空蝉』！

カリンはこれを読んでいた。すかさず背後に向かつてサーベル
を水平斬り

力キン

背後にいた振り下ろされたシェイドの鎌をサーベルで弾いた・・
・が鎌だけ残してシェイドは霧散した・・・これも《空蝉》

シェイドは・・・また背後にいた

『三拳』^{みけん} - 右腕による三回攻撃 - で背後から殴った。

カリンはその殴られた感触でシェイドがどこにいるのかわかつ

たが・・・・・時すでに遅し・・・・・シードのコンボが始まった

『三拳』の次に『月蹴』・弧を描くよじて蹴り上げ・カリンを空中へ跳ばす、とばした後も追撃、シードは空中に跳躍し『亀裂蹴』横一文字に蹴り、そこから発生する鎌鼬で襲う・・・・・当たる・・・・・楯が無くなつた今カリンは防御系スキルが少ない・・・・・シードとカリンは地面に着地、直後にシードはさらに追撃、『戦烈虎砲砲』青い氣弾を放つた。

カリンにも攻撃する隙があつた

「調子に乗るな！」

サーべルが風を纏い、シェイドの方に向ける

「『ウインドバースト』、ディスクヤージー！」

軍刀から竜巻を飛ばした

竜巻と氣弾がぶつかる・・・・・拮抗はせず爆発

爆風、砂煙が舞う

「……」でカリンは思ったこの状況はショイドが奇襲してくるだろうと・・・・・いつ考えていると

「《詠唱破棄》《ダークーデル》」

「《詠唱破棄》《ソニックケージ》」

突如として聞こえた声に反応し飛んできた黒い針を自分の周りに出現させた竜巻により吹き飛ばした。

『ソニックケージ』により砂煙が吹き飛んだ・・・・・がカリ
ンにはショイドが見当たらなかつた

前にいない・・・となるとすぐに後ろを向く・・・・がいない・
・・・残りは上!

上を向く、上からの攻撃に軍刀を構えるが・・・・いな

ショイドは・・・・・影の中にいた、誰の?、カリンの

カリンの足首を手で掴み

「『ファイートフリーーズ』」掴まれた所から凍りつき太ももから
したがまったく動かなくなつた

カリンは声が聞こえたところで反応したが咄嗟に行動はできなか
かつた

「…………はあ、なんであんたはいつもこうわけのわからな
い闘い出来るわけ？あれ『空蝉』のように見えたけど『空蝉』じゃ
ないし。しかも、『上位格闘術』なんていつの間に習得してたのよ

「はははっ、誓めたって何もできませんよ…………おっと失礼
誓めてませんねすいません…………といひで降参してくれますか
？いや～私も旧友をボコボコにするのは気が引け…………え？
私にも良心ぐら～ありますよ？」

シェイドに抜かりはなかつた……足が固定されているのもそ
うだが鎌をもつ手はいつでも攻撃出来るようにしていてさらに足の
氷には魔法禁止系の効果もあるようであつたく勝てる気がカリンは
しなかつた

「…………あ～もう、負けを認めるわよ…………正々堂々？
砂煙から攻撃するわ、常に背後から攻撃しようとするわ。どうに正

「タ堂々があつた！？・・・・あつ、ショイド先にこれを解いてから、待ちなきい動けないじやない。」「ら〜〜〜無視するな〜〜！」

足の氷がある程度溶けるまで放置されたカリンだつた

- - - 鬪技場《聖》観客席 - - ツール視点

・・・・・ シエイドさんに勝てる人いるのか？今回の試合を見て思うのは・・・いや、シエイドのあらゆる試合を見てどこか底が見えない強さを感じる。今回の闘いもそうだ意表のつきかたが読めない

「シェイドさん勝つたな」

「……トール、シェイドさんってなんだろうね？」

「それは考えちゃダメだ

といふえど第一回戦が終わつた

第一回 戰

『ミステイドリーム』 ギルドマスター 勝利

次回予告

ト一「はい、今日はゲストに『深緑の森』ギルドマスターのカリンさんにもいらっしゃいました」

カリン（以下カリ）「はじめまして」

ト一「シェイドさんは旧友だと聞きますが」

カリ「ええ、シェイドとは初期の頃から一緒にPTを組んでいたわ」

ト一「そななんですか・・・・・ちなみにシェイドさんは昔からあんな奇人だったんですね？」

カリ「そうね、まったく性格は変わらないわね」

シユ「あなたもじゃないですか」

ト一「また突然あらわれたよ」

カリ「あら、シェイド初めてからいたらいのに」

シユ「え、いいのですか？あなたの秘密大暴露しま・・・・・・・・・とりあえずその軍刀は下ろしてもらえますか？」

カリ「やつぱ、うん。いなくていいわ」

シェ「ひどいですね。別にあなたの片想いの相手が誰とかその人にまだ告白すらできないとか・・・はははは、逃げる」

カリ「ふふふ、やっぱシェイドだわ。いつかケリをつけようと思つて、あ、逃げるな」

トーラ「・・・・・あれ？途中から俺の存在がなかつたような。てい
うか皆フリーダムすぎなんだよ・・・・・はあ、それではまたの次
回予告で・・・・・俺つて本当に主人公なのか？」

いつも、ジャッ口です。

なんだかな～戦闘が好きだからって大会編に入つたけれど今は非常に後悔・・・・ふむ、どうしようか

第一回戦は相変わらずショイードさんが勝つひもつたな……

あ、第一回戦だ。ビーバーだ。

第一回戦

『聖騎士団』ギルドマスター

対

『俺の道』P.T

わからん……」んなどきは

「なあ、シルク」

「まず、『俺の道』P.Tはシヨウさんの弟であるセイジさんがこのP.Tの指揮をとつていてユニークスキルがあるわけではないがその凄い戦術で強力なモンスターを打ち倒してきたこと有名だ」

俺がシルクのクを言い切る前に解説が始まった、わかつてらつ

しゃる

「……だからこのP.T.は誰だつて嫌がるんだ」

おつと聞いてなかつた……聞き直せねー

「じゃあ次に、『聖騎士団』ギルドマスターについて。まず、ネームはレウル、ユニークスキル『聖剣』を持つている。この『聖剣』が異常に強い……らしい。聞いた限りでは言葉にできないほど美しいとか」

これは、わからん。……まあ、今からやるのを見ればいいか

戦場内に一人と四人が入ってきた

四人の中に一人メガネをかけた赤い髪の人気がいた。どうやらあれがセイジか。

で、もう片方・『聖騎士団』のほうは前回と同じように真っ白な装備な人、この人がレウル。

試合はもう始まる・・・・・・始まった

先手はドスを持つた人が先陣を切つた

レウルはドス（めんどくさいからドスで）を魔法で牽制を入れた、《ライトニング・ソード》を放つた。三本の光の剣が飛ぶ

ドスは構えたがドスには一本も当たらなかつた、その先にいる三人に剣は向かっていた

後ろにいつた剣はメリケンサックをつけた人が見を呈して防いだ、残り一人は魔法を詠唱している・・・・どうやらかなり高位の魔法を唱えるようだ

ドスが斬りにかかつた・・・・が、勝負が一瞬で片がついた。

レウルの連撃、すべての攻撃に光りが纏っている・・・多分攻撃に光属性が付与されていると思う・・・成す術も無くドスのライフが尽きた

「テツエモン！よく時間を稼いでくれたお前の敵は討つてやる。
・・・・白騎士、くらえ！複合アーツ『アーケレス』」

セイジさんともう一人の人の高位魔法の複合アーツ、聞いたことがないアーツ

青い稻妻と青い水が一人の魔術師の前に球体で出現し風船のように膨らみ射出、レウルに向かつて放たれた

青い球体、大きさが半径5mの球体バチバチいつているのではなく絶え間無く轟音が鳴りづづけている

対するレウルは

「『セイクリッド・ライト』『ディヴィアインソード』……
・・貫け」

突如として空から光りが柱のように差し込み青い球体が減速し、その後青い球体に負けないぐらい大きい光の剣がレウルの真上に出現し、「貫け」の合図とともに青い球体に矢でも放つたような勢いで剣が飛び、まず青い球体を何の苦も無く貫き消滅させそのまま『俺の道』の三人に向かつて地面に刺さる

地面が割れ、一人だけ立っていた、セイジだ。他はどうやらソラが尽きたようだ

セイジが万歳をした、これは試合でいう降参を意味する、セイジから負けを認めた

・・・・まあ、しかたないよな。ただでさえ強力な複合アーツしかも上位のアーツによる組み合わせが詠唱もないアーツによってやられたら戦う気も失せるな

第一回戦

『聖騎士団』ギルドマスター勝利

次は第三回戦、ベクトルさん達の試合

- - - 控室 - - ライカ視点

「はあ」

何故私がため息をついているのかというと、今だ言い争いしている一人がいるから

「ちょっと、シエル抜け駆けは許せないわ」

「何言つてゐるの？抜け駆けつて、私はただ」

「お前ら、今から試合だつが喧嘩なら試合が終わつぐふつ

オマケにベクトさんも役に立たないし、ていうかこいつなつたシエルさんとホリイには脅し以外止める方法ないと想つんだ。あつ、あとショイドさんが仲介するか

とりあえず私はショイドさんにメールを送つた・・・・・・
さて、ショイドさんはいつになつたら来「ライカ君どうかしました
か？」・・・・・はやつ！

ライカがメールを送つた五秒ぐらいに現れて一瞬反応できなか
つた

落ち着け私・・・・・ふう

「ショイドさん、あの人達止めもらひませんか？多分原因シ
Hイドさんなので」

「ふむ、止めなくていいのでは？あら、喧嘩するほどなどせ

「うう、まあし、ね？」

「ねっ、じゃなく・・・」

「おやへ、あれで寝てこるのはベクトですか？」

「二人に顔面にストレートが入りました。だから止めてくださいって」

「おもしろいんだからいいじゃありませんか」

平行線、話が進まない、話が躲される・・・・・シハイドさんと話すのも疲れる、なんかもう嫌だよね・・・・

「あー、ショイド」

「あら、ショイドとライカちゃんのツーショット」
「あれは変態の田だよー」

「あー、こまわり気づいた。なんかシエルさんが怖い・・・・田が

「どうです？次の試合・・・・・勝てます？」

「楽勝！シエルが必要ないぐらいいたね！」

「余裕ね、どうせあの馬鹿な人でしょ？ホリイがいなくてもいいわ」

何だううね、何でこの一人は・・・・・シエイドさんの言つ通り喧嘩するほどなんとやらかな

コンコン

「十分後に第三回戦を行いますので準備をお願いします」

大会運営の係員の人が呼びに来た

「はい、では皆さんの活躍を期待していますよ

「ねえ、シェイドこれが終わったらライカちゃんと三人で買い物に行かない？」

え？ 私も？

「どうからら、なんで私を抜く！」

「うるさいわねえ、ライカちゃんとショイド以外に興味がないわ。しつしつ」

「この一人せつたい仲が良いと思つただけだ。あつ、ショイドさんがこいつちきたている。

「ライカ君、指揮は任せましたよ」

小声で言つてきたが、言われるまでもない。この前の試合でベクトさんが使えないことはわかつたので私が指揮をするのは決まつている。

「はい」

返事だけはしといた。

それで、行きますか

次回予告

ト－「今日はゲストにライカさんを招いてます」

ライカ（以下ライ）「あ、うん。はじめまして」

ト－「これよりライカさんに質問をしていきます。では始めにシヒ
イドさんって何ですか？」

ライ「うん、その気持ちわかるよ。でも私も詳しくわからないよ。
・・・悪い人ではないんだよね」

ト－「まあ、なんだかんだで人望厚いんですね。では次の質問、
ライカさんはぶつちやけ好きな人はいますか？・・・・・ちな
みにこれは霧夢の男性ギルメン達の声です」

ライ「え？なんでそんなこと引き受けてるの？まあいいけど。いな
いよやういう人は（本当はいるんだけどね）」

ト－「はい、わかりました。そういう人がいるんですね」

ライ「人の心読んじゃダメでしょ！」

ト－「え、マジなんですか？そっちの方が面白いかなって、あつシ
エイドさん」

ライ「今の話ショイドさんに聞かれた！？確実に噂が広がる…まつて～ショイドさん」

ト一「…多分いつもの如く次回予告を邪魔しにきたんだろうな。で、スクープを偶然手に入れたと…ライカさんご愁傷様です。それではゲストもいなくなりましたのでまたの次回予告で」

いつも、ジャッロです。

・・・・この前振りいらないですね

さて、気づいた人はいると思いますがあらすじ（?）を変更しました。あらすじが適当すぎる！ということに前々から変えようとは考えてはいましたが行動には移らない日々が続きつい最近変えました。

そして、今話は自分でかなり出来が悪いと思います。ああ、本当にこの先どうしよう。

一つだけ言おう今日はキーリーには運がなかつた、と。勝負は一瞬だつた

- - - 5分前 - - ベクトル視点

ホリイとシェルに殴られた顔がいてえ、つたく俺にとってはショイドは疫病神だつての！

ベクトル三人は戦場にいた。もつすぐ試合が始まるからだ。

3 . . . 2 . . . 1 . . . F·i ght

始まつた

そして

「今日は俺様は始めから本氣でいくぜー！『スロット』」

キーリーがそう叫んだが

猫、髑髏、コイン、一列の柄がバラバラだった

「ノオオオオウ」

馬鹿か、と思い俺は《神速》を使い敏捷パラメータを上げ速攻で決めにいった

《瞬影連閃斬》！・・・《神速》も《瞬影連閃斬》も前回出してしまったのでもう出し惜しみしない

だがキーリーも黙つて攻撃を受けるわけもなく「《アブオイデンス・コイン》」「コインを投げた。

表なら絶対回避、裏なら回避不可

コインが今落ち・・・・・・・・・・裏

「ノオオオオウ」

96連撃をとともに受けた・・・・だけではなく、シエルの無造作の矢の雨も全弾命中、とりあえず撃ちまくったホリィの炎弾も全

弾命中

- - - - ツール視点

「うん、ひどい試合だな。何か観客席からいつぱいブーイングが聞こえるし……あれだな前回の試合でキーリーは運を使い果たしたんだよ………じゃないと報われない

さて、次の試合か。魔法連発するジーさんか鏡使いのレンさんか

- - - 戰場 - - レン視点

ねー、あのおじいちゃん反則だよね。だって一分毎にA Pが回復するんだよ？普通のプレイヤーなら何も問題ないんだよ？でもあるおじいちゃんだからね………まあ、それなりにがんばろ？皆の敵討たないといけないし

試合開始の合図、始まった

「ほつほつほつ、可愛い女子を傷つけるのはちと嫌じゃのう…
・降参してくれんか？」

「おじこちやん」も降参しないの？老体を慮める趣味はないの

で」

「残念じゃ・・・樂はできんもござやの！」

「おじこちやんはもう引退すればいいんじゃない？」

「の会話が最後だった

闘いが始まった

「《詠唱破棄》《メテオ》」

炎石の塊が落ちてくる。レンはとつあえず躲した。

「まだまだ《詠唱破棄》《コキュートス》《詠唱破棄》《ヒート・ブレイズ》《詠唱破棄》《サンダー・アーマー》」

無茶苦茶だった。火、水、雷の上級アーツを連発してきた。普

通なら《詠唱破棄》を使って上級アーツを使つたら一発が限度だ。

それあと一発放つた

《コキュートス》 - 指定した範囲に氷の柱を精製 - もちろん範囲内なら一緒に氷漬け、これは間一髪でレンは躲した。

《ヒート・ブレイズ》 - 広範囲での炎上 - 実際は炎上というほど優しくない炎の波がレンを襲う。レンは《上級水魔法》スキルの《バブル・ボム》 - 水砲弾何かとの衝突後爆発 - により炎を相殺しこれも回避。

《サンダー・ドラゴン》 - ドラゴンを象つた稻妻による攻撃 - ドラゴンがレンに迫る。

「《ミラー・シールド》」

レンの前に大きなハート型の鏡の出現。《ミラー・シールド》 - 魔法攻撃を反射する鏡の楯 - でドラゴンを反射することはできなかつた。反射効果はダメージ許容内のもの以外反射できない、つまり《サンダー・ドラゴン》のダメージ量が《ミラー・シールド》の反射許容量を越えている。

鏡の楯はドラゴンに割られレンに直撃。レンはライフの六割を削られた。そして、じーさんの攻撃は止まない。

上位魔法連発していくジーサンに防戦一方のレン、じわりじわりとライフを削り

「『詠唱破棄』『エレメント・フォース』」

四属性の上位魔法同時発動に回避する術がなくレンは敗退した。

第四回戦

『WG, S』ギルドマスター勝利

story29 あつむつ（後書き）

次回予告

シエ「やつてまつりました」のコーナー。突撃、隣のシェイドさん

トー「いや、どんなコーナーだよ。つーか本人が言っているのに隣
も何もねー！」

シエ「このコーナーは隣の部屋にいる人をシェイドさんと突撃し、
金を巻き上げるといつものです」

トー「なんだそのコーナー。隣の晩御飯的なものじゃないのかよ！
つーか、シェイドさんは必要なのか？」

シエ「それでは最初の犠牲者は誰でしょうか？隣の部屋に突撃

トー「…………見ええ、聞かねえ、何も関わりたくない…………
」

シエ「おや、ベクトですか。さつそくですが金を差し出してくださいさ
い…………理由と申しますとこういうコーナーをやつております
て…………残念です。実力行使は嫌いなんですが…………ほう、
決闘には乗り気ですか。ではベクトが負けた時あなたの全財産をギ
ルメンに均等配分しましようか。…………そうですね。私が負け
ることはないですが、負けたら会議にちゃんと参加しましようか」

トー「…………次の次回予告、ベクトさんの愚痴かな？」

いつも、ジャッロです。
さて、意外と書ける。

目標では17日だったんですがね

なんだろうか何かが舞い降りた？ふむ、ミステリー

「あ～、くそつ早く家帰りて～」

俺は今学校にいたりする・・・・・・昨日の試合終了後ログアウトして学校に来ているわけだが、多分この時間帯はゲーム内ではショイドさんやベクトルさん達の準決勝がやつてるはず

「おい、篠田～これ解いてみる」

今は授業中、数学の問題を解かされた。

カリカリカリ

黒板に計算過程と答えを書き・・・・うん、完璧だ

先生の方を見た

「ちっ

「ちよつ、今舌打ちしましたよね。」

「いや、気のせいだ。篠田席に座つていいぞ」

まあ、多分問題が当たられたのはゲームのことばかり考えていてぼーっとしていたからだらうが答えたからって舌打ちはないんじゃないか？

「トオルぼけっとしますわ、さつきから先生が」

「じゃあ、次は隣の黒崎。これ解いてみろ」

「……はい」

今俺に話しかけてきたのは黒崎晶男くろさきあきるみたいな名前だが女だ。幼なじみという関係が一番合つだらう。

俺に話しかけてきたアキラが田代とく先生に見つかったわけで

「はあ

もう、帰りてへ。授業はこれで最後だが加速されたあの世界だ

と一時間が三時間学校通つだけではなく一日半経つているわけ

「それからため息ばかりでつまらこよ？」

俺と同じく問題をきちんと解いて戻ってきたアキラに言われた。

- ・つーか、ため息もでるわ！今の俺に学校は牢獄すぎる……
- ・あ～そういう今日掃除当番か、よしサボろう。

キンローンカーンロッ

よし、時報が鳴った。これでホームルームをえ終われば

- - - - -

「以上だ。じゃまた明日な

テーチャーの言葉も終わり。いざ、エスケープ。

がしつ

俺の肩が掴まれた。誰だ！俺の邪魔をする奴は！

「トオル何処に行くの？今日掃除当番だよね？まさかサボるつ
なんて思ってないよね？」

まあ、この教室で俺の行動読めるのはアキラぐらいだしばれる
かなーとは思ったがまさか教室出る前に捕まるとは思わなかつた。

「いや、弟がケガして今から見舞いに行かないと」

「弟君は今日平然と学校来てたよね？やつぱりサボる気だつた
んだ・・・・いつちー、みすず、これ捕獲するよ」

教室にある一つの出口をこつちー」と市原翔太とみすず」と木
田美鈴に塞がれた。
だみすず こちー こちばらじょうた き

ははは、甘いなーもう一つ出口はあるだろー。

俺は肩にあるアキラの手から逃れ窓に足を掛け・・・・・・・
飛び降りる

ちなみに、俺の教室は2階…………だがまあ、この程度の高さなら飛び降りれないこともない

着地

「ははは、アキラ甘かつたな。それじゃ帰らせてもらひやせ

ふつ、俺の勝ち（？）だ。まあ、俺にかかるば……

「とにかくがどつこい。ナカシマ参上！」

「ナカシマ…………まさかお前も俺を捕獲離せー」

ナカシマ、なかしまだいち中島大地。2mといつ巨人。俺はナカシマに捕獲された

- - - 教室

「くそつ、まさか俺が飛び降りることまで想定済みとは

「ほら、ひとつと掃除すれば早く帰れるから

いやいや、この掃除している時間すり惜しいんですよ。なんか常にナカシマが手の届く範囲にいるから逃げねー

まあいい、捕まつたなら仕方がないアキラの言ひ通りをかわして終わらせて帰るか

サッササッサササッ

よし、終わった。じゃあ

「じゃ、俺は帰る。じゃあな

脱兎の如く走り去っていたが

がしつ

まだれかに捕まえられた。

誰だ！俺の帰路を邪魔する奴は

後ろを振り向いた

「…………部長なんですか?」

「こせーこせー」といひ合つた。よし今から部屋にあたまえ

はしづこせーせー待てよそれは暴挙すがるさじや、またせひわれ
る

- - - ゲ会、部室

うーん、どこから状況を整理しようか……まずは「はゲー
ム同好会、ゲ会の部室で俺をさらつたこの男、ゲ会の部長、空木裕
樹三年生。

「で、何の用ですか?俺ととと帰つて『ひげに行こう』やり
たいんですけど」

「すいし、待つてくれ……」

「の部室、漫画、攻略本、ゲーム機、はたまたゲーム関連の情

報誌なビデオゲームになつてこる。今やこれから部長は何かを探している

「…………お、あつたあつた。これだよこれ君に渡したかったのは」

黒いパッケージのゲームディスクが入つてる箱……カオスオンライン？

「何ですか？これ何のゲームですか？」

「ほりねにあげたじゃん『CHAOS ONLINE』？」

「いやいや、あげたよ。『狩りに行こう』の箱に入つてた黒いディスクあれ、これでちょっと私のミスで『狩りに行こう』の箱に入れて渡してしまつた」

「…………はあ？」

「ちよつと待つてください……今俺がやつてるゲームは

『CHAOS ONLINE』？」

「イエス」

「んで、部長のミスで俺にくれた時に箱とディスクが違つて渡した?」

「イエス」

あ~~~~~、うん。部長ならやりかねない、ていうかもうやつてしまつたのか・・・・・・説明しよう、俺はあのゲーム狩りに、じゃなかつた『CHAOS ONLINE』を部長から貰つた。で、俺が貰つた時箱は『狩りに行こう』でディスクは『CHAOS ONLINE』だつたわけだ。でもって俺はこのゲームを予備調査なしにやつちましたから情報の違いとか知らなくてこれは『狩りに行こう』だと思つっていた。

「で、なんでそんなめんどくさいことになつてるんですか?」

「はっはっは、聞いて驚け・・・・箱開けてディスク解析してたら箱が行方不明になつてたからとりあえずそちら辺の空箱にいれた」

「じゃあせめて一言こつて渡してくれださよ」

「いや、まあゲームしてたら氣づくだろ?」

まったく氣づけないんだよな、これが。CHAOS ONLINEってゲーム中まったく表示しないディスクも黒一色でタイトル書いてないし

「無理だー!」

「そつかー…といいでー一日間いや、あっちの時間なら六日間か?
やつてみてどうだ、面白こだろ?」

癪だが確かに面白い・・・・・・つて待て、そつだよもうすぐ
決勝始まんじゅねーか

「部長、箱は頂きます。『狩りに行ひ』は明日、返します。
じゃ、そういうことだ」

俺は足早に部室、学校を出て家に帰った。

家に帰る途中思つたが部長も『CHAOS ONLINE』や
つているのか聞きそびれた・・・明日『狩りに行ひ』を返すつい
でに聞こひ。

次回予告

ト－「きたぜー俺メインの話・・・・いや、おかしいな本来はもとからこいつあるべきだつたはずなのに何故」

シェ「ほーう、トール君の現実リアルの話ですか」

ト－「あんたのせいだー」

シェ「なんですか？大声だしたりして、どうかしましたか？」

ト－「ほほ、主人公の座を奪いかけてるだろ」

シェ「なんのことですか？私はただ普通に」

ト－「あなたの普通が俺の主人公の座を奪っているのか！」

シェ「さすがにそれはどうしようもありませんね・・・・どうですいつも、主人公になつてみましょーか」

ト－「なつーべそつ、そんなことはさせん。次回ぐはつ」

シェ「次回、シェイドオンライン第一話、主人公の座は私のもの。次回予告でまた逢いましょー」

いつも、ジャッ口です。

やはり思う事は更新速度が遅いわりには文章量が少ないといった感じです。

さて、ログインしたぜ。一〇分から闘技場《陰》までダッシュ
ログアウトした場所はいつも使つてゐる宿《葉落亭》、そこから
30分歩いた場所に闘技場《陰》がある。走れば10分ぐらいには
なるだろ?。

今はだいたい・・・三位決定戦をやつているだろう。

「アリスがアリスアリスアリス」

叫びながら全力で走った

- - - - 鬥技場《陰》

よし、JRの階段上つさればもう見える。

- - - - - ପ୍ରକାଶକ ଅଧୀକ୍ଷତା ଏବଂ ପ୍ରକାଶକ

ん？三位が決まつたのか？

駆け上がる

…………白騎士とベクトルさん達が戦っている…………いやもう終わったのか。

じつやう三位は『聖騎士団』のギルドマスターのレウルさんらしい。ベクトルさん達が負けたようだ……ん?ついことほだ。シハイドさんも決勝進出していたのか

え?マジ?シハイドさんってそんなに強いのか?

疑問になりながらシルクの隣……指定席まで行った。

「シルクにつからーた?」

「ひょっと前に来たばつかだよ…………学生だから多分つづきだらうが

り負けたよ」「ひょっと前に来たばつかだよ…………ベクトルさん達があつさ

「信じられないよなーあんなに強いのに、あともう一ツショイ
ドさとつてやつぱり決勝いつてるのか?」

「らしいね。対戦相手はタケルさん……あ、名前知らないの
か『WG』『S』のギルドマスターって言えばわかるだひ?」

あの無茶苦茶じーさんか…………何故だろうかショイドさん
が負ける絵が想像できない

- - - - -

「いや~お久しぶりです、タケルさん」

「久しぶりじゃの~…………って久しぶりじゃないわ~」

「」「…………」「

「はははははははははははは

「ほつまつまつまつまつまつまつまつまつまつまつまつまつ

何だかなー、試合始まつてゐるのに普通にしゃべつてられる。

「お～、シェイドよ。それなり試合した方がいいんじゃないかな？」

「そういえば、そうですね。いや～すっかり忘れてましたよ。では」

シェイドが大鎌を構えた。

「始めるかの」

じーさんも杖を握りなおした。

先制はじーさんの《ファイアーボール》から始まった

三つの炎弾がシェイドに当たるが、シェイドは霧散・・・《空蝉》、シェイドさんの得意技。シェイドさん本体はじーさんの真後ろ、シェイドが鎌を振り下ろす

しかし《エア・バースト》・自分の周りに吹き飛ばし効果のある衝撃波・によりシェイドは吹き飛ばされる。

すゞいな、背後を見てすらこないところひとせじトイドさんの
攻撃を読んだ上で『ニア・バースト』か

吹き飛ばされたショイドもまた霧散、ショイドさんはじーさん
の影から出現し、足に手で掴もつとして

「『詠唱破棄』『ロック・ブレイク』」

『ロック・ブレイク』・自分の足場を中心小さな地割れ・に
より影が不安定になりショイドさんは影から飛び出た

「『詠唱破棄』『ブラッティ・レイン』」

飛び出したショイドはすかさず、魔法を放つ。紅い槍の雨を降
らす。

「『ナルカリミ』」

雷の一閃で槍の雨」と震え、そのままショイドへ雷が向かうが
ショイドは『ルナ・セイバー』で雷を断ち切り、ジーさんへ振り下
ろす。

「『ホムリ』『ナルカリ』『レイアン』、複合アーツ『縛』」

三つの上位アーツによる複合アーツ、ジーさんの前に大きな三つの一ずつ赤、黄、青からなる魔法陣が現れる。

「いや、残念です。こんなに隙をつくるとは思ってませんでした。」

が、ショイドはジーさんの後ろで鎌を首に突き付けていた。

「・・・・田の前におるのはお主じやないのか？」

その通り、ジーさんの前には『ルナ・セイバー』を使っている
ショイドがいるがジーさんの後ろにもショイドがいる。

「わしの記憶違いじゃなければ実体を持った分身は自由に動き
まわったり、多数のアーツを駆使したりしなかつたはずじゃが？」

ショイドにしか聞こえない音量でジーさんは言った。

「何度も使つてましたよ？一回戦や二回戦に・・・・まあ、

あなたならもう予想はついたでしょう……では降参してもらいますか?」

「ふむ、では最後にそれは何体まで増やせぬ?」

「三体です」

ショイドとジーさんは聞き取れないぐらいに小声で話した。

- - - 鬥技場《陰》観客席 - - トール視点

今、ジーさんが降参した。つまり、ショイドさんが優勝した。周りが一斉に声で包まれる。

「ショイドさんってあんなに強かつたんだな……なんで霧夢、第五位ギルドなんだ?」

「ギルドのランクはギルド全體のクエスト達成率、依頼達成率やらいろこりあつて誰か一人だけすごくてもランクには直接関わらないからね」

そうなのか、まあ何にせよ自分の所属するギルドマスターが優

勝したんだし喜ぶべれといだよな

「今から、打ち上げだつて」「優勝したから賞金三億ノールだつて」「だったら、シェイドさんなら打ち上げに盛大に金使ひだらうな」

「ギルドホームへやるんだつて」

近くにいる同じギルメンの声を聞いて

「シルク、俺達も打ち上げ行こいぜ」

「ああ、行こいわか

俺達はギルドホームへ向かつた

次回予告

ト－「今日はショイドさんについて語るのでゲストにベクトルさんになりました」

ベク「よつ」
ト－「はい、それではまずショイドさんとせどり口で知り合ったんですか？」

ベク「闘技場でショイドと闘つた事がきっかけだな」

ト－「ちなみにどつちが勝つたんですか？」

ベク「一方的にやられて負けた、つーかあの時はショイドについてまつたく知らんかったからな」

ト－「やうですか。ショイドさんのファンクラブ、SFJはこいつ頃からできていたんですね？」

ベク「あ～、あれは実質ホリイがショイドにふられた後から……つてこられ言つていののか？・・・・・すまんやっぱ今のは無しで」

ト－「では、ショイドさんに一撃」

ベク「会議に出席しゅ」

ショ「はい、ありがとうございました。では最後の質問私は誰でしょ
う」

ベク「…………はつ一何故ショイドがここに、さつきまでいた
トールは!？」

ショ「では、またの次回予告で逢いましょう」

ベク「いや待て謎解きしてけ、おい待て!中途半端すぎんだぞ」

いつも、ジャッロです。

ゲームに忙しくて・・・いろいろな事情により更新が遅くなりましたが、もう大丈夫片は付きました。まあ、そりやあ百時間もプレイ時間が経つてれば・・・では、お読みください

「はい、ではショイドわん優勝、ベクトさん達4位を祝します
て乾杯」

いろいろな音が広がる。

今はギルドホームで打ち上げをしているわけだが

「おうううう、俺も見に行きたかったのに、なぜだなぜじやんけんに負けた」

試合を見れなかつたジンさんの愚痴を聞かされてる。事の顛末を言ひと、ギルドホームを開けたままにしておくのはあまりにも無用心だ、ということで何名かショイドさんに呼び出され「では、この中から屈残り組を決めようと思います。私どじゅんけんで負けた人にしましょうか」でジンさんは負けた、そして、今に至る。

「いや、もひじゅんけんの話はいいです。つーかもひそれ四回は言つてます」

ちなみにジンせん酒飲んで相手にしてられない

『あー、あー、マイクテス、マイクテス。聞こえますか～？』

何か始まつた、シェイドさんがマイクを持つてゐる。

『今田もう一つお知らせがあります

なんだらうか・・・ろくな事ではないような気がする

『なんと！ユニークスキル持ちが増えました。彼はたつた五日間でレベル20に達し・・・』

・・・おい、それって俺のことか？

『・・・とこつわけで、ユニークスキル《蒼狼》を手に入れた、トール君です』

いきなり周りの明かりが全て消え俺だけに明かりが・・・・・・

『トール君、かもーん』

ふつ、俺が言つことを聞く…………わけがない

「嫌だ、断る！」

後ろを向き走りだし・・・・・たかつた。

「はい、」愁傷様「トール君、あきらめなよ」「周りに君の仲間はないよ」

名前も聞いてない人達に捕まえられた。そのまま連行

『残念ですが逃がしません。いや保険に何人かトール君の周りに捕獲部隊編成しておいてよかつたです。』

「つーか、ショイドさん、ギルメンに話すのは止めとくんじゃなかつたんですか！？」

『そのとーり、と言いたいですが・・・みなーん、一つだけ言わせて頂きますと彼のユニークスキルたいしたことないスキルだったんですよ。なので報告しました。以上です。あ、あともう一つありました。明後日より第五回、ギルド内レベル帯最強決定戦やりますよ。はい、これで本当に以上です』

シードがマイクを離した。

「で、シードさん…………へりー。」

いろいろな負の感情を込めたパンチを繰り出したが

「ショウコウケン（なぜかカタマリ）」

パンチが当たる前にシードさんのアッパーが顎にジャストミート。

「危ないです、短気はいけませんよ。」

「いや、受けってくれてもいいんじゃないですか。」

「痛いの嫌ですし」

「へりー。」

「ハドウケン」

不意打ちのパンチも当たらなかつた。《戦烈虎砲》放たれて
トールは氣を失つた。

- - - - -

- - トール、起きりトール

「うるさい、と思いながらも起きた・・・・」
「は、ギルドホー
ム・・・・・

「・・・・・なぜ！」

「あつ、起きたか

シリクがいた。

「なあ、なんで俺はギルドホームで寝てたんだ？」

シリクは一度、は？みたいな顔をしたが納得したよつて、あ～
みたいな顔をして

「じゃあ逆に聞くけど昨日の記憶は？」

「昨日……………シェイドさん殴りこいく」

思い出した、いろいろ振り回されたあげく俺に『戦烈虎砲』まで放たれただとを

「シェイドさんなら別支部に行つたから当分いなーよ」

「なんだとー。」

「いや、それよりも昨日お前が気絶したあとひど……凄かつたんだ……。」

シルクから聞いたかぎりこいつだ。

俺が気絶したあと、ギルメンの数人がパーティー組んでシェイドさんに挑み乱闘が起きたそうな。さらにその乱闘がヒートアップしていきシェイドさんvsベクトさんamp;ライカさんamp;シェルさん&ホリイさんのギルドマスター対福ギルドマスターのカードが組まれたようだ。で、勝者はライカさん。ちな

みにこの対戦ショイドさんに勝った人がショイドを連れていくける権利が与えられるやうでライカさんの支部行きになつた、と。

「うわっ、俺もその試合見たかつたな・・・ショイドさんめ

「てこうか、トールいつの間にユニークスキルなんて持つてたんだよ」

その話にきたか、と思いついたことをシルクに話した

「・・・ユニークスキルって何なんだろうな?」

「僕はそんな経験すらしたこともないからもつと謎だよ」

こんな結論のでない会話を打ち切るためにこれから一事について話した。

「あ、シルクこれからレベル帯ならびにがこいよ?」

「ん?ああ、そうだな・・・いや、僕もレベル19で近いしきちの知り合いでいつも狩りに行ってるパーティーに君も入りなよ」

「いいのか？」

「いいよ、というよりソロでたつた五日でレベル20になれる
ぐらい強いんだしかなり期待もしてる。」

そんな感じでシルクのパーティーに入る予定

次回予告

ショ「ああ、鬱です」

ライ「ビリしたんですか？ ショイドさん」

ショ「あなたが私に勝つたから本編で私の出番が確定にない！」

ライ「負ける方が悪いんじゃないんですか？」

ショ「いやいや、それにしても酷すぎますよ。だって、ベクトルやシエル達を盾に私をラッライライにしてくれたじゃありませんか？」

ライ「ショイドさん、ラッライライはビリつかと思いません。」

ショ「イッカイカよりいとは思いませんか？」

ライ「……そうですね」

ショ「ああ、私の出番は次はいつたいといつなんでしょうが」

ライ「知りません。ですが」こちらの支部の雑用をいっぱいしてもらわないといけないので

ショ「そんな殺生な！ 出番がない上に雑用まで！ いやだーーーあー、ガーちゃん離してください。嫌だ！ タスケターー、私に自由を！」

ライ「ショイドさん壊れましたね。こんなショイドさんでは次回予告にも出させませんので、次回の次回予告ではトール君達がやつてくれるでしょ。・・・・・オチなんてありませんよ?」

stor y33 オブジェクトフレイク（前書き）

いつも、ジャッロです。

スキル集・アーツ集のまとめはいつだそつかお悩み中

「グロフー！ わフー！」

目の前にブルーゾンビが三体、青い肌所々皮がめくれてたり血を流していたりした人型。

それを《ソニックエッジ》や《狼波》などの飛び道具で倒す。つーか近接戦闘はしなくない。

四度目の《狼波》により三体目のゾンビを倒した。

ベチャツベチャツ

氣色悪い足音、後ろを振り向くとまたブルーゾンビが三体・・・なれることはするんじやなかつたか

- - - - -

俺がそんなことになつたかなり前

「よー！シルク」

「ああ、来たか」

噴水前で待ち合わせしていたシルクとあつた、シルクの後ろに三人ぐらい人がいる。

「そっちの人達が？」

「うん」

やはり、今回一緒にパーティーを組む人達だった。ちなみにこのゲームではパーティーは最大12人まで組むことができる。

「そいつがトールか？」

体格がいい人でいかにもパワー・タイプの人。最初の挨拶は肝心だ

「初めまして、トールです。よろしく」

「おう、俺はレツツア今日はよろしく頼むぜ」

なかなか人が良さそつだった。で、レツツアの後ろに一人女の子がいる。赤髪と金髪、赤の方が前に出て来て

「今日はよろしく、私はミコ、炎・雷系魔法使いだから護衛よろしくね……で、後ろのこの娘は回復補助が得意な地・光系魔法使いのレインなんだけど、人見知りな部分があるから……あ、でも大丈夫多分今日一緒にパーティ組んでたら普通に会話できるくらいにはなるって」

「こっちこそ、よろしく」と言つてこのパーティの構成を見て中々良いパーティだなと思う。前衛にはレツツア、中衛には魔法も剣も使えるシルク、で後衛には攻撃型の魔法使いと回復補助系の魔法使い。

かなりバランスがいいと思つ。といつことで俺の役回りは

「俺は前衛で戦えばいいか?」

「そうだね、レベルが一番高いし壁にもなるし、頼むよ

「ううう、このパーティの中でどうやら俺が一番レベルが高
いらしゃい

トール：＼＼・20

シルク：＼＼・19

レッシュ：＼＼・19

ミコ：＼＼・18

レイン：＼＼・17

とまあこんな感じだ

「じゃあ、そろそろ行こうか」

シルクの声で舌が動き出した。

- - -

来た場所は「湿地の墓所」、レベル30代のアンダーティ系モンスターがいる。

「じゃあ、入るっか

入る、ところはこの「湿地の墓所」は地下にあって一階下がる度にレベル2ずつ強くなっていく。というわけで地下一階

「なあ、レッツア、このモンスターってどんなのがいるんだ？」

「ここに来る途中で同じ前衛職として仲良くなり普通に会話できるぐらいになった。ちなみにレッツアはアクセス使い

「あーっと？でかいネズミのゾンビとかカラスのゾンビとかゾンビだけだったはずだ。じゃなかつたかシルク？」

レッツアは考えるのを放棄しシルクに聞いた

「デスマウスとヤタガラスとデスハウンド系が大半で奥の方にボスモンスターとしてスコルピオン・・・蠍の化け物がいるから。今日はそいつと戦うのは止めようまだ僕らはレベルもたいして高くないしね」

シルクが言つにはそのスコルピオンは一階下と同じレベルが高いそうだ。

「……おつと、いやがるぜ。犬四匹に鳥三羽。」

さて、じゃあ闘いますか。

順調に狩りはできている。犬は狼より敏捷がたいしたことがなかつたのでちゃんとダメージを蓄積すれば余裕だつた。鳥は主に俺の衝撃波系の攻撃かミユの炎魔法で樂々倒せた。最後に鼠、こいつはつざい。モンスター アーツを持つていて、ライフがぎりぎりになると《捨て身》を使い始める。《捨て身》を使うとたとえどんな攻撃をうけてもライフが死きるまで怯まずに執拗に攻撃できるようになる。まあやっかいだつたが慣れてくると対処の仕方も出て來た。

「ふう、大分狩つたな。レツツア今何レベなつた?」

「24だ。それにしてもお前凄いな。よく初見で敵の攻撃パターン把握してさらに対処法まで見つけられるな」

俺にとっては普通なのだが、でもまあ賞賛してくれるならいいや。

「じゃあ、レインがもう少しでレベル上がるそつだからレインがレベル上がつたら今日は帰ろつ

シルクの提案に皆が頷いた。

そして、狩りを続けていたがここで事件は起つた。

ドゴンドゴン

地鳴りがする不審に思つてシルクに声をかけた

「シルク、これはなんだ？」

「わからない・・・みんな前方に警戒！」

俺の『探知』スキルに反応があつた。多分モンスターだ。地鳴りが近づいてくる。今いる通路はL型の通路でもう見える頃だ

「・・・・なんだあいつはー」

巨体で大きな棍棒を持ちいかにも知識がなさそつな阿呆顔の大型所々ゾンビ化している

「ゾンビトロールだ！逃げろ、奴にはまだ勝てない。地下三階のボスモンスターだ」

このシルクの言葉を聞いた瞬間みんな動き出した。逃げる際に前衛にレツニアが切り込んで次に討ちもれをシルクが倒しその後ろにミゴ、レイン、俺の順番で逃げた。

「あう！」

が、レインがこけてしまった。後ろからはトロールが追いかけてくる。

俺は「大丈夫か」と、声をかけ立ち上がらせた。

「……まづい、かなり近づいてる

トロールとの距離がかなり近くなっていた。あと数分で目の前まで来るだろ？

「……俺が足止めするから、早く行け！」

大剣を構えた。

・・・・カツハナすきだらうか。だが仲間のために壁になるのも悪くない

「え・・・でも・・・」

レインが固まっている。

「シルク！レイン連れて逃げてくれ、俺が時間を稼ぐ

「ちよつと待てよ、トールお前、仲間置いて先に行く真似なんかできるか！」

「その通りだ、僕らは仲間じゃないか。こいつこそ仲間で力を合わせるときだろ？」

レツツアとシルクにそんな風に言われた・・・感動した。今までソロプレイしかなかつたから仲間といふ言葉が1番効いた。だが

「わかった・・・と言いたいがやつぱりダメだ。早く逃げる。

それに・・・」

「これ以上は口にしなかった・・・俺が今から行う捨て身の作

戦をするから……そして、それ以上言わずトロールに単独で向かつた。不意をついたので誰も反応できなかつた。

ズシンズシンズシンズシン

地鳴りがどんどん近づいていく。トロールはもうすぐ目の前。

そして、俺が行う作戦は……オブジェクト・ブレイク……
・破壊可能な建物、置物、木などを耐久度を喪失させれば破壊できる。俺が破壊するのは……

「『ヴォルフソード』……『フレムレイド』……」

『ヴォルフソード』は『蒼狼』スキルのアーツで剣技の攻撃力を上げる。そして、『フレムレイド』・斬撃と爆撃による攻撃・向ける先は……足場

簡単な話だ足場を崩壊させる。それによりトロールをこれ以上近づけないようにする。

「『フレムレイド』・『フレムレイド』……」

もちろん通路なのだから簡単に破壊できるわけがなく何度も爆

撃を床に与える。

トロールはもう田の前まで来ている

・・・これが最後だ！

『エクスプロージョンブレード』！、『フレムレイド』の強化版爆発力が『フレムレイド』とは比較にならないぐらい強い

「ウチの姉妹は、おまえのやつだよ。」

ピ
シリ

- - -

床面にひびが入り、トロールがその床面を歩いたことにより床が崩壊した。

そして、俺とトロールは地下二階に落ちた

- - - - -

・・・・回想長かつたな、とりあえずブルーボンビの群れは片付
けた

「これは地下一階、さあ、どうしようか

story33 オブジェクトブレイク（後書き）

次回予告

トオル「まさか次回予告を現実でやるとは思わなかつた」

部長「ははははは、あまり気にしない方がいいんじゃないかな。
そして私の名前は部長じゃない空木ひ」

トオル「いいじゃですか部長で。で、なんで部長いるんすか？」

部長「ゲームのことだつたら私だ！」

トオル「いや意味わかりません」

部長「むう、これ以上言つと本編に差し支えるから説明できません
ね」

トオル「なんでいんの？ いなくとも変わんねーじゃん！」

部長「失礼な、君みたいに何度も本編に出れないのだよ私はー。」

トオル「やっぱ、それが狙いか」

部長「悪いがー！」

トオル「いばるなー！」

部長「ちつ、仕方があつません - - - - - してやる」

トオル「はつ、本編に関わるから言葉が消されてるぜ」

部長「何！？では - - - - - も、 - - - - - も・・・・・ 言え、
ないだと…」

トオル「残念だつたな部長、あんたが出て来るにはまだ早過ぎたん
だよ」

部長「あきらめんよ、私はまだ - - - - - 消されてる！え
つ、今の関係ないですよね？」トオル私は今何か間違えたか

トオル「・・・・・ 部長といつとつ天（筆者）にも見放されたのか・
・・・」

部長「そんばかな-----」

「それと……」

ただ今地下一階…………うへん、みんなを助けるためとは言え
自滅覚悟でやつて生き残つてしまつたからには生き延びたいのだが・
・・・

「どこに行けばいいかわからぬーしなー」

マップは初めて来た場所なのでまったくどこがどこか確認でき
ない。

「まつ、進むに限るか

とりあえず、左側の通路を進んで行つた。

ああそうそう、ゾンビトロールいたじやん？ あいつ俺が落としたことによつて地下一階の床も抜けて元の地下三階に落ちたらしい。
俺が落ちた地点から少しの所に穴ができるたからな

とりあえず進んだ。ここに出て来るモンスターは主にブルーゾ

ンビ、たまにレッドゾンビ、まあブルーの上位種だな。おもにこいつら一種しかいない。ライフ、防御力が高いが俺の攻撃力重視の大剣の前にはただのライフが多いザコモンスターだ。しいて言うならたまにレッドゾンビが使ってくるモンスターアーツの『ハンドキャノン』・ロケットパンチ・要注意だ。一発もくらつてないがこのロケットパンチ壁に食い込む威力。

「…………そろそろ上にあがる階段があつてもいいんだが、おつ？」

遠目に階段が見えた。よつしゃ、と思いながら階段まで走ったが

力チリ

「？、力チリ？

下を見ると足は何かスイッチらしきものを踏んでいた

…………嫌な予感しかしねえ！

グアアアアアアアアア

両サイドの壁から一体ずつ包帯を全身に巻き付けた人型・マープルマイヤーがあらわれた。包帯の色がやばい緑と紫と茶がぐちゅぐちゅにいれ混ざっている。

「一対一しかも多分どっちも中ボスクラス、これはさすがにきつい・・・・・・・・・APの残量を気にしてられないか・・・・

「サモン、《チャイルドウルフ》そして、サモン《グレイウルフ》！」

俺は《蒼狼》スキルの召喚系アーツに新しいのが加わった《グレイウルフ》以前闘つた、灰狼。これで三対一、APは消費したがこれならなんとかなるだろう。

- - - - -

「一体は狼一匹に任せた、俺は田の前の包帯男に意識を向けた。
そして、奴の腕が飛んできた

「うおっ、ここいつも口ケットパンチしてくんのか

さらにそいつの口ケットパンチには回転がかかっておりレッドゾンビよりも威力が上がっていた。

「恐いけど接近しなきやなっー。」

まゆが手始めに普通に包帯男の肩田掛けて縦斬りをした。

- - 固ー-

意外なほどに頑丈だった。包帯のしたは鋼鉄じゃないのか?と思つぐらいに。

「だつたり」

『フレムレイド』をした、爆撃による属性攻撃、『フレムレイド』は炎属性の爆撃付加の技・・・基本、アンデッド系は炎・雷・光の属性に弱いことからトールは炎属性がある『フレムレイド』を使った。

「つねつやあー」

斬撃、爆発。

ライフが一割減った・・・効いている。

「これで、属性ダメージが効くことがわかつたが・・・・・・。『フレムレイド』は後五回使う分しかAPが残っていない。AP回復アイテムは一階での狩りとここまでの中まで尽きた。

ここでトールが考えた戦略は地道にダメージを蓄積させてフィニッシュに『エクスプロージョンブレード』をお見舞いする・・・という方法を考えた。『エクスプロージョンブレード』を使うなら二発、だが一発が強力で予想で三割を削れるとトールは考えに至つた。

- - - -

地道にライフを削っていき包帯男のライフがようやく三割に到達

・・・・今だ！

『エクスプロージョンブレード』一大爆撃、そして包帯男のライフが一気に削れていき・・・・・・ライフは削れ、なかつた。

倒した！と思ったトールには隙ができていた。そこにギリギリライフが残った包帯男の口ケットパンチが飛ぶ。

「ぐはっ…」

まともに命中した。トールのライフが一気に削れていき・・・
全快だったライフの六割を削られた。

剣を手放し、壁に打ち付けられたトールは軽く身動きできなか
つた。

そんなトールの状態にお構いなしにマミヤはトールに攻撃をし
かけようとする。

マミヤの腕が回転しだす、発射前の予備動作・・・放たれた

うつわ、もう少しで戻れたのにな

「『グレイブシールド』！」

突然の人の声、そしてトールの前に岩が隆起し壁となりマミヤ
の放った腕から守られた。

「トール！大丈夫か！」

「レッシア、今はこいつを倒すのが先だ『シャイン・ランス』！」

みんなが来てくれた、光の槍が残りわずかのライフを削り一体は消滅した。

「うおっしゃ、くらえ！『ダイナミック・ボンバー』」

- - - - -

みんなが来てくれたことによつマハは倒すことができた。どうやらあの後、スコルピオンを倒して、地下一階に来てくれたそうだ。で、今は墓場前の安全地帯……今、俺は正座をせられています。

「……で、なんであんな無茶した！みんなで闘つてもかまわなかつたんだぞ！なのにお前は……」

シルクに説教を受けてます。

「結果的に僕達が間に合つたからこそのの」

「待ってください」

ん？レインが俺の前に出てシルクを止めてくれた。

「トールさんは悪くありません……私があそこまでジしなかつたらトールさんがあんなことしなくってもよくて……だから……」

なんか、すいしんく庇ってくれてます。……別にみんなのためこやつたからそんなに思い詰めなくていいのだが

「はいはい、シルクそのへんで説教は終わりにしましょ？トール君も反省してゐみたいだし。レインもかなり思い詰めちやつてるから」

「…………わかった、ただトール今後はそんな真似するなよ？」

「わかった、俺が悪かった。今後はこんな行動しません」

「よろしい」とシルクが言ってみんな街へ帰ったが道中レッツ
アに

「お前中々罪作りな奴だな」

意味がわからないことを言われた。

トルだけは知らない、レインが道中トルの事を見続けていることを

次回予告

「疑問に思つたんだけどさ~」

シル「なんだ？ 数から棒に」

「アーティレリヤも次回予告でもないし、アーティレリヤの次回予告にはまだかな~」

・シルバーこの「一ナ」始めたのって確かショイドさんだつたよね・・・
・ショイドさんいなし

ショウ「ところがどうこい私もいますよ！」

トーマス・シリウス！

トー「いきなり中継繋げる方が悪いですよ・・・・・って、ライカさんは？確かにライカさんに止められていたのでは？」

『ライカ君は今出かけたのでその隙に』

ライ『どの隙ですか?』

シェ『なつ！ライカ君何故・・・・まさか嵌められた！』

「ライ『シルトイドさん、仕事としてくだらこつて書つてしましましたよね?』

シル『ライカ君? 話せばわかるわねひつ』

ト一「…………」

シル「…………」

ト一「中継切れたな

シル「うん」

ト一「次回予告は謎のままで」

シル「うん」

stor35 強セ（前書き）

いつも、ジャッ口です。

なんだか最近変なテンションです！

・・・・・これって、「私はヘンタイです」って言つてると同義

かな？

「よし、ここは終わつたぜ」

「おひ、俺も倒した」

また俺達は、《湿地の墓所》でレベル上げしてるわけだが今日は地下一階、俺がブルーゾンビを一人で倒せたことからたいして強くないといふことになり来ているわけだが

地下一階に下りる前のスコルピオンは結構強敵だった。形状は蠍とりあえず大きい。でモンスターাークを三つも駆使してくる。《硬化》 - かなり硬くなる - 《毒針》 - 尻尾から針連射、毒附加 - 《デザートショット》 - 俺が初めて見たモンスターが使う魔法、土系の砂の塊を討つアーツ - なかなかに強かつたが昨日シルク達が俺を助けるために一度闘つたため攻撃パターン、どの属性に弱いかが把握されていたので、てこずつたが結構楽に倒せたと思う。

ああ、ちなみにダンジョンの破壊されたオブジェクトは零時刻すべてが修復されることになつていて今日来たら穴が塞がつていた。

「今のでレッザーレベル上がつたんじゃない?」

「コガそつぱつたのでみんなのレベルを確認した。

トール	・	・	・	L	V	・	2	8
レッヅア	・	・	・	L	V	・	2	7
シルク	・	・	・	L	V	・	2	6
ミコ	・	・	・	L	V	・	2	6
レイン	・	・	・	L	V	・	2	5

まあ、俺がレベル高いわけは昨日ブルーゾンビやらレッドゾンビの群れを倒しまくったからでいつの間にかレベルが上がつてた。

「でもまあ、トールが入つてからレベルが上がるのが早いな」

レッヅアがふとそんなことを言い出した。

「いやいや、みんなで頑張つてるからだろ」「

俺はすかさず訂正した。

「そんな謙遜することはないつて、まあ心強い前衛が一人になつたからでいいんじゃないか？」

ナイス、シルクそういう話に持つていってくれ

「でも実際、前衛が一人になつたつていうのもトールが入ったおかげなんだし」

「ユ止めてくれ俺をそんなに上げなくていいから

そんな俺を誉めまくる会話と狩りをして一段落つわ。

「じゃあそろそろ行くか！」

地下一階ボスモンスター『マッジドレッド』へ

- - - - -

地下一階・地下二階への階段前フロア、ボスモンスターが必ずいる場所

マッジドレッドは赤い泥のモンスター、シルクの情報で判明していることは、まず弱点属性は光のみで次にモンスターアーツ、これが厄介一つは『従者召喚』・モンスターによって従者は変わるが召喚系アーツで召喚してくるモンスターはマーブルマミィ、幸いなこ

と、一體までしか召喚してこないし倒してしまえばもう召喚しない。でもう一つ《形質変化》・マッシュドレッドの最大の特徴、ドロドロな時と力チカチに固まる時がありドロドロの時は物理攻撃の一切がくらわなくなり、力チカチの時は魔法攻撃の一切が効かなくなる・これは常に変わりまくるのでタイミングを誤るとかなりの隙ができるしまつ。

とまあ、かなりの強敵なのでみんなで作戦をたてた。俺の役割はまず一體のマミィを《フレムレイド》《エクスプロージョンブレード》で一気に片を付ける。もう一體はレッシアとミコが引き受ける。その間のシルク達はシルクが光の束縛系、レインが地・光による補助でマッシュドレッドの足止め。後はマミィを片付けた方から一気に攻撃。

「…………あれがマッシュドレッドじゃないか？」

レッシアが遠くにいる赤い物体に指を指す。

「ああ、多分…………まだ発見される距離じゃない。みんな準備はいいか」

シルクの声にみんなが頷く

「じゃあ、行こう!」

レッジアと俺はその掛け声とともに赤色田舎して走った。

発見されたよつで、赤色の両サイドに魔法陣が出現しマーブルマリイが召喚された。

「《エクスプロージョンブレード》！」
「《火碎》！」

俺とレッジアの炎系の大ダメージのアーツをマリイに叩きこんだ

当たつぱりがよかつたのかマリイのライフを四割削った。

- - - まだだ！

《エクスプロージョンブレード》に繋げる技は補助系しかないが

「《ヴォルフソード》」

その少し間も無駄にはしない。そしてさらにそこから《狼牙尖旋》
・突き、斬り上げ、斬り下り、横一文字の四連撃、攻撃中蒼い

「ライトエフェクトがなびく。

マリヤのライフは残り一割

「まだ俺のコンボは続いている！」

蒼いライトエフェクトが白色になり大剣が真っ白な光の剣となり

「終わりだつ！」

『レイ・エッジ』、『両手大剣』スキル、アーツレベル4（アーツレベル上限5）今トールが持っているアーツで一番攻撃力が高いアーツ

光による斬撃、マリヤのライフは死をかる。

1コンボでマリヤを片付ける異常な強さ。シルクはマッドレッドを抑えながらトールの強さに唖然とした。

それで、次はマッドレッドか！

トールはAPを瓶に入っている青い液体を飲み回復させマジドレッドに向かつた

部長のアーツ紹介コーナー

部長「と、つい私のコーナーができましたか…良い行にはするものですね」

トオル「何故、部長なんだ…・・・ていうか、部長でいいのか？」

部長「構いません、出番があるなり背に腹はかえられません！時間が惜しいですね。では今回紹介するアーツは…」

アーツ名

『スティールフォール』

内蔵スキル

『二級罠』

派生

『罠師』　『一級罠』　『二級罠』　『三級罠』

効果

プレイヤーのアイテムだけを落とす落とし穴を設置。『二級罠』マスターで一つ設置可

トオル「なんでこんなえげつないアーツをわざわざ紹介する

部長「ちなみに、落とした六設置場所を通りたプレイヤーのアイテム欄から一定確率でかかります。なお、落としたアイテムはなんの注意音もならないので。恐いですね~」

トオル「つ~か、マジになつて説明して~る~。」

部長「出番がないのだよ! 出番が! 君が現実リアルに戻つてくれれば私はこんなことしなくていいのです!」

トオル「知るか! 所詮部長はサブキャラにも満たない存在だ

部長「キサマー言つてはいけないとおおおお~。」

いつも、ジャッロです。

・・・・いや、うん。

読めばわかりますがまず先に謝らせていただきます。

自重しきれませんでした。すいません

後悔してないけど後悔しています。

トール「えへっと、なんといのCHAOS ONLINE、PVが50000アクセス突破してました。」

シルク「それにより今回はいろんな方に50000という数字について聞いていらっしゃいます。同会は僕、シルクと・・・」

トール「俺、トールです。ではまぢの方から」

-----ジンの場合-----

トール「ジンさん。よく名前忘れられるジンさん。最近出番がなかつたジンさん。50000といつ数字に何かありますか?」

ジン「トールウウウーお前俺に何かつらみでもあるのか!あ?」

シルク「ダメですよジンさん。ただでさえ『出番』が少ないのに印象悪くしてどうあるんですか?」

ジン「せりげに俺の事を気遣つてるようにしてるが何故出番が強調されてるんだ?だいたい50000なんて」

トール「はい、時間切れ。では次の人に行きましょう」

ジン「え、ちよ・・・・・」ブツッ

-----ハンクの場合

トール「はい、じゃあ次は久々のハンクさん」

シルク「今回の企画つて出番少ない人を出すための・・・」

ハンク「おおう、久しぶりだなあ。」

トール「お?ジンさんは違う反応。始める方で出てきて強いキャラなのかな?とか思わせつつのベクトさんへのやられ役だったハンクさん、50000といつ数字に何かありますか?」

ハンク「ない。というかなあ」

シルク「はい、じゃあ次行きましょう」

ハンク「なつーお前らあ

-----ベクトの場合

トール「はい、次は俺も所属する霧夢ギルドの副ギルドマスターにしてユニークスキル『神速剣』の使い手ベクトさんです。・・・・今までで初めてまともな紹介だったな」

ベクト「おう、何の質問だつたか?」

シルク「50000といつ数字についての質問です。何かありますか?」

ベクトル 50000か・・・・・・・・・・・おひ、あひたぜ」

トール「やつとまともな解答そういうです！それは何でしょうか？」

ベクトル・シエイドの逃亡・脱走回数

トール&シルク「・・・・・・・・・・・・」

ベクト「つーか、あいつがいたり捕まえられるつーんだよ・・・
・・ブツクサブツクナ」

「… よし、わお次いつてみやう」

- - - - - ライカの場合

シルク「こちらも霧夢ギルドの副ギルドマスターにして《調和》ス
キルの使い手、ライカさんです」

ライカ「どうも、ヤツホー」

トール「いや、無理にヤッホー言わなくてもいいですよ、棒読みになつてますし。」

ライカ「どうもだけだと愛想ないよ?」

シルク「・・・・・気を取り直しまして、アンケートにライカさんの
スリーサイズについて質問があつたのですが・・・・・」

ライカ「胸ないですが、何か？」

トール「誰もそんなこと」

ライカ「口リ属性ですが何か?」

シルク「落ち着いてください。誰も無理に答え」

ライカ「不愉快なので帰ります……シェイドさんでストレス発散しようかな……」

トール「…………」

シルク「…………」

トール「……まさか質問者側が先に消えるとは思わなかつた。てか、最後かなりすごいこと言わなかつたか?」

シルク「……次に行こう。僕らじゃあ止められない…………」

- - - - - ホリイ・シエルの場合

トール「あ～、軽くテンションダウン……いやしつかりしう俺!」

ホリイ「何やつてるの?」

トール「あ、ホリイさん。模擬戦の節はお世話をになりました。」

ホリイ「いいつて、いいつて。で、用があるんじゃないの？」

トール「は、はい。こちらの方は霧夢ギルドの副ギルドマスターであり『魔神』スキルの使い手のホリイ様です。」

シルク「えらく言葉が……」

トール「……シルクちょっとここちこち……ホリイ様に何か粗相を起こすのはダメだ！身の安全を保障したかったら言うとおりにしとけ！」

シルク「……まあ、わかつた……ではホリイ様……5000という数字に何かあつたりしますか？」

ホリイ「ん~500000か……ショイドを一日に想う回数ね！」

シルク「さいですか……」

シエル「ホリイのショイドを想う回数はその程度？私なんか一日に100000回は想つてるわ！あ、もちろんライカちゃんもだけど」

トール（うわあ、嫌な組み合わせ……これ、危なくないか？）

ホリイ「て、訂正するわ、わたしなんか一日に1000000000回はショイドの事想つてるし……」

シエル「あら？なんで嘘ついちゃったの？あ～、今のが嘘なのね？」

シルク（うわー、ガキの喧嘩だ。……え？）んなこと口に出して

言えるはずないじゃないか）

トール「なあ、シルク今のはしごに逃げよ。」（はしごすれ戦場にうわああああああああ）

ホリイ「馬鹿つていう方が馬鹿なんだー！」

シルク「トール、トールウウウ！」

シエル「あら？ 手を出して来たわね・・・いいわ、決着をつけましょうか」

-----キーリーの場合

シルク「トールはホリイさんの炎弾の流れ玉により負傷しましたハッハー」・・・また後から出てく「イーヤッハー」・・・・・すいません、ナレーションしている間は静か「俺様がやつて来たー！」・・・・

キーリー「俺様の名はキーリー！ 愉海賊団の船長をしている！ 俺の武勇伝聞きたいか？ そうだよなーじやあまず俺様の愉海賊団結成秘話からしよう。あの日は・・・」

シルク「・・・誰だ、こんなバカこの企画に入れた奴は・・・・・はあ、次行こう・・・」

キーリー「ところがその時クルーロとクルードがマストを支え・・・

・・・・

- - - - - レン・ロートの場合

シルク「こんなサブキャラにまで回ってくれば……なんだこの企画は……」

ロート「どいつもかじめまして。今日ばかりで何かあるはずですが?」

レン「ねえ、ロート何やってるの?」

シルク「あっ、すこません。親切に鉈刺までどいつも……では、こちらのお二方はギルド『リバー・メイト』のギルドマスター、副ギルドマスターのレンさんとロートさんです。」

レン「あなただれ?」

ロート「ギルド『ミステイドーム』のシルクさんですよ。ちなみに平。」

シルク「……では質問ですが、500000といつ数字に何かありますか?」

レン「ん~五万個のパフュが欲しい!」

シルク「いや、やうにうのじゃなく……ロートさん、少し

ロート「何でしょ?」

シルク「この人は一応ギルドマスター何ですよね?」

ロート「？はい・・・ああ、レンさんが対応能力がない分は私が補佐しますので」

シルク「・・・」うつむかれて何ですが・・・あなたがたのギルドよく成り立つてますね」

ロート「レンさんに不備の無いように《ミリマー・メイト》には優秀な人材がいます！」

シルク「・・・じゃあ、質問の回答変わりにお願いします」

ロート「まず、50000といつ数字について。この数字はある規則性により・・・」

-----?
の場合

トール「はあ、やつと復帰できた・・・？」トールビツした？」

シルク「いや、君が抜けた間ちょっと凄すぎた。キーリーさんは暴走するし、レン・・・ちゃんはさんじやなくちゃんとづけにしろってしつこいし、ロートさんは50000という数にまったく訳の分からぬ理論話すし・・・」

トール「・・・お前はよくやった！で、これで最後のはずだよな・・・
・誰だけ？」

シルク「それが企画書に場所だけ書いてあって名前が載っていないん

だよな「

トール「・・・いや、シルク。そんなことする人は一人しかいない
ぜ」

????「ははははははははー」

シルク「いや、僕も薄々わかつたけどね」

????「え? なに? いやいや私が誰だかわかるまいー」

トール&r;シルク「シェイドさん」

シェイド「何故わかつた!」

トール「いや、そこには驚くと!」ですか?」

シルク「読者の皆さんも?/?が見えた瞬間予想ついたんじゃない
?」

シェイド「馬鹿な、完璧な隠蔽工作及び私を引き立てるための順番
にしたのに」

トール「やっぱあんたか!」のふざけた企画書」

シルク「なんで僕はこんな企画に乗ったんだろう?・・・メインレボ
ーターとかおいしい話には裏があるのか?・・・」

シェイド「ですが大丈夫! 私もちゃんと500000という数字につ
いて考えてきました。さあ、質問してください」

トール「はあ～、まあこれが最後ですね。ではショイドさん5000といつ数字に何かありますか？」

ショイド「500000といつ数字はですね・・・私が会議を脱走した回数です！」

シルク「・・・・」

トール「・・・・」

ショイド「あれ？どうかしましたか？いつもなら、あんたそんなに会議抜けてたのかー！、みたいなツッコミ入れてるところじやないですか？」

トール「ショイドさん・・・」

ショイド「お？へぐるか！」

シルク「・・・被つてます・・・」

ショイド「・・・はい？」

トール「ベクトさんがそれ先に言いましたよ・・・」

ショイド「なんですよー」

シルク「最後の最後で・・・」

トール「これ、最後だよな。こんなグダグダに終わるのか・・・」

シハイチ「せりせりせー、こつむじんな感じじゃないですか。」

トール「あんたが言うなー！」

シルク「・・・ライカさんに連絡するか・・・・・あ、ライカさん?今ここにシェイドさんが」

シェイド「シリク君それは卑怯ではないですか？・・・では、私は逃げます。さらばっ！」

トール「わいばりてやー、サラダって聞こえない？」

シルク「トール……落ち着け、このままグダグダに終わらせる訳にはいかない……最後の締めは主人公であるお前がやるべきだ！」

シェイド「私があのまま終わらせるはずがないじゃないですか！」

トール「威張るなー！」そつ、《エクスプロージョンブレード》ー。

シェイド「《ルナセイバー》」

トール「うわあああああーくそつ今日は負けられるかー。」

ショイド「無駄ですねー、『ダークニードル』一ふせねばせぬか」

シルク「・・・」JNNAOS ON LINEですがこれからも
読んでもらえると嬉しいです。これからも期待を裏切らないようが
んばぐふつー・・・・・・・お前らーーー人が締めやつていのこー..」

トール「うひーカーーー」ひつかは余裕ねーんだよー..」

ショイド「ははははは、その程度で終わりですか?」

シルク「くひえ、トールー『袈裟斬り』」

extra · i PV50000突破記念(後書き)

・・・・・これがCHAOS ONLINEの住人なんです。仕
方がない、うん。

彼らに代わって、これまで読んで下さった方ありがとうございました。
これを励みに今よりも一層精進をばくしますのでこれからもCHA
OS ONLINEをよろしくお願ひします。

シエ「『ルナセイバー』！」

トーラ「『エクスプロージョンブレード』！」

え？ じつはまだ飛び火がつぎやあああああああ！

store マッシュルーム戦(漫書)

ん? ストックのせすなの『』ついに手が勝手にな

どいつも、ジャッロド。

ストック作ったのに『』がついたり次話投稿しようとしている。いいや、やつてしまえ!

「シルク、待たせた！」

「いや、早過ぎるだろ。まあ、いいや。今物理攻撃しか効かな
いから僕と一緒に置み掛けるぞ！」

「ああ！」

トルがマッシュドレッドを見ると固体のような人型の赤い泥にな
つていた。この状態が魔法攻撃無効状態だとすぐにわかつた。

まず、トルが先制を入れた。綺麗に人型の肩掛けで縦真っ
直ぐに切り付けた。

カキン！

「うおっ、硬つ！」

すかさず、シルクも《オールエッジ》 - 横一文字の回転斬りを
一回・をマッシュドレッドに斬りかかるが

カキンキン！

鉱物を剣で斬る感覚しかなく、まともにダメージを入れられてないという感じがわかる。実際、マッシュドのライフは一ドット動いたように見えるだけだった。

「なあ、シルク・・・」

「言つたな、わかつてゐる・・・・・・・。トールはレッソニアと一緒にモーフー体のマミィ倒してくれ。ついでにヒロをひかひか浮んでくれ

びひきマッシュドは固体時に物理攻撃を『えられるがその硬さによる防御力は高いことによりダメージは『えれるが微々たるダメージしか『えられない。

よつて、物理攻撃メイン俺とレッソニアはまったく使いものにならない。だから俺はミコと交代しマミィを倒す方に行くにかぎる

から魔法攻撃メインのミコはあつちに参戦してくれ

「ミコー俺と交代だ！あいつに物理攻撃があまり効かない。だ

「え？・・・・うん、わかった。つてもつマミィ倒し

てたの？」

そんなことを言われて俺とミコが交代した。

「お前、なんでそんなに早くマリヤ倒はなんだ？まだライフ4割残ってるんだが……みっと」

ロケットパンチを躊躇しながらレッジアに言われた。その飛ばしている間に俺が割り込み

「弱点属性のアーツ連発したりもつたり終わるやつ？……『フレムレイド』！」

『フレムレイド』をお見舞いした。マリヤのライフが一割ぐらい減る。

「仕方ねーだろこいつには消費がでかいアーツしかねーんだから『両手大斧』スキルなめんなよ

「つと、つと、でも『火砕』二回使ひついこまゝあつたよな？一気に三連発・・・・・・まさか！」

俺が気づいたことは

「…………いや、俺もびっくりなんだがそのまさかだ」

レツ・ツアが言った“その”は初撃の『火砕』以外の一回の『火砕』を外したらしい。よく見たらレツ・ツアのAPがもう一割あるかないか……このぐらいだと『両手大斧』のアーツは使えない。

「…………」「

レツ・ツアの動きが軽く鈍いなと思つたら、このミスが響いているのか……レツ・ツアはいつも豪快な口調や戦い方をするが意外と神経質な奴でミスを引きずり易いといつ。

「あ…………うん、ドンマイ」

「よじてくれ、俺がもつとみじめになる…………」

まあ、死なない程度には動けるからいいけどな。これで本当にダメダメになつていたらぜつて一邪魔だし。

「しゃーない、一気に終わらせるぞ！俺がマニマニの隙をつくるからと決めさせた！」

「……わりい、だがどぎめならお前が刺せ……そのほうがいい」

「いいや、どぞめはお前がやるべきだ！それに、俺はまだあの時助けてもらつた借りを返してないんだ・・・レツツア、俺は補助にまわる、だからマニイにお前の大斧を叩きこんでやれ！」

ああ、レッツアー達には俺が地下一階に落ちたときの貸しがある、
それにこゝでキメてもらつてメンタル面で回復してもらいたい。・・・
・ カツコつけすぎか・・・

「……わかつた、一気に片付けるから援護任せたぜ？」

「わへへへへ」

俺の「J」の軸葉によりレッサは動き出した。

ଏହିପରିବାଳା କଥା କଥା କଥା କଥା -

レッシアはさながらマミィに突っ込んで行った。マミィが両腕を前に出し、ロケットパンチをした。それをトールが《狼波》でレッシアに当たる前に撃ち落とした。隙だらけのマミィに大斧がまともに当たる。一発だけじゃない、一発、三発と思いつきり斧を振り回し、マミィに三連撃を『えた。マミィの腕は元に戻つていて、至近距離でレッシアにロケットパンチをしようとしていた。トールは間に合わない、と思ったが。レッシアはそのロケットパンチを器用に斧で威力をこらし軌道修正し直撃を避けた後、縦一文字の大斧による攻撃でマミィを倒した。

「レッシアすばーじゃん」

あの距離でロケットパンチをやりかねるのレッシアの力があつていいやでかい奴だある。

「お前ほどじやねえよ」とか言いながら、レッシアは左拳を前に出した、俺も左拳を前にだしレッシアの左拳にぶつけた。

「やーい、マジドレッドのアーヴィングはどうなつてるかな?」

俺とレッシアはシルク達を見た。炎弾、光弾が飛んでいた。その先はもうろこんマッドレッド今はドロドロの液状、マッドレッドも触手みたいなもので鞭のように攻撃はじしているがシルク達はそれを躰す。マジドレッドのアーヴィングもつー騒べりご。

油断していたのかレインに鞭が当たりそう……だと思つた俺はレインの前まで振るわれた鞭を大剣で弾いた。

「レッサム//コを護つてやれ！」

「うひー、俺とレッサムの護衛もあり攻撃に集中できるよつた//コヒレインのおかげでマジックは難無く倒せた。

「マジック意外と弱かったな」

帰り道、レッサムがそんなことを言つたのでコウガ

「何言つてんの？マジック一体にも手子摺つてた人が何言つてんだか・・・それに較べてトールは今日一番活躍したんじゃない？」

「いやいや、俺はただみんなの護衛しただけじゃん。それよりもレインがみんなの補助をしてくれたから勝てたんだとゆうけどな

マジックとの闘いで実は細部まで気をつかってみんなのラ

イフが常に全開だったのはレインの回復魔法のおかげだ。

「…………そんなことないよ…………トールくんが私を護つてくれたおかげだよ…………」

「…………なんせかみんな俺のこと褒めるな～じゃあちよっとへきこがこのセリフを言おう。」

「いや、それも…………」

「みんなが力を合わせたから、だろ？その通りさ、みんなで闘えば負けることなんてないよ」

シルクに取られました。だがまあ俺が言つよりこのパーティーのリーダー的存在のシルクが言つた方がしっくりくるな。

そして、今日もまた終わった。

・トオルの質問「コーナー」

トオル「げ！現実^{リアル}じやん・・・つーことは」

部長「その通り私が顕れるのだよ」

トオル「出たか、妖怪部長！」

部長「いや、妖怪って」

トオル「今日は俺のコーナーだしな！つーわけで予定通りに部長に質問しなければならないようだが・・・だが、断る！」

部長「トオル君やめたまえ死ぬつもりか！そんなことをすると天（作者）の裁きがくるぞ！」

トオル「・・・」

部長「・・・あれ？」

トオル「ははははは！主人公であることを忘れていた！そうだ俺は主人公なんだ、その替えが聞く部長とはちがア――――つ！・・時間差、だと・・・」

部長「・・・・・さて、誰が次の主人公になるのでしょうか？もしかしてわたジイアアアアア・・・・・・」

ひとつひとつ総合評価100越えました！しかし、この総合評価って何だ？マイマイのシステムを理解できてしませんが多ければそれだけ評価してもらえてるってことでいいのでしょうか。

アンケートの方も気が向きましたら好きなキャラだけでもいいので答えてもらえたうれしいです。

「ここ数週間、CHAOS ONLINEに没頭していたので部活には参加していなかつた……なので、久しぶりに部活に顔を出した。

「久しぶり~」

「…………」

「よつー久しぶり、部長に今話しかけても無駄だろ?」

部長は今、ありえない数の弾幕を華麗・・・とは言えないが人と会話できないぐらいに目の前の縦スクロールのシューティングゲームに熱中している。

「くたばれ!くたばれ!くたばれ!死んだーー!イエーー!

部長は自分が操作していたキャラが弾に当たり game over の文字ができると同時に倒れた。

「あ、部長死んだ」

「お前らホントに暇人だな」

さつきから会話しているのは俺含めて五人しかいないゲ同のメンバーの一人、俺と同学年の黒田悟くろだ ご、クラスは違う。こいつはかなりの頻度でここにいる。

「おや？トオル君か？久しぶりですね」

部長が復活していた

「久しぶりです

ゲ同は基本ここでグータラ遊んでいたりゲームについて語つたりしているダメな部活（俺には聖地だけどな）。

「どうだ、CHAOS ONLINEやってるかい？」

「ええ、楽しいですね。」

俺には今日ここに来た目的があった。それは・・・

「で、部長ひじょうおおきなふりをしたくないですか？」

「それが聞きたかった。」

「ええ、やつてありますよ。」

・ 部長のいとだかが、あたぐまわなこ・・・さつるのかー・・・
・ はやつー、聞きたこ事終了・・・せこ、せりせりだからこその聞け
いへ。

「おおきなふりをしたくないですか？」

「まあ聞くのいいだろ。」

「うううあよ。つこぢんまつと、ギルド『インパクト・マジシャンズ』のギルドマスターをしてやつ。」

・ ・ ・ レベル高い。つーかギルドマスターかよ。・ ・ ・

「どうですか・うちの会のギルドに入りませんか?」

「あ、俺もう別のギルド入ってますんで・・・『ミスティドリーム』っていう『なー』。」

「・・・トオル君、それは有名な第五位ギルドのことかな?」

ん? 部長の様子がおかしい

「ええ、そうですけど?」

「トオル君・・・どんなコネを使って入ったんだい? 金か! 金か! 金」つむせー

部長がおかしく・・・前からおかしいがさうにおかしくなりやがった!

「どうした部長、何なんですかさつきから・・・」

「・・・君は霧夢に入れることがどんなにすごいか分かっていないのか! ? ここはな~ネクロマンサーと会って気まぐれでしか入れてもえないギルドなんだぞ!」

いや、意味がわからん。だがまあ俺は始めてすぐにショイドさんにスカウト？されたからなしゃーない。

その辺の所を部長に話した。

「なんて君は運がいいんだ。だいたいそんな上の人と偶然でも会えたのは奇跡的です。しかもゲームを始めてすぐに！それに・・・

すっげー力説してくるんだが・・・・・そろそろ本当に熱苦しくなってきた。

「だいたいなんで君はいつもそつコアルラックが高いんだ。」

そんなこと言われても、せいぜい町内の福引きドーピングでぐら一度一緒にやりますか？」

「・・・まあ、それは置いときたくはありませんが置いといで。一度一緒にやりますか？」

「いや、まあいいんですけど俺まだレベル32ですよ。それにもし手伝つてもううにしても似通つたレベルの人達とレベル上げしたいです

し

「心配」無用！レベル^{ヒツ}にては差がありますから私は見ている形で、レベ上げなんて始めるから手伝う気なんてありませんよ。といふわけで今日帰つてからやるでしょうから・・・現実19時に田王都で会いましょう。私のプレイヤーネームはエル、アイ、エヌ、イーで「エイン」^{ライン}です。そういうえば、トオル君のネームは？」

「トールです。ティー、オー、ヒルエル」

「・・・もう少し捻りうよトオル君。まあ、いいでしょうでは帰宅だ。入つたらメールを送りますよ」

部長か・・・部長のキャラはどうだろ？か。楽しみだ。さて俺もとつとと帰るか。

次回予告

ト一「……次回予告に戻つてやがる……」

シル「部長、いや」からではラインか？ラインさんが今話で出でる
からこちで出番なしつて方向らしい。」

ト一「まあ……部長だからいいか」

シル「それよりも最近聞いた話なんだが……ショイドさんも当分
出番なつて」

ト一「いい意味だ、つーかライカさんにわらわれて今強制労働中だ
つたつけ？ひとつひとつに顔を出せなくなつたか……」

シル「あと、ハンクさんの名前最近まつたく聞かないよね」

ト一「ああ、いたなそんな人……あれ？ハンクさんつてギルドに
もいるのに出番なし？」

シル「いや、だからあの人はベクトさんのやられ……」

ハンク（以下ハン）「おまえらあ……とその前に久しぶりだあ、
久しぶりすぎて次回予告に初めてきたキャラ扱いされてやがる」

シル「本当に久しぶりですね。でも、もう収録終わりますよ？」

ハン「なんだとか」

トーリアクションもイマイチだしな・・・またの次回予告で会いましょう。」

ハン「なつー本当に終わっ - - - ブツッ

スキルについて（前書き）

簡単にスキルについてまとめました。この文章は後々変えたりするかもしれませんのが今はこんな解釈です。

スキルについて

スキルの特性には二種類あります。一つは《アクティブスキル》。もう一つは《パッシブスキル》。この二つの説明はあとに書いてあります。次にスキルのグレードについて、これはスキルのリア度をつけるために区分しました。CHAOS ONLINEすでに説明されましたがもう一度、スキルのグレードには《コモンスキル》、《エクストラスキル》、《ユニークスキル》の三つがあります。記述の順に希少性が上がります。

『《アクティブスキル》について』

- ・《アクティブスキル》はアーツ・必殺技を使うことができるスキルです。スキルスロットにセットすることによりスキルにあるアーツを使用することができます。スキルの熟練度を上げることでアーツを修得していきます。ただしスキル自体には何も効果がなくアーツを使用するためだけのスキルです。

例）《両手大剣》の場合

熟練度0の状態ではアーツ《ソニックエッジ》しかありませんが、熟練度50になると《フレムレイド》を修得します。スキルによるアーツを修得する熟練度数は違います。

『《パッシブスキル》について』

- ・《パッシブスキル》はスキル単体に効果を持つかわりにアーツを一つも会得しないスキルです。スキルスロットにセットすることに

より常時、効果が反映されるスキルです。スキルの熟練度を上げることにより効果がより強力になります。

例）《索敵》の場合

《索敵》スキルは範囲内にいるモンスターを察知するスキルです。熟練度により効果の性能が上がります。つまりこの場合索敵範囲が熟練度の上昇により拡がります。

『《コモンスキル》について』

- ・《コモンスキル》はキャラクターのレベルの上昇だけで修得できるスキルです。これといった条件は無いのでレベルがを上げるだけで誰でも手に入れられる。

『《エクストラスキル》について』

- ・《エクストラスキル》はある条件を満たした時に修得できるスキルです。修得する方法はいくつもあり一つのスキル熟練度を上げるだけで修得出来るものもあれば二つのスキル熟練度を上げなければ修得出来ないスキルもある。はたまた、スキルだけでなくパラメータの量やギリギリのライフを長時間維持することにより修得出来るスキルもある。

『《ユニークスキル》について』

・『ユニークスキル』はエクストラスキルと同じ様にある条件を満たした時修得出来る。違う点をあげると一つしか存在しないスキルであること、二人以上同じスキルを持っていないものが『ユニークスキル』と言える。その人一人以外を持たないので修得条件は不明。

スキルについて（後書き）

非常に悩むところはスキル集アーツ集をどうするか。
本当にスキルもアーツも増やし過ぎた・・・

story38 覚醒（前書き）

注意！

- ・トールが覚醒するわけではありません。
- ・部長の名前は空木裕樹またの名を部長といつ。
- ・主人公はトールです。

「えーっと、」こいつはリアルで部活の先輩の部長です。

「いや、ちょっとトール君そんな紹介はないんじゃないかな」

今俺はシルクとレツツアに部長を紹介している。あのあと時間通りに入つてメールを送つたら噴水前での待ち合わせになつた。それで、そりいえば今日もみんなと噴水前で待ち合わせしていたので部長と合流して今の状況。

「お~い、待つた?」

まだ来ていなかつたミコとレインが来た。

「いや、さつきみんな集まつたばかりですよ」「おやへ..」

シルクがそりやつて言つたあとすぐに部長・・・ラインとミコを見て何かすぐに言つた。知り合いか?

「ミコ、レイン紹介するよ。」この人は「え?なんでラインさんがこるんですか?」・・・は?

「ミコ知り合いなのか？」

「いやー、トール君が一緒にいるパーティーミコさんがいるとは思いませんでした。」

ん？話がわからん

「ちよつと待て・・・ぶちよ、ライン・ビリーフだへ、ミコと知り合いなのか？」

「ええ、ほら言つたぢゃないですか。私はギルドのギルドマスターしてるので。ミコさんはうちのギルドの人ですよ。で、ミコさんがここにいるのはトールとはリアルで部活の先輩、後輩の関係にあります」

「・・・ラインさん」

「ん、なんだじミコさん？」

「燃え尽きり―――《ハイトフレア》！」

「え？ええー！《ウォーターシールド》」

いきなりミコがラインを襲った。ハツの炎弾を放つがすべて水の壁によりラインまでは届かなかつた。

「おー、ビーブリード！」

「どうしたも無いわよ！ラインさんを見つけたらギルドに連行しながら最近不在でギルド内にいたことをやめてみるのよー！」

お怒りの様だ。ギルド不在ってどつかのネクロな人と同じじやねーか。俺はラインに目を向けた。

「…………ああー、そういうえば最近顔出してませんねー……
つてちょっと待つてください！落ち着いて話せば分かり合えます、
あつと」

まったく今の状況が理解しがたいが……多分整理すると、ラインが今日は俺と一緒に行動するつもりでした。しかし彼はまったく自分のギルドをほつたらかしにするあまりギルド内はぎくしゃく中、同じギルドメンバーのミコに見つかり、「あんた何やってんのよ」とみたいなことになり攻撃された、と。

「・・・ライン、それはダメだと思つた」

「ダメとかダメじゃないとか関係ない！気絶させても連れてく！」

「コは本物立腹です。とばつちりだけばごめんだ。とりあえずラインを睨んだ。ガラインは少し何かを考えた後に閃いたような顔をして

「はあ～、仕方ありませんね。では条件付きで行つてあげましょ。私と決闘して1ダメージでも私が受けたら行きます。ただし、私がノーダメで勝つたら見逃すとして」と・・・フフフ、さあ私の屍を越えて逝け！」「

・・・何て言つたか部長。なんでもやうだこうこうの展開の時は毎回試練つまみされる。そして、この時の部長は負ける試合をしない・・・いや、勝つためしがない。

「それで戻つて来てくれるんですか？」

「ええ、私は嘘偽りなく今の事はちゃんと覚つますよ」

「いやいや、ミコいらっしゃなんでも無理だ。だいたいレベル差がありすぎる。こんな勝ち田がないものに乗らない方がいい」

「ん？ でしたらみなさん全員で掛かってきてもいいですよ。そ
れぐらいでいいぐらいのハンデでしょう」

いや・・・なんか部長に腹が立つてきた。なんかすっげー上か
ら田線なんだが、部長のくせに

「シルク、レイン、トールついでにバカ手伝って、お願ひ」

「お前、バカって俺のことか？俺なのか？」

「・・・ダメ？」

「うう・・・いや、いいけどな」

見ましたかみなさん今レッツアがミコにバカ呼ばわりされたこ
とに講義したけどミコの涙田&少し声を掠れさせての「だ
め？」に撃沈されましたよ。ここまでならいいんだがそのあとミコ
が小さくガツッポーズとやってやつたっていう笑みがありましたよ
・・//ミコの見る田が少し変わるな・・

「じゃあ決まりですね・・・では闘技場一力所適当に借りてやりましょうか」

- - - - - 闘技場《悪》

ちなみに闘技場の名称は場所を区分するだけの文字でしかないから神とか悪とか書いてあっても特になんの関係もない。

「なあ、ミコ。ラインってどんな戦闘スタイルなんだ?見た感じ後衛タイプの魔術師のようだが・・・」

ミコは頭を横に振った。

「杖はまだ魔法攻撃力を上げるため。ラインさんはインファイト型の魔術師よ」

ミコからいろいろ情報をもらひ一先ず作戦も立てたとりあえず陣形はいつもとは違ひ前衛レツツア、ミコ真ん中にシルク後衛はレインと俺だ。この配置はラインのトリックキーな動きに対応するためである・・・さらに言つてしまえば一撃当たればいいのだから慎重に闘えば数で圧倒しているこちらが負けるはずがない。

「作戦タイムは終わったかね？では始めましょ！」

みんなが武器を構えカウントが始まる。

3・・・2・・・1、f.i.p.o.t.-!

カウントが終わった瞬間にミコ、レツシアが動き出す。

「《火砕》…」「《サンダーショット・散》」

レツシアの炎属性による攻撃とミコの雷属性による魔法でレツシアは真正面からミコは囲むように雷弾を放つ・・・一発でも当たればこいつの勝ちだからな

「《覚醒》、オン。《アイスランズ》、《グレイブブラスト》、
《カオスエッジ》」

「なー」「きやつー」「《シャインシールド》一間に合ひてく
れー」「ミコ、レツシアー」「ミコちゃんー」

いきなりラインの体から黄色いオーラが出たあと魔法を連発してきた。レツシアの《火砕》は氷の槍とぶつかりレツシアが押し負

けた。ミコの『サンダーショット・散』は土の弾丸に全弾撃ち落とされた。最後に唱えてきた『カオスエッジ』ラインの頭上から大量の黒い剣が出現し弾丸のように射出されミコとレツツア襲つた。ミコは少し後ろの方にいたのでシルクの『シャインシールド』で防がれたがレツツアは一本ほど剣が直撃しもうライフがあるかないかのぎりぎり、生き残れたのはただ運がよかつただけだと思われる。

「悪いね、君達。私はこれからクライマックスですよ」

ラインは笑っていたが、異変もあった・・・ライフとAPがほぼ無い、いやAPに関しては0だつた。俺はラインを見る顔に出ていたのかラインは

「ライフ、APともにあなたがたに削られたものではありますよ。これは『覚醒』というスキルでね、ライフを1にAPを全て消費することにより初級魔法系は全てAPを消費せずに使えるのですよ。しかも・・・」

「な、に?」

かなり距離があつた俺との差をかなりの速度で近づいてきた。軌道が読めない。

「敏捷、魔力パラメータの上昇もあります。『エイトフレア』

『サンダーショット・散』『ウインドボム』

「『エクスプロージョンブレイド』…………が
はつ」

『エイトフレア』のハつの炎弾は『エクスプロージョンブレイド』の爆発で相殺し、『サンダーショット・散』の包むように狙つてくる雷弾を前に進むように回避したが、それはラインの狙いで『ウインドボム』・縁の球体の射出、何かに衝突すると衝撃波を発生される・をまともにへらうことなり吹き飛ばされた。

・・・手数が違ひ過ぎるー

まず初級魔法系とつても初級魔法系スキルのアーツレベル5のアーツは中級魔法系スキルのアーツレベル4並の威力、性能はあるそれをAP消費がないから連発できる。まったくふざけたスキルだ『覚醒』っていうスキルは。

「ああ、勘違いしてもらつては困りますね。このスキルにだつて欠点はありますよ。まあ今はそれを言いませんがこのスキルを修得していることは//コさんは知りませんでしたからあなたたちが対応できなくともおかしくはありませんよ?ですがこれで終わりですか?」

「ラインはまったく余裕な顔だった。ライフは1で一発当たれば

負けるところの

「まだだぜ、部長!俺もあと一撃くらつたら負けるが……俺
が勝つ!」

『ソニックエッジ・散』を放ち分散した風の刃を飛ばして闘い
を再開させた。そして、みんなと立ち向かった。

- - - - -

「ちくしょー、ラインをひいて何者だ――――――」

俺達はあれから一分後には全滅した。今叫んでいるのは初めに
負けたレッツア。

「何故負けた? レベル差か? いや、レベル差だけじゃないな圧
倒的に経験の差が・・・」

とブツブツ独り言を続いているのは最後まで粘ったシルク。負
けていた順番を言つてレッツア ミコ レイン トール シルク
だ。

そうそうあの理不尽スキル、あれは『覚醒』というスキルでライフを1にAPを全て消費することにより『5分間』魔力、敏捷パラメータの上昇と初級魔法系スキルのアーツをAP消費することなく発動できるようになる。しかしこれは再度使用時間が24時間つまり丸一日経たないともう一度は使えない。一見最強なスキルに見えるが同レベルの相手だったらライフを1にしてギリギリの状態で闘うにはリスクが高すぎる。さらに言つてしまつと再度使用時間が一日なので一回きりの『5分間』を耐え抜かれたらライフ1、AP0はただ何もできず一撃で葬られるだけ。諸刃の剣といえるだろう。

でもってそのスキルを使って大暴れしてくれた張本人はなんだかんだ言ってギルドへ行つた。ミユが「私は何をしていたんだろ・・・」とか言いながらガーン！っていう効果音が似合いそうな感じになつてゐる。

・・・まあ、俺もまだまだ弱いという事だな・・・部長に負けるとか屈辱的過ぎるな。いつか、ぜつて一倒す！

- シルクとレッシャの反省会 -

シル「このパートナーなんでもありだな・・・」

レッ「いや、今日の人すげー強かつたな！」

シル「なんで僕がこんな熱苦しい奴と・・・」

レッ「どうした？何をからぶつぶつ言つてるんだ？」

シル「・・・いや、なんでもない。レッシャは今回ワインセラーと闘つて敗因は何だった？」

レッ「魔法は卑怯だ！」

シル「いや、質問の意味理解してるか？」

レッ「男なら魔法なんか使つてんじゃねー！」

シル「・・・黙つてる」

レッ「うおっ、あぶねっ！剣なんて投げるなよ」

シル「話が進まない・・・主役がまったく意味をなさない」

レッ「何落ち込んでんだよ。なんかあったか？」

シル「お前のせいだ！」

stor39 2組余り1（前書き）

ふう・・・どうも、ジャッ口です。

ご無沙汰します。ネトゲって麻薬かなんかですかね。やめられない止まらない・・・かつ えびせんか！

すいませんでした。遊んでて執筆進みませんでした。

「そろそろ何か目標決めないか?」

「最近はずつとマッチョレッジ狩りばかりしていくみんなのレベルも30以上となつてそろそろ別の狩場へ行こうかといふ話の中いきなりレッジアが言い出した。

トール	・	・	・	L	＼	・	32
シルク	・	・	・	L	＼	・	30
レッジア	・	・	・	L	＼	・	31
ミコ	・	・	・	L	＼	・	30
レイン	・	・	・	L	＼	・	30

「いきなりどうしたのよ? 前から変だから気にしないけど」

「最近ミユの俺の扱いひどくないか? · · ·まあいいが、実はこれに出てみたいんだが · · ·」

レッジアはみんなに見れるように紙を配った。紙にはでかでかと『第38回レベル別タッグマッチ出場者募集!』なることが書かれていた。

「これの30～45で出ないか？」

30～45・・・俺達は今まで30レベル代、いくつプレイヤーの技術が高くてももし45レベルのタッグと当たつたら勝てる気はない。

「無理だな、いくらなんでも僕らはまだ30レベルになつたばかりだ。負けが見えている」

多分シルクも俺と同じ考え方だつたのだろう。普通に考えればそうなる・・・だが

「俺はでたいな、べつに負けてもいいじゃないか。やつてみないと分からぬしな。」

正直言つて上のレベルの人と闘つて絶対はつかないが勝てないこともないと思っている。旧世代の数値だけの闘いじゃないのだから。

5

「・・・わたしも・・・やりたいな・・・」

「あらっ珍しいじゃんレイン」「このやりたがらないと思つたけど・・・でもわたしもやりたいな

レインにミコも俺と同意見のようだ。みんなの目線がシルクに向かう。結局みんなはシルクがパーティーのリーダーでシルクの一聲でみんなの最終決定になると考へてゐる。俺もそのうちの一人だ。シルクがNOと答へればみんなもその意見を認める。俺もシルクを見た。

「…………はあ～、いいよ。確かに勝ち負けがすべてじゃないしな……だけど出るからには勝つぞ！」

「よっしゃーーっ…やつたぜ！」

提案したレツツアがすぐに大声で歓喜の声を上げた。だが

「でもさ、俺達つて五人だから一人余るよな？」

俺は疑問を口にだした。・・・レツツアが口を開けたままこっちを見て固まつた。・・・こいつ人数のことまったく考えてなかつたな

「それは僕も考へていたが誰か抜けないといけないが……。だったら僕が抜けようか？」

「え？わたしシルクと組もうと思つてたんだけど、バランスいいし」

シルクの辞退はミコが組みたいといつことで辞退がなくなり一ペアが出来た。あとは俺とレツツアとレインだが

「わたし・・・トールくんとやりたいです！」

レインが真っ先に辞退すると思つていたが俺を『お詫びのようだ』回復・補助が得意な後方支援型のレインと組めるのならかなりいい。

「わかった。レインは俺が絶対守つてやるよ

ん？レインの顔が赤いような・・・

「なあ、やつぱりレインって・・・
「だよね、トールの今の言葉を素で言つてるのもすごいけど
「ていうかトール本人は気づいてないようなんだけどな
「でもトールの最近の活躍っぷりはレインに・・・

気のせいだろうか、シルクとミコが一人で何か喋つているんだ

がたまに俺の方見たり俺の名前がでたりしてないか？一人が聞こえるぐらいの声の音量だからうまく聞き取れない。

みんながびくつとした。・・・レツツアが吠えた。

「何故だ！何故提案した俺が出れないんだああああああああああああ

そういえば忘れてた。俺とレイン、シルクとミコでペア組んだからレツツアが余りに・・・

「チキシヨウ、こうなつたら俺はペアを組んでくれる奴探してお前らに勝つてやる！大会で覚悟しろよ！」

レツツアはパーティーから抜けた。・・・・・あゝ、まあ暴走するアタツカーのことはいいか

「せうにえば」れつていつあんの?」

「リアルだと今週の土曜の昼間だな」

意外とすぐだった、あと「田しかない……田標つて言つてたナビ」「田じやあでもない」と少くないか?

「じゃあどうする」から

「とつあえずペアだつしあと「田何をやるか決めればいいと思つ。コノマネーションとか作戦立てるとか、だらうな。」

それから「じゃあな」とシルクとミコサビにかく行つた。レインを見る……あんまり喋んねーからせりべつて切り出さつか……と、考えていたら

「あの……メールへようこそお願いします。」

挨拶は大事だ、だから俺も

「よひじへ、レイン。あと俺のことは普通にツールでいいからくふ付けしなくてもいいよ?」

……あれ、今までちゃんと顔見たことなかつたナビレインつてすつじへ可愛こ……

「ん、わかつたトール」

この返事とともに笑顔で俺を見た。

ズキュン

この効果音が鳴つてもおかしくない。誰が見てもこの笑顔には胸を撃たれるだろう。

・・・さて、大会までどうしようか。

（部長のためになるCHAOS ONLINE講座）

部長「最近ずっと私のターンですね」

トオル「つーか俺には部長が第一のショイドさんしか思えないんだが」

部長「ではでは今回はオブジェクトについて」

トオル「俺の発言スルーか！？」

- ・『オブジェクト』

CHAOS ONLINEの世界には現実と同じようにガラス窓に石をぶつけたら割れる、木造の家に火を点ければ燃えるなど現実に物理的に起こることは物体に働きます。なのでダンジョンの壁に穴を開けることも可能です。ただしあくの物体は一日経つとすべてが自動修復され元通りになります。あらゆる物体には耐久度がありそれを越えると壊れます。例えば、壁の耐久度が100だったとしますプレイヤーの剣の威力は1という場合壁を剣で100回切ることにより壁を破壊できます（オブジェクトにも弱点属性があり弱点属性で攻撃するとより耐久度を減らせます）

部長「そういうえばトオル君は床を破壊したそうですね」

トオル「あ～地下があるダンジョンだったんで《フレムレイド》《エクスプロージョンブレイド》とかの爆発系ので破壊しました」

部長「いい判断ですね。今後もまわりの環境が戦況に響くこともありのでよくまわりを確認することは大事です」

トオル「・・・すっごー今までくな次回予告がなかつたのに今まで一番まともだったんじや」

部長「それではまたのこの「一ナード」

トオル「いいのか、こんな普通でー。」

story40 —一人で一人（前書き）

どうもジャッ口です。はじめまして、前から読んでいる方久しぶりです。

ん～ちゅくちゅく出かとか書いたのにせんせん投稿しない私がいます。すんまくん

- - - レツツア 視点

・・・飛び出したのはいいがあてがない・・・

「ちきしょー何故俺だけちょっと残念なんだ!」

その性格がだめだ、と言つてくれる仲間もいない現状では彼は暴走し嘆いている。時折「うがああああ」や「うおおおおお!」など叫んでいるので誰も近づきすらしない。が、一つの陰がそんな彼に近づいた。

「やあ、こんなところでどうしたんだい?」

灰色の外套を纏つて身長と同じぐらいの杖を持つた男がいた

声までかけてくれたその人に レツツアは感激し事情を話し尽くした。そしてその男は

「では私が一緒にでましょつか?」

その男は手を前に出して握手を求めた。レツツアはその手をすぐ握った

「感謝するぜ、えーっと名前教えてくれるか？」

「ああ、ラインと言います。大会ではよろしくお願ひします」

- - 大会当日 - - トール視点

大会当日になつた訳だが一日で出来ることなんてたかが知れる・・・簡単なコンビネーションとか合図とかそれぐらいしか出来なかつた。

「お~いトール遅いぞ」

会場にはシルク、ミコ、レインがいた。つまり俺が最後、つても時間5分前なのだが？

「じゃあ受付いこうぜ」

受付へと向かつたが途中でふと思つたことがあつたので言

つてみた

「そういうえばレッソニアは来てないのか？」

いまさらだがレッソニアのことを完全に忘れていた。

「ん？・・・ああ、レッソニアならあの逃亡からまつたく連絡がつかないな。何やつてんだろ？」

シルクが答えてからミコやレインも知らないと言つた。そして受付で選手登録した。

この大会のタッグ戦のルールを簡単に説明しよう。まず、勝敗条件はタッグの内片方でも負けたらそのタッグの敗北だ。どちらか一人でも倒れたら終わりなのだ。次にスキルの制限について召喚スキンで召喚可能数は二体までそれ以上は召喚できなくなっている。同じくPモンスターも二体までが上限である。武器防具について魔武器の使用は不可。アイテムについて試合中に持ち込めるアイテムは素材アイテム（装備品は別）のみただし精製、製造、調合などでつくったアイテムに限り使用可（それ以外は持つても使用できない）。最後に試合中にログアウトした場合その時点でその人の負けが確定する。

まあこんな所だわい。回復アイテムの使用ができなくなるのは

厳しい。APの回復はアイテムに依存してしまっている俺にはかなり厳しい。APは攻撃を当てるか何もせずに待機しているかアイテムを使うかAP獲得スキル。アーツを使うしか回復手段はない。

でもって、タッグ戦のトーナメント表ができた。名前は伏せてありアルファベットと数字にで表記されていて選手登録したさいに教えられたC3が俺とレインの番号だ

ちなみに参加者が多いのでABCDブロックに別れていて各ブロックに8組。各ブロックの勝者で一位を決める。というわけで俺達の番号は見た通りCブロックの三番目。

- - - - -

「はっ！」

俺はエクスプロージョンブレイドを相手の肩から斬りつけてライフを大幅に削っていきゼロにした。この瞬間勝ちが確定した。

「・・・ふう、お疲れレイン。この後もいけるか？」

意外も意外、俺とレインは準決勝まで勝ち進み次にはCブロックの決勝だ。ここまでたら勝ちあがりたいと思うのは普通の感情だと思う。だがレインが心配だ。彼女はあまり闘うことが得意じや

ない補助・支援型の彼女はその役職からまず真っ先に狙われる。さつきの試合でも何度か危ないところだった。そしてさつきからびくしてるのが誰から見ても分かる・・・だから彼女がやめたいと言えば辞退するつもりなのだがレインは「いけるか?」に対して頭を縦に振ることで肯定した。

「・・・わかった。じゃあ時間もあるしシルク達の方見に行こ

うぜ

シルク達はAブロック一回戦は勝ったところを見た。そしてCブロックに来てないところを見るとまだ勝ち続いているのだろう。

Aブロックのやつている闘技場に着いた。シルクとミコはまだ闘っていた。相手は剣士が一人。一人の剣士をシルクが前衛でギリギリで凌いでいる。

- - - シルク視点

目の前にいる剣士は完全に純粋な物理攻撃しか持っていないように見える。だが飛び道具系のアーツを使ってくる可能性も考慮しておく

「シルクあとちょっと粘って!」

ミコの詠唱がもう少しで終わるようだ……だが僕のライフもミコの大型魔法詠唱の時間稼ぎの防戦をしていたのでかなりきわどい。

相手の剣士は型をつくった

……まずい！

ミコの掛け声でミコの詠唱の妨害するよりもライフを削った僕のライフを削りきってしまおうとアーツの型をつくっている。

だがここで倒れるわけにはいかない！

シルクは腕につけているバックラーを前に出しアーツを使った。

「《セイントタワー・ディフェンス》！」

『セイントタワー・ディフェンス』・光の壁を出してダメージの軽減ができるスキル。シルクが今もつ防御系最強スキル

相手の剣士の一人が《連續斬り》のアーツを使い12撃の乱舞

を壁に斬りつけた。壁に輝が入り壁の耐久度がもう少しだと分かる。そこにもう一人の剣士が『エビルイレイザー』のアーツを使い紫のライトエフェクトが剣に纏いそして強力な突きを放つ。

壁は割れたが勝負はシルク達が勝った。そう、ミユの詠唱が完成した。

「『インフェルノパニック』」

『インフェルノパニック』 - 指定範囲内を焼き尽くす。さらに範囲内にランダムで爆発が起きる。最後に範囲中心で大爆発。『中級炎魔法』スキルのレベル4アーツだ。

一人の剣士は為す術なく燃やされ爆風に当たりラストの大爆発によつてライフが尽きた。

- - - - ドール視点

ミユの魔法がここまで凄くなつてゐることは知らなかつた。正直すごいと思う一撃必殺の大魔法・・・これから闘うのが楽しみだ。さて、次はこっちの『ブロック』の決勝戦か・・・ぜつて一勝つ！

- - - - -

相手は小学生みたいな・・・・・といつより小学生が一人のタツグ。本当か?と思つたが確かだそうだ。こんな子供が決勝まで上がつてくるということはそれ相応に強いのだと思う。油断だけはしないことにした。

相手は小学生の男の子が二人カケルとユウタだ。獲物は二人ともナイフのようだ。『小剣』ナイフスキルは確か状態異常付加効果があったはずだ・・・試合がはじまる。

トールは大剣を構えたがこんな子供に剣を向けるのはどうなんだろうか?と戸惑った隙はカケル、ユウタに不意を疲れた。

カケル、ユウタはナイフでトールを切つた。そしてトールは切られてから気がつく毒と麻痺の状態異常にかかりたことに。

「バカじやねーの?」のにーちゃん。何棒立ちなつてんだよ」
カケルの方の声

「仕方ないよ。前の人達もだけど普通は子供に斬りかかるる人は少ないよ」ユウタの方の声

・・・・よくわかつた。ようは今と同じで隙を疲れて状態異常で何もできなくなつたところをやられたのか

「《ページライト》」

俺は上方から射す光に照らされた。毒と麻痺から回復した。
後方にいたレインが状態異常回復魔法をかけてくれた。

「もう容赦しない。今みたいな方法じゃ俺は倒せないぜ? 覚悟
しりよ

今度はマジに大剣を一人の子供に向けたが、

「だから無駄話するから回復してんじゃない?」

「ううせ、どうせ俺が倒すんだから関係ねーだろ」

「だいたこもつとしんぶるにてきるのになんぐさ~」

「ぐちぐちひせーなー。お前それでも男かよー?」

・・・・・やつぱガキだわ。あと無視されるのって結構腹立
つな・・・やつまえ

「《フレムレイド》オオオオ!」

隙だらけの一人に斬撃を叩きこんだが躰された。

「うわー。ちゃんとひどくね? つかせ」

「あぶないな～後で今の話の続きをやるからね～？じゃあ僕は後ろのおねーちゃんの方妨害するから。つわつあぶな～」

危ないのはこっちだ。もう少しでレインの方にいかれるとこりだつた。つーか今普通にこっち警戒せずに向かわなかつたか？

「後ろのねーちゃんどうせ補助とか回復しかできそーにねーじ
やん。いっしょにこいつたおそーぜ?」

なんつーかこのタケルはあんまり考えて闘つてないな。
のタッグの頭脳はユウタか
んでこ

「え～うしろのおねーちゃんぜつたい光攻撃魔法持つてるよ～じゃあ僕補助にまわるからあのおにーちゃん任せるよ?」

「やつしゃーれたー。いぐぜいぐぜいぐぜー《ストライクエッ

ナイフを両手に一本ずつ持ち突っ込んで右手の一本は投げてきた、それを大剣に当てて躱したがその後の攻撃が《ストライクエッジ》だった

「たああああああああ！」

大剣に青いライトエフェクトを纏ったナイフがぶつかった。

重い！軽く一步後ろに後ずさつた。かなり一点集中攻撃なのか体格に似合わないかなり重みのある攻撃だ。

「まだまだ《ブレイズエッジ》《炎火脚》とどめ《刺突》」

長いコンボを繰り出された。《ストライクエッジ》から炎纏つたナイフの斬りつけ《ブレイズエッジ》を大剣でガードしたがこれが相手の狙いだった。次手の《炎火脚》により炎纏つた蹴りで大剣を蹴り飛ばされた。俺は丸腰になってしまった。そこに《刺突》黒いライトエフェクトを受けたナイフによる突きを繰り出された。

「ぐはっ」

「《ホーリショット》」

「《ローバーマジック》」

タケルはユウタによつて俺にとどめを刺す前に蹴り飛ばされた。レインの光弾を躊躇せるために。ユウタは光弾を『ローバーマジック』 - 魔法吸収アーツによつて防いだ。

ユウタの判断力、タケルの行動力が半端なく相性が良くかなり強い・・・これはかなりでござりそうだ。

story40 一人で一人（後書き）

帰ってきたシェイド

シェ「私の場所に帰つてきました。そうシェイドが帰つてきましたよ！」

トーリー「いや、帰つてこなくともかまわなかつたんだが」

シル「シェイドさん・・・残念です」

シェ「え？何故強制転移発動しちやつ」

トーリー「なあシルクー」

シル「なんだ？」

トーリー「シェイドさん何しに来たんだろうな」

シル「・・・」

トーリー「・・・ま、いつか」

story41 一人で一人・続（前書き）

どうも、ジャッロです。

：

：

：

・・・・・強いて言つことがあれば更新遅くてごめんなさい

コウタ、タケルが不意打ちだけで勝ち上がったわけじゃないのはわかつた。だがレインの《ホーリーショット》を無理にでも躱したのを見てわかつた。ライフはかなり低い。《ホーリーショット》は《初級光魔法》スキルの中でもダメージが少ないアーツだ。それを無理に躱すのを見た限りライフは少ないと予想がつく。

「あーっ、もつ少しだったのになんて邪魔すんだよ」

「うしろのおねーちゃんやつぱり魔法攻撃持つてたから助けてあげたんじゃないかな~」

「あこは俺があのコンボでにーちゃん倒して終わってただろ」

「よく見ようよ~ あのおにーちゃんライフはぜんぜん削れてないよ~」

・・・・・ここつりよく敵の前でこんなに喋つてるな

だがこれはチャンス!」の間に飛ばされた大剣を回収した。

「あー、弾いた剣回収されたー！」

「お前が無駄な説教するからだろ」

「僕は悪くないよ」つっかかってきたのそっちだしそう

「・・・お前がやへ難いな」

大剣を回収したあとまだ口論になつたのどうとう俺は口をはさんでしまつた。

一人は俺の方を向いて獲物を狩るように目を光らせた。

「よし、やつ一人で狩る。」アーヴィングは

「んー、いいよ。僕ももう飽きたし

二人はナイフを前に出し俺に刃を向け

彼らのまわりに20本のナイフが空中を回転して舞っている。
そして、

「ゴー！」「討てー！」

掛け声とともにナイフが俺日掛けて飛んで・・・来なかつた。
的外れに俺の横を・・・横を通つたナイフを見てすぐにわかつた。
俺狙いじゃなくレイン狙いの遠距離攻撃だと！

すぐに飛んできたナイフを大剣で打ち落としていった。飛んで
きたナイフは速くはないから打ち落とすことには問題はない。だが打
ち落とす作業しかできない。

二人の子供は俺に向かつてきた。

「『ストライクエッジ』」

咄嗟に大剣を構えて防御したが二人分の重みには堪えられず

「がはつ」

おもいつきり飛ばされ壁に叩きつけられた。一人分の『ストラ
イクエッジ』はかなり重い一撃になる。

「今だ！」

タケルの掛け声の意味、俺がダウンしている隙にレインに向かつた。まだだ、まだ手はある！

- - - レイン視点

あつ、トール君が飛ばされた…どうしようもそこじゃ回復魔法も届かないよ

「今だ！」

タケル達が自分に向かってくる。対処はとりあえず光弾（『ホーリーショット』）による牽制。

光弾を数発放つがタケル達にはかすりすらしない。

「よつと」 「《ローバーマジック》

着実に近づいてくる。そんな彼らを見てレインは焦りを感じ初

め命中精度が下がりやうに彼らが近づくのに拍車がかつた。

「終わらせるぜ《ストライクエッジ》」

とうとうタケルの攻撃範囲内に入ったので彼はアーツを使ってきた。だがその攻撃は途中で終了した

ウワオーン

灰狼がタケルにタックルをかまし吹き飛ばした。それは最近トルが召喚できるようになつたアッシュ・ウルフだ。チャイルドウルフの上位種。子狼の子犬っぽさが消えた灰色の毛並みの狼。

灰狼はレインを背中にに乗せ走つた。

「うわ～あのおこーちゃん召喚できるんだ～」

「いってーなんだあの狼、ムカつくな。必殺コンボで終わらすようぜー！」

「あ～でもさ～」

「何だ・・・・・」

「『め～ん、捕まつた～』

私と灰狼に気をとられている間にトール君はユウタ君に剣を突き付けていた。私も灰狼の出現に驚いて灰狼ばかり見てたけどトル君はすごいな。

いつでも倒せる状態になつたトールにユウタ達は降参してプロックの勝者となつた。

「次あつたらぜつて一勝つからな」「そのセリフものすごく負け犬っぽいよ」とまあ前者がタケル君でユウタ君、降参した後に言われた。タケル君はトール君に指差して言つてました。男の子つてよくこんなやりとりしてますね。トール君も意地悪く「お前一人なら余裕だ」とか笑いながら挑発してました。

その後ミユ達はどうだったか見に行つた。

- - - - - トール視点

「ダメだったよ、相手大剣使いと弓使いだったから僕らの苦手

なパワー・タイプと魔法詠唱妨害の遠距離型がいたからまったく相手にならなかつたよ」

シルクとミコは決勝で負けたそうだ。どうやら相手は大剣使いのパワー・タイプと『使いの妨害遠距離型らしい。シルク達が最終トーナメントに残らなかつたことを残念に思う気持ちはあつたがシルク達と戦わずに済むことにホッとした気持ちもあつた。

大会決勝トーナメントは明日だ。

story41 一人で一人・続（後書き）

次回予告

ト一「久しぶりのまともな次回予告いらしょ?」

シル「……のようだな。で、誰が次回予告するんだ?」

ト一「シルクじゃないのか?」

シル「僕は何故呼ばれたのかすらわからない」

ト一「…………」

シル「…………」

ミユ「やつほ~い…………って何でシルクいるの?」

ト一「あ、ミユか。次回予告ってミユがやるのか?」

ミユ「うん。じゃあ早速やつていー?」

ト一「そりだな。とつとつやつて解散しよーゼ」

ミユ「次回、story42 猛撃。あの人がまた出できます。……たつたこれだけのセリフのたまに呼び出されたんだ……」

ト一「……まあ解散しようぜ?・じゃあな

「ミコ」「またね」

シル「なぜ僕は呼ばれたんだ・・・・・・」

あ～はい、お久しぶりです。
ジャッロです。

言いわけしたいですが私事ですのでとくに何も言えません

遅れて申し訳ありません。

そして、まだ更新は遅いかかもしれません。

気長によろしくおねがいします

今日は決勝トーナメントの日だ。俺達はまず初めにロブロックの勝者と戦う。これに勝ち上がればA、Bブロックのどちらかとなり一位を決める。負けても三位決定戦がある。

Aブロックの勝者はシルク達が闘っていた。大剣使いと弓使い。

Bブロックは・・・

「なつ・・・」

レツツアがいた。だが驚くところはそこじゃない。レツツアといっしょにいたのはラインだ。

だが考えてみよう。ラインはレベル60越えだったはずだレベル制限のあるこの大会にまぎ参加することができないはずだ。

そんなことを考えていたらA、Bブロックの一回戦が始まった。

始まりの合図とともにレツツアが大剣使いに駆け込んだ。だが駆け込んだのはレツツアだけではなくラインもレツツアの少し後ろ

にいるが駆け込んだ。

大剣使いは上等手段である《ソーックエッジ》で牽制をいた。

だがそれでは彼らの勢いは止まらなかつた。レツツアは『ソニックエッジ』を大斧で断ち切り勢いを殺すことすらなかつた。さらにラインはこの間に強化系魔法によりレツツアがさらに強くなつた。見た限り攻撃上昇・防御上昇の強化が施されただろう。

しかし、さすがと言うべきかブロックを勝ち抜いただけはある弓使いは強化されたレツニアに『ブレイクショット』 - 防御力を下げる矢を放つ - を放った。レツニアは『ソニックエッジ』の対処をしたばかりで回避行動をとれず強化分の防御力を相殺した。

・・・レツツアがいい感じに立ち回れているように見える。そう見えるだけで実際はラインの魔法がレツツアを補助しているためだ。レツツアに向かってくる大剣は《バリア》 - 一秒だけ展開できる防御障壁 - を使い防ぎ、遠距離から放たれる矢は水弾や雷弾にとって撃ち落とされる。さらに隙があればレツツアに強化魔法を掛ける

わかつてはいたことだがラインは強い。ライフが多くあつたで
あろう大剣使いはもう一割を切つた。対するレツツアはほぼノーダ
メージ一割も削られていない。

叫びだしたのは大剣使い。何やら大技を出すようだ。白色の大剣のまわりに赤いオーラが纏つた・・・が。

ズドン！

大剣使いの技が発動するまでには至らなかつた。叫んで大剣にオーラを纏わせている間にラインが大剣使いの真正面まで高速で近づき『初級雷魔法』スキルアーツ、『サンダー・ライオット』・最速で雷弾を放つアーツ、ただし射程距離が短く1m・で妨害後、連射。

一気に大剣使いのライフが削られていき大剣使いのライフがゼロとなつた。

ラインの強さが半端ない。レツニアは相変わらずの正面突破だつたが・・・このコンビは強い！だがまあ先にロブロックの選手に勝たなければならない。どんなやつらだったか・・・。

- - - - -

俺達の相手は槍を持つた軽装の男と二丁拳銃を持つ女性だ。どちらも中距離能力に長けていそうだ。

接近戦に持ち込むのが常套手段だと思つが相手は相当な手練だと思う。簡単には接近戦へもつていけないと思つ。

- - - 試合が始まった。

最初に動いたのは俺だ！まず直進で加速し槍使いに《ヴォルフファンク》 - 振るつた剣より1m先に上からと下からの一本の青い刃で切り裂く - を使い青い刃で奇襲した。

しかし相手も俺が剣で虚空を斬つたところを見た瞬時に攻撃動作だと理解し回避行動をとつた。腕にかするだけにいたつた。

だが隙も生まれた。ここで追撃したかつたが銃弾が跳んできて距離をとらざるをえなかつた。

「おひ、助かったシロゾン」

「ひひひ、そなこと後でいいからととあつちの後衛倒して

「へへへへーっと、つつても前衛がちょー強そうなんだが・・・」

「

「ヘイトー・無駄口叩くなー。」

槍使いがヘイトで一丁拳銃持つてるのがシロンだそつだ。俺は大剣を前に構え牽制しながら

「レイン、『アレ』の準備しててくれー絶対守つきるー。」

レインに『アレ』の準備をしてもらつた。

ヘイトが槍を構えながらゆっくりと近づいてきた。

「いやあ少年結構強いやん。なあ、少年なんちゅーか前ぜへー。」

「・・・トールだ」

攻撃じゃなくしゃべりかけてきた。俺は攻撃がくると思つていて咄嗟のことについ名前をいつてしまつた。だがこれで隙をつくつてしまつた。一瞬の出来事だったかなりの速さで俺の横を抜けて行つた。

「悪いなトール、勝てば宣軍や。やらせてもらひでー。」

・・・だがまだ間に合ひ!-

と思つたがここにまだ一つミスをしていた。

銃声が三つ鳴り響く。

ヘイトに気を取られシロンに注意がいつていなかつた。一発だけまともに脇腹に当たつてしまつた。そんな中でもヘイトはレインに近づいている。

「サモン、《チャイルドウルフ》！ サモン、《アッシュュウルフ》！ レインを守れ！」

「なんや、少年召喚スキルももつとつたんかい！」

レインの前に守護するように一匹の狼が立つた。

だがどちらもレベル20以下のモンスターへイトが臆することなく突撃した。

「・・・ヘイト、下がつて！」

シロンは気づいたようだ召喚したモンスターには召喚モンスター用のスキルがあることを

「チャイルドウルフ、《ダッシュファーファング》・アッシュファウルフ、《ワーストハウリング》！」

《ダッシュファーファング》は名前の如く高速移動&かみつきだ。だが速い！そして《ワーストハウリング》、移動速度低下の咆哮。

高速攻撃と速度低下のコンボ、ヘイトはどう見ても回避主体の軽防御力だらう。あたれば致命打にはならないものの痛手にはなるだろう。

「うおっ、足が・・・だが《イリュージョンblast》・ぶつ飛
べえ」

ヘイトは移動速度低下を《イリュージョンblast》・槍先から風弾を放つ・の反動を推進力にし子狼の牙から逃れ灰狼の咆哮の範囲外に逃げ切った。さすが準決勝というべきか対処能力が高い。

だが、もう試合にけりはつく

「……闇よ、閉ざせ 《光牢結界》」

レインの魔法が完成した。

『光牢結界』 - 《結界》スキル中級アーツ、複数体の対象へ対象者中心に三角錐の結界で閉じ込めるアーツ - これによりヘイト、シロンは結界内に閉じ込められた。

ヘイト、シロンは槍で突き銃で撃つたが結界は崩れることがない。
そして・・・

「《スクスピロージョンブレイド》 - 」

内側からだと抜けられないが外側からだと攻撃が通るという反則な
結界。

「そんなあほな・・・」

これがヘイトの最後の言葉になった

次回予告

ショイド「今回は初のFC投稿DA」

トール「ショイドさん何についてるんですか？」

ショイド「知らなくてもここのことはつぱいあるんですけど」

トール「せあ……」

ショイド「ま～そんな」とよつ、久しぶりにあとがきに現れました
よー・ショイドですよー！」

トール「……あ、ライカさん」

ショイド「なー…ばれなじよひに抜けだしたばかー。」

トール「……やつぱですか」

ショイド「トール君はめおしたね！私がなにをやつたと……」

トール「あ、ライカさん……トールです、ええ。ショイドさん」
つちにいますよ。ええ、ええではお引き取りお願ひします

ショイド「ト、トール君。きみはなんて」とするんだ！私がどんな
気持ちで今いるかわかつてゐるのですか！」

トール「知らん！はたられ！」

ショイド「く、働かないのが何がわるい！」

トール「悪いわ！あ、ライカさんこいつちです。」

ショイド「ちいっ！次回、決勝戦・挑むは部長！では～またの次回
よこっ・・」

トール「あ、あっちです。ライカさん」

ライカ「・・・私の出番これだけ？・・・ショ～イ～ド～・・・
・ふふふつ」

いつも、ジャッロです。

ええ、アンケート書いて下された方ありがとうございます。

更新遅いですがどうぞアンケート募集集中です。

「いよっ!」「やあ

声をかけてきたのはレッシアとラインだ。俺達は先の戦いに勝利し決勝へ駒を進めた。でもって今日の前にいるこいつらは決勝で戦う相手だが

「ラインあんなすげー技もつてたのかよーすげーな!」

「いやー、トール君のスキルはなかなか見所が多いですね~」

次戦うといつのにしぐれと話しこんでくる。・・・まあ、それはいい。こっちも一番知りたい疑問を投げ付けた。

「なあ、ライン。なんであんた大会に出れるんだ?確かレベルは60・・・は?」

トールはラインのレベルを見た・・・』`・39・・・は?

わけがわからずラインのことを見てみると

「なに、簡単な事ですよ。キャラデータを消して初めからやりました。」

「…………何言つてるんだこの人は……」*CHAOS ON LINE*はその特性上よくあるMMORPGのように何種類かのキャラを作ることができない。

一人に一つ自分の分身を作ることができる。『トランスギア』……この仮想世界へ入れる唯一のハードウェア……を起動するにはまず登録した網膜スキャンがある。それにより個人の判定を行う。これがあるため一人が二つ以上分身を作れなくなっている。

そして、ラインのレベルは39レベル……

「…………って、ラインレベル上がるの早過ぎだろ……」

つい先週までは60越えのレベルでいたのだからあの日からレベル1からの再スタートではいくらなんでも早過ぎる。

「ふむ……まあ、トール君の反応は予想通りですが普通に種明かしも面白くありませんねえ。…………では、決勝で私達に勝てましたら教えてあげましょう」

「…………気になるな。ああ、気になる。」（棒読み）

こういう場合、期待するだけ無駄な事が多い……だが部長へのリベンジになるこの試合は負ける気はない。

「んー、だつたらもう少し気になる素振り見せてもらいいと思いますがね……おっとそれそろ決勝ですね。では、試合でありますよう」

- - - - -

レツツアとラインが前にいる。ラインの存在感が大きい……強い相手が一人いるとそいつばかりに注意がいき他の存在を隠してしまう。

・・・・視野を広くもどう

注意すべきはもちろんラインだがそこで動くレツツアはもつと要注意だ。

試合の始まりを告げるサインが出た。

初めに仕掛けたのは、トールだ。チャイルドウルフとアッシュ
ウルフを召喚し、《ソニックエッジ》をライン目掛けて放つた。ラ
インへ放たれた風の刃はレツツアの大斧に阻まれた。

だが、ここまでトールの作戦通り風の刃を防いだレツツアはそ
の大斧という隙が大きい武器ではまさに今隙だらけである。

「こ」で、ラインの光弾が三発レツツアに向かって飛ぶ・・・だ
がこれだけでは終わらない。召喚した二匹の狼にラインへの攻撃命
令さらに俺は光弾の後ろをつくようにレツツアへ向かう。物量攻撃
による鎮圧が目的だつた。

「・・・・・なつ・!」「・・?」

俺とラインは驚いた。何にか?光弾の回避と狼の対処に、だ。
レツツアとラインの立ち位置が逆転した!

突然ラインとレツツアが入れ代わつた。前に出たラインは光弾を雷
弾で相殺し、俺の剣を魔力補正が高そうな長い杖で受け止められた。
後ろにいるレツツアのほうには向かっていた狼が斧に吹き飛ばされ
る。

未知のスキルやアーツがまだ多くあるのはわかつていた・・・
だが今は対処の仕方がわからない。

位置入れ替えアーツ？への対処法がわからない・・・がラインの結界ならなんとかなるかもしだい・・・

「レインー！アレまた頼む」「はいっ！」

レインが詠唱を始めた。 - - - あと三分

「この三分は長くなりそうだ・・・

ライン・レツツア一人を止める必要がある。「《サンダースピア》」！？」

「だあつー！」

思考が長かったようでラインから放たれた雷槍を剣で叩き斬る形で防いだ。だが相手の攻撃は止まない。

続いてレツツアが大斧を縦一文字に俺目掛けて振り落とす。それを俺はぎりぎりで見切つて左に躰す右側に斧が通過する。そして、今がチャンスだと思いレツツアに仕掛けようとしたが

「まだ俺の攻撃は終わってないぜ」

続いて飛び込んでくるのは《フルスイング》 - 大振りで空振りすると隙は大きいが技の出ははやい - によりさらに追撃される。だがレッジアの残念なところで追撃するぞ！つという意志表示していることを言ってしまったことによりトルは次の攻撃を読めていた。

バックステップで《フルスイング》を回避し、そのできた隙をトルは逃がさない。

「ぶつ飛べ！《ウルフ・バレット》」

《ウルフ・バレット》 - 転移召喚アーツ、すでに召喚している狼を自分の前に再召喚し青い弾丸にして前方一直線に放つ - により二つの弾丸はレッジアにあたった。

「ぐあっ・・・・・フツ！」

レッジアの堅さには驚かれる。レッジアはまだ生きていた。
そして、レッジアの最後の微笑は・・・・・！！！

・・・大きなミスをした。レッジアに気をとられラインが大き

な魔法の詠唱をしていた。そして、さつきのレツツアの笑みは・・・
・・・?

考えるよりも先に動いた。レツツアに狼で牽制させた。

「『・・・轟け雷鳴、穿て雷槍・・・貫け《トライデント》
!』

ラインが詠唱を完成させ魔法を放つてきた。《トライデント》
・三つの雷槍を対象者に向かつて放つアーツ・がラインに近づいて
いく

・・・まだだ!

トールは全速力でラインの前に行き《トライデント》が届く前に
止めることができた。

「俺が絶対守りきるー《一匹狼の勇氣》」
ロンリー・ウルフ・フレイブ

『一匹狼の勇氣』 - 蒼い鬪気を剣に纏わせ相手へ放つ、溜める
ことにより範囲、威力が強くなる・本来溜めることにより真価が発
揮されるアーツだが目の前の危機を回避するにはこれしか方法が思
いつかなかつた。

蒼い闘氣が三本の雷槍にぶつかる。結果はすぐにでた雷槍一本との相殺に終わった。だが目的としては時間稼ぎ、闘氣を雷槍にぶつけたところの一瞬の均衡により抱きしめるようにラインを捕まえて横跳びに雷槍を躲した。

「ここから周囲を確認しようとしたが

ズスン！

目の前に斧が降ってきた。いや田の前にレツツアがいた。

「わりいな、ラインの旦那が強すぎた」

内心で同感だ、と肯定した。そして、俺達は負けたと認識した。

「おー、ライン！」

大会の上位勝者には賞金が授与され、その授与が終わってみん

など別れた後だつた。

「最近トール君の私の扱いひどくあります?」

「うつせー・・・・・ 一つだけ聞かせてくれ

「はい、なんでしょう?」

「前回から始めたこのゲームのプレイ時間は?」

フフッ、と笑われたがいいのは重要である。

「こちらの時間で四ヶ月ですよ

・・・・四ヶ月の差があるのか・・・だったら一ヶ月で追い越
してみせるー

次回予告

トール「やうやうやうへー次回予告、じやなくともこいと思つんだが・・・」

ライン「そんな細かいこと気にしなくてもいいではないですか？」

トール「言葉がおかしいぞ？」

ライン「そんなことを？」

トール「ありえないぐらに短くなつたな・・・」

ライン「どうしたのですか？トール君」

トール「いや、上げるだけ上げて落とされた時の気持ちがよくわかつたわけだが・・・」

ライン「ああ～、どういえば負けましたね」

トール「・・・」

ライン「やういえば新しいアーツも出していましたね。一瞬で終わりましたけど」

トール「・・・」

「ハッハッハッハッハ」

トール「《エクスプロージョンブレード》」

「あぶなつ！ トル君暴力はいけませんよ！」

「あんたを殺して俺は生きる。それですべて解決だ」

To be continued

story44 強者の次元（前書き）

どうも、ジャッロです。

めずらしく速い投稿です。

そして、なんだか最近読んでる方が増えてるー。

これからも更新、頑張ります。

よければ感想、アンケートをくれると嬉しいです。

「ふわあうあううあ～」

トルが伸びとともに木陰で大きなあぐびをあげていた。

「たまにはいいな、こういつのも」

場所は狼の森だ。みんなの都合があわず今日は一人だ。そしてやることがなく眠っていた。もちろん敵が出てくるダンジョンなので子狼と灰狼に番犬となつてもらつた。ここは子狼の出現地域なので上位の灰狼がいるだけで近づいて来ることもない。

「だが・・・暇だ・・・」

トルは立ち上がり森の奥地へ向かつて歩き出した。

「そりいえばまだここ奥までいってないな・・・このレベルなら大丈夫だろ」

レインと大会前にモンスター相手に闘つていたら1レベル上がつたりスキルが増えたりした。

「さて、何が出てくるか・・・」

トールと狼一匹は森の奥へと進んでいく。

「《エクスプロージョンブレード》！」

銀狼の横腹に振り上げの《エクスプロージョンブレード》をぶつけた。銀狼は上に吹っ飛び消滅した。

銀狼相手だと今のトールでは余裕すらあるようになつた。今は森の奥手前あたりだとトールは踏んでいい。

数十メートル進むと

「おつ？」

三つの下に向かう穴があつた

「んー、どうようか・・・」

迷う理由としてはこの先にボスクラスのモンスターがいるのじやないだろ？かそして負けてしまうんじゃないだろ？かといふこと

だが

「ま～とらあえず行ってみよ！」

1番右側にある穴に入るとしたが

クウウーーーンクウウーーーン

尻尾を垂らしながら一匹の狼は足を引っ張つてきた。

「ん？危険なのか？」

初めて見る狼達の行動に一瞬驚いたが、これは自分を止めてい

「」とはわかつた。そして穴に入ることを拒むように。

「・・・・止めとくか

三つの穴に背を向け帰りつとしたとき地鳴りが起きた。

「っ！・・・・嫌な予感しかしないんだが！」

どうやら真ん中の穴から地鳴りが起きているようだ・・・音が大きくなつてきている。

狼達が低い唸り声をあげている。剣を構えた。

ヴウウウウウン

真ん中の穴から朱色の《ソニックエッジ》が飛んできた。周りにあつた木が一瞬で灰になつた。

《ソニックエッジ》よりも倍は速い火属性の刃。トルは突然のことに認識が遅れたが大剣を真ん中の穴を前に構えなおした。

穴から何かが出てきた。

全身真っ黒、とじりとじりの白い紋様があり頭には角、背中には羽、その姿は悪魔。

完全に認識したところで悪魔の姿が消えた。

いや、ちがう！

「つくそが！」

穴の前にいた悪魔は俺の横にいた。大きな腕を振り落としてきた。

それを大剣を振り上げるよう斬撃をかましたが

「堅いな・・・」

悪魔の腕は斬れることはなく弾く形に終わった。

そして、悪魔の攻撃はまだ止んでいなかつた。悪魔の白い紋様

が朱色に変わつていつた。トールは見たわけではないがこれがさつきの朱色のソニックエッジの発動動作だとわかつた。

だが発射する場所が見当がつかない。

・・・羽か？ 口か？ それとも腕か？

トールの予想はまったく当たることはなかつた。

トールは距離を取るよりも相手の死角へ周り込んだ。

悪魔はいきなりサマーソルトをした。足から朱いソニックエッジが飛んだ。

死角にまわつたことで躱すことができた。しかしこの悪魔は異常だ。3mはある巨体で5m近くを一瞬で移動するわサマーソルトはするわとありえない。

逃げるのが1番得策だと思つが逃げれると思はない、といつよりも背中を見せたら即死確定だという確信がある。

「……いやがつたかーもつ逃がさねーゼ、デルエー」

剣を一本持つた男が顕れた・・・・・ベクトさんだ！

「ん？・・・おつ、トルか！」

ベクトさんも瞬間移動したかのように悪魔の脇腹に斬撃を叩き込んで悪魔を吹き飛ばし、俺の存在に気づいて声を掛けてきた。

「わりいな、あれは俺の獲物だわ・・・つと《断絶》」

ベクトさんが飛んできた朱いソーックエッジを《断絶》・居合の太刀により魔法攻撃を無効化する斬撃を繰り出す・によって消滅させた。

「まあ、あとは俺が頂く」

悪魔・・・デルエトとの闘いはもはや一方的だった。まず速さが違つた。デルエトはまだ視認できる速さだったがベクトさんのはもはや見えなかつた。気づいたら何発もの斬撃がデルエトに刻まれていた。

「つしゃーー・羽一枚きたぜ」

ベクトさんがメーラーのパネルを見て喜んでいた。

「うと・・・わりい、あいつ狩つてしまつたな。だがあれはもともと俺が追つてたからな」

「いえ、あんなの今の方、私じゃ狩れませんって

そうこうとベクトは、ん?と頭を捻り

「トール今お前のレベルって何だ?」

「33ですよ」

「ありや? そつだつたか・・・見間違いか? まあ、いいか

何か勘違いをしていたようだ。

「とにかく、この穴ってなんですか？」

「おう、全部地獄界に繋がる穴だ。推奨レベルは160だな」

「冗談もほざほざにしてほしい。そんな化け物に勝てるわけないじゃないか。」

「ちなみにさっきの『テルエトは69レベルだつたな。穴入口付近はレベル低いがいいアイテムが手に入るからな』

「あれで69レベル・・・100越えモンスターはいつたい・・・いや、よやうとつあえず今はこつこつ強くなるだけだ。」

その後、ベクトにいろいろ助言をもらいながら街へ戻った。

次回予告

ショイド「はい、始まりました～私のコーナー……」

トール「ショイドさん久しぶりですね……じゃなくて、前回の次回予告で To be continued になつてましたよね！」

ショイド「まつたく、そんなこと結果なんてわかつたようなものじやありませんか。トール君が負けましたよ、や～い。」

トール「いつかゼッテ倒す。ショイドもライアンも……」

ショイド「トール君暗黒化とかありますで恐いですね～」

トール「あ、あぶないあぶない次回予告を……」

ショイド「次回、story45 ショイドによるショイドのための
ショイドの団。SUSU團結成！」

トール「いやいやそんな・・・つてもついない、このオチはそろそろだめだろー！待てー ショイドさん」

story45 ミライア支部にて（前書き）

どうも、お久しぶりのかたはお久しぶりです最近読まれたかたははじめまして。野に咲く雑草」とジャッロです。

わけがわからん

久しぶりの投稿にも関わらず本編は進みません！

「ツフ、わたしは今ライカ君がいる『ミライア』支部にいます。ちょっとした賭けに負けでライカ君にこき使われています。ギルドマスターなのに！」

一人の少年がツツ「ミ」を入れた

「何やつてるんスか・・・」

「なーに、ちょっと神の視点で見ている人達に訴えてみただけです。」

「そっスか・・・じゃあこれの整理お願いしますわ

「世界は非情だー！」

「何言つてるんつスか。あんたがギルドマスターなのにまつたく仕事しないからでしょが！」

「遊び人なめんなよー！」

「だまれ、——アーティー」

「世界は非情だー！」

バサバサバサツ

「そうですね、ショイドさんの前だと非情になれますね。ではこれとこれとの資料をまとめといてください」

「ハ、ライカ君語り合えばわかり合えると思つんだが・・・どうだらう」せひとと「せこ、じやあこれもお願」下さいませんでした

シェイドが座っていた椅子から立ち上がるうとしたら肩に・・・笑顔のライカの手が乗っていた。

「・・・」 「・・・(一)(二)(三)」 「哀れつスね」

シェイドは立ち上がることができなかつたとか・・・

「終わったー」

「もう終わったんスか？」

あれから三百枚近くあつた資料を30分ぐらいでデータ化を終わらせた。ちなみに三百枚もあつたのは今までのツケ

「・・・そんなにすぐ終わるのなら始めからやればいいと思つ
つス」

「私を縛る」とは誰にもでき「ライカセ」るに決まつてゐじや
ないですか~」

かなりヘタレだと嘗つたことがよくわかつた。ん?ああそういえ
ば俺の名前紹介されてなかつたつスね。ミコートツスあの音無しの
あがが由来つス。

「で、だ//コート君」

いつになく真面目な顔、口調で俺のことを呼んできた

「いつも思うんスけど、ギャップありすぎて面食らひんスけど。
・・なんスか？」

「あからさまに嫌そうな顔しないでください」

・・・そんなに嫌そうな顔してるんスかね自分。

「まあ、いいでしょ・・・」

多分そこはよくないと思ひつス

「最近このあたりで上位種が連携して襲つてくるといつのは本当ですか？」

ミライア周辺の平均レベルは120だいたい平均±20レベル
が普通にいてもおかしくないモンスターだ。ここでいう上位種は1
40オーバーだつたり他とは能力値が違うボスモンスターのことを
いつ。

「あ～、そうス。たしか天使系モンスターの新種らしいっス。
レベルが170で常に三体で一組で物理軽減スキルもつてたり距離
は短いらしいけど転移スキルを持つてるらしいっス」

「フム・・・それは確かにここの人達では倒せませんね。レベル差もあるかも知れませんが新種にイレギュラー要素がつきものですし・・・それで、他ギルドはこれの対応をどうじてます?」

ミライアにあるギルドで一番支部が大きいのはシェイドのギルドである『ミスティードリーム』だ。大型ギルドにはモンスターの討伐依頼があつたりする。

「シェイドさん」

「おや、ライカ君どうしたのですか?」

シェイドがいた執務室にライカが入ってきた何か紙を手にもつて

「もう知つてると思つけどネル&セル&メルの討伐依頼きたよ?」

紙に載つていたのは三対の天使のようなもの。顔の部分が真つ平で能面のようになつていて、それぞれ大剣、大斧、杖と片手に持つていて、そしてなにより特徴的なものが真っ白な身体のところどころに赤が血のようについているところだ。

「なんて恐い天使っスか」

「さて、討伐にいきますか。ライカ君、//コート君こいつよに行きましょうか」

「じゃあ私はキュイちゃんといちやん連れてくね」

「あ～俺の出番つてあるんスか？」

正直言つて//コートに出番がまわつてくるとはあまりびっくりか
まったく思つてなかつた。まずレベルが・・・。

//コート・・・LV・163
ライカ・・・LV・254
シハイド・・・LV・287

けつして//コートのレベルが低いわけではない。//コートのレ
ベルはこの支部では高いほうだ。ライカやシハイドはCHAOIS
ONLINE最前線の攻略組である。シハイドに至つては最上位の
レベルである。

「あと、行くとしますか～」

シェイドがかなり緩い感じでそう言つた。

ギギギギギグギギギギギガギギギギギ

「これが今回討伐する天使の鳴き声である。・・・こえー。なん
か間近に見たら白い躯にある赤い斑点がマジで血痕にしか見えない！」

「では、手筈通り。私が前衛、リード君が中距離による援護と余裕があれば白兵戦、でもつてライカ君はもう遠距離で準備できてるそうです」

「了解ツス」

まず、ショイドに援護が必要なのか?と思つたがそこは普通に流しといた。

戦闘開始の合図は遠距離からのキュイちゃんによる遠距離魔法攻撃。キュイちゃんとはレアモンスターであるホワイトドリフ gonだ。名前の由来はキュイキュイ鳴くからだそうだ。

天使達に炎弾、雷弾、光弾の三種の弾が降つた。天使に炎弾はダメージがあつたが雷弾、光弾は回復していた。天使達のライフは減らなかつた。

「ほお、属性吸収をもつてゐるのですか・・・では」

シェイドが動き出した・・・時には大斧を持った天使セルのその武器を持つ左腕が飛んだ。シェイドがセルの背後で大きく構えていた。

「『ヘルズリー・パー』」

『ヘルズリー・パー』 - 大振りの横一文字の斬撃とにかくダメージが大きく切断能力が高い - でセルの上半身と下半身が別れポリゴン片となつて消滅した。

シェイドにかかるばたかだか170レベルの敵は一瞬なのだ。

だが天使の一杖を持つてゐるメルが蘇生呪文を唱えた。

セルの別れた身体がふたたびひとつになつた。

「ほお、蘇生呪文まで使いますか・・・ボスモンスターですかねえ・・・むづ?」

ショイドが考察しながら闘つてみると天使達がショイドを中心
に二角形に囲んだ。

ショイドを中心ペリペリシュー型の青い結界を展開した。

「あ～やられましたねえ・・・」ノートへん2分ほどがんばつて～

・・・なにやつてんスか！？うわつ天使こっち向いたよ

だが支部で実力を認められている//コートはそんなことを愚痴りながらもつづくに攻撃モーションに移っていた。口を空に向けて構えている。矢は三本。

「《サンダートライバント》」

青白い雷を纏い空へ向かつて飛んだが森の木を越えたところで
急激に方向転換した。方向が変わって三本の矢先には三体の天使が
いた。そこから矢はさらに加速して天使達に向かつた。

「《フレイムアジャスト》」

《フレイムアジャスト》 - 鏃やじりに炎の魔力を込めて放ち着弾と同
時に爆発する・を《サンダートライデント》が上がっている間に準
備し雷と炎、上と下からの同時攻撃。

「いけえええア、ツ！」

ミューートは技を放つてから気がついた雷属性は効かないむしろ
回復することを・・・。

赤い斑点を持った天使達に攻撃は当たつたが回復とダメージが
相殺され若干回復されてしまった。

「このミスがさらに悪い状況を作り出した。天使達が完全にミュー
ートの存在を認識した。

認識した天使達の動きが変わった。剣を持ったネルと斧を持つ

たセルが消えた。

- - - 嫌な予感しかしなつ！？

「あぶなつー！」

セルが背後から斧を振り落としてきた。ある程度予測出来ていたミコートはその攻撃を躱すことができたが・・・。

「えつ、ちょ・・・・

躱した先にネルが剣を構えて待機していた。

この時ミコートはそれはずるいだろと思いながらこれは終わつたかなあと思考を巡らしている間にネルはバチバチとなつている雷をのせた斬撃が近づいた。

「諦めるには早いですよ。ミコート君」

斬撃はミコートまでは届かなかつた。そこには真つ一つになつているネルと呆れた表情をしたシェイドがいた。

誰のせいだよ、と言いたかつたが助けられた手前そんなことは言えなかつた。

その後は一瞬だつた。ミユートが助けられる前に蘇生できるメルを倒していたためもう蘇生することはなかつたが、残り一体となつたからなのかセルが奇声をあげ赤い斑点から赤が白を塗り潰していき全身赤い天使となつた。たぶんステータスが上昇したのだろう。たぶんやだろうと言つたのはその状態の赤い天使をシェイドは一撃で葬つてしまつたからだ。

「まったく恐いモンスターでしたねえ～」

その時のシェイドの言葉である。恐そうに見えないのは俺だけじゃないと思つ。

そうそう、途中から援護がこなかつたライカさんはなんとそつちにも新種のモンスターが出たそうだ。そのモンスターは人狼^{ワーウルフ}と合^キ成^ラ獸を足して二で割つたようなモンスターだつたらしく二足歩行、頭と翼にキメラでいて格好はボクサーのようなファイティングポーズ。だが所詮はレベルの差が違つたライカさんの相手ではなかつた。ただタフだつたためてこずらされたがほぼ無傷で倒した。

「それにしても、今回俺つてなんでいたんだろ・・・」

「コートはギルドに帰つて今回のことを見直して嘆いた。

「ふむ、最近の突発と新種の出没は異常ですね・・・そろそろ
ですか・・・」

一人で何かをつぶやいていた言葉は誰にも聞こえなかつた。

次回予告

「俺は強くなりたかった。」

シロイド「まともな予告は私が認めませんー。」

「トール、部長の情報を元に俺は遺跡を目指した」

シユイド「ダメですー! まともな予知は二回ません!」

BADEND

「…トール、バッジでHENDで終わらせるかあ…? シュイドさん今田さんは許しません…」

シヒイデ「許せないからハビ「あ、リイカさんシヒイデさんなら
ここに。・・・はこうづか「まで、話せばわかる?・・・・サラダ
バー!」

「・・・計画通り」

カースト遺跡にて・前編（前書き）

どうも、はじめましてのかたははじめまして。久しぶりのかたは…
ごめんなさい。リアルが忙しす。

カースト遺跡にて・前編

- - - - ツール視点

「ちよつ、てめえ」ひちくんじやねえよ。」

「うるせー、死なばもろともや！お前だけ助からせるかい！」

オレは今走ってる・・・何故かって？後ろから『テカイケンタウルス・・・上半身が人で下半身が馬・・・みたいなのが追いかけてくるからだよ！

会話からわかるようにこいつはけつしてオレを追いかけてるわけじゃない。このオレの隣でオレについて来るバカ野郎が狙われているんだ。

- - - 3時間前

オレは今カースト遺跡にいる。今日もみんなと都合が合わなかつたためこの前部長がソロにいい場所としてススメてきたこの遺跡にきた。

この遺跡に出てくるモンスターはゾンビなどのアンデッド系ではなくこの遺跡の設定である古代人の遺産がモンスターとして出てくる。基本的には普通のモンスターと変わらないが種族が『未知』となり弱点の属性がないのが特徴だ。

簡単に例を挙げるなら、カーストウルフという種族『未知』モンスターがいる。こいつはよく倒していたチャイルドウルフの外見の形と攻撃パターンが同じの弱点属性がなくなつた感じだ。

で、事前の（部長が教えてくれた）情報ではアンデッドナイト・・・まんまだな・・・騎士甲冑の中身がない大きな盾と長い槍を持つたモンスターが原型のカーストナイトがいるそうだ。ここまで察したかもしれないがこのモンスター名は『遺跡の名前』 + 『モンスターを象る名前』である。

今回はこいつに用がある。部長の言つかぎりであれば連戦しても勝て、かつ経験値がいいそうだ。

- - - カースト遺跡 1F

このカースト遺跡は上に5F下にB3Fがあり目的地はB2Fだ。行き方、敵の情報も把握しているのでさくさく進める。

「・・・あれは、カーストドッグか・・・スルーしていく

俺は犬のようなものの横を通り過ぎた。カーストドッグはノンアクティブ・・・こちらが攻撃しないがぎり向こうから襲つてこない・・・モンスターなので1Fはすぐに抜けた。

- - - カースト遺跡 B2F

という訳でB2Fなんだが・・・え? B1はどうしたって? 語るまでなかつたから省略だ。いや、B1を下りたすぐ近くに下に落ちる穴があるんだけどそこからわざと落ちることでショートカットできたりする・・・といつかした。

で、目的地に着いた。このB2にいるモンスターは三種いる。ひとつは今回のメインターゲットのカーストナイト、あと一種は触手ウネウネの植物モンスターが原型のカーストテンタクルとカーストナイトの上位種のカーストガーディアン、ナイトの時は魔法は使わなかつたがガーディアンになると火属性の魔法を使うようになる。あとはナイトより武装がごつくなる。まあこのガーディアンはB3へ行くための門番のような存在でB3へ続く階段手前にあるフロアに三体ぽつーんといるそだ。近寄らなければ害はない。でもつてテンタクルについても・・・こいつもほとんど害はないだろう床に生えていて自分で自律して動くことができない・・・植物系モンスターによく見られる特徴だ。

と、実質お任当ての敵以外はほぼ害無しかなりいい狩り場なのである。だが余裕があればガーディアンに闘おうとトルは考えていた。

「……つと、いたいた」

いたのはカーストナイト三体、テンタクル一体。テンタクルは無視していいがカーストナイト三体が編成を組んでいるようにいた。

情報通り槍と盾を持つ騎士のようなモンスターだ。

「さてと、どうじょうか・・・」

トルはこのモンスターが経験値においていいモンスターでたいて強くない（はず）とだけ部長に教えられた。攻撃パターン、モーションは教えてくれなかつた。

部長が言つには「そこまで教えたらいおもしろくないでしょう（トル訳：まあ苦しんでください）」。くわつ、あの部長め！

思考した結果まず大技で先制攻撃をすることにした。1番近くにいた騎士目掛けて走り距離を詰めた。

「ぶつぶれろ！」

『ヴォルフファング』で騎士一体を狙つた。本当は『エクスプロージョンソード』の方が威力があるのだがこいつには火属性に抵抗を持っている。だから属性のない『ヴォルフファング』の方がおのずとダメージが高い。

狼が牙を向けたように上からと下から蒼い斬撃が騎士を襲つた。それと同時に『閃撃・大剣』 - 大剣による居合斬り - も蒼い斬撃と同時に繰り出した。

「え？」

トールが間の抜けた言葉を出した。自分がやつたことに驚いている。

ナイトをアーツ一撃で倒した。その後は他一体も同じように倒した。かなりあっさり倒してしまったトールは自分の経験値、APアーツポイントの消費量を確認した。

まずAPは大剣スキルや蒼狼スキルで威力が高いがAP消費が大きいスキルを使ったので三分の一は消費していた。そして経験値

は三体で全体の約10%の経験値が入っていたようだ。

「おーおい、いいのかよこんな簡単に経験値入つて・・・」

わらに言うならば他に人がいない。狩り場を独占できるのもいい。APを保持していればまず負けないということがわかつたので次はアーツなしで闘つてみることにした。

ちょうどよく一体だけ騎士がいたので斬りかかった。奇襲は見事に盾や槍を抜けて斬撃が通った。騎士をじっくりと見HPを見るところだけで一割を削っていた。

そこからは剣撃のラッシュ、まともに入った振り下ろした剣を今度は同じように振り上げてまつたく同じ場所に斬りかかった。これも攻撃が通つたがさすがの騎士もこれ以上はやられないように槍でトルを貫こうとした。

しかしトルはこれを読んでいたのですでに間合いをとつていたため槍は虚空を貫いた。そして、この虚空を貫くという隙を見逃さなかつた。騎士の左よりに距離を詰めた。騎士は左に槍右に盾をもつており槍を前に突き出している今左側は隙だらけだ。

騎士のながら空きの左半身に大剣をフルスイングして横腹に当たった。体勢を崩すどころか吹き飛ばした。最後に吹き飛ばしたあとに追撃として『ソニックエッジ』でどめを刺した。

「ふう・・・・・あつー」

トールは『ソニックエッジ』でどめを刺していたことに気づいた。アーツなしの検証だったことを倒してから思い出したのだつた。

「・・・・まつ、いいか」

トールのこの検証は通常の斬ることがどれくらい効くものなか知るものだつたので斬撃が効くことがわかつたので結果オーライということでまとめた。

ここからのトールの狩りは順調かつペースアップした。攻撃パター^{プレイヤーキャラクター}ンは槍で突くのと構えてから槍を前に突撃することと盾によつてP.C.も^{プレイヤーキャラクター}使用するアーツ盾系スキルにある『シールドバッシュ』・盾を使って相手に攻撃する。当たた部位に一定確率でスタン(麻痺)する効果をもつ・の三つでとくに『シールドバッシュ』さえ注意すればもう相手にならなかつた。

狩りは順調で一時間続きレベルもひとつ上がり34となつた。ここでナイトと戦うのに飽いてきたトールはガーディアンと戦うこととした。

「・・・とあれか」

さらに下の階層に下りるための階段の前でナイトと同じ形状で色が朱色がかっている甲冑が左腕の盾を前に右手の剣を矛先を天井に向け前に片膝を立て祈るような格好で三体いた。

その三体からは異様な威圧感があった。ナイトのよつよほいきそうにないとトールは直感でそう感じた。

階段前は広い部屋となつており入つたら戦闘が始まることは明白だった。

「・・・よし、いくか！」

部屋に入る前に『ソニックエッジ』を放つてから部屋に突撃した。

案の定トールが部屋に入つたすぐにガーディアンが動き出した。ソニックエッジの衝撃波は盾で防がれた。

だがそれがトールの狙いだった。ソニックエッジの真後ろを追いかけるように這つていたため衝撃波を盾で防ぐ行動でできた隙で

すら大きな隙になるぐらいガーディアンに接近していた。

トルはガーディアンの左側にまわり左腕の盾で衝撃波を防いだためすぐにガードはできずがら空きとなつた左側の腹あたりに大剣を振り上げるよう劍撃をいれ、続いてアーツをいれようと思ったが嫌な予感がしたのでそこからバックステップして退いた。

ある程度距離をとろうと下がつているとさっきまで斬り掛かっていた場所に火柱がたつた。忘れていたがこのガーディアンは火魔法を使う。今のは『ファイアラビリンス』 - 地点指定の魔法、指定した地点から10mぐらいの火柱をあげる。各属性にラビリンス系魔法有り - 中心でくらつたら逃げ切れず死んでいただろう。

そして、ガーディアンと間合いを空けたのはミスだつた。槍によるリーチ、盾によるガード、魔法による遠距離攻撃、そして連携。大きな一撃を当てることができなくなつた。初めにいれた一撃も1割削ることもできなかつた。防御力が上がつているのかHPが上がつているのかもしくはその両方が、どれにしても防御力を犠牲にして攻撃重視にしているトルにとつて回復してくれる味方がいない状況で長期戦はじり貧である。

「さて、どうしようか・・・ツツ！」

『シールドバッシュ』を使わずに盾で攻撃してきた。今までにない攻撃に大剣でガードせざるを得ない状況になつた。このガーデ

イアンに限らず敵モンスターは長時間戦闘することでA.I.が学習し今までにない行動パターンを出したりする。おかげで今以外盾を攻撃するものと認識されていなかつたが盾も使って攻撃していくようになつた。

「これで近距離戦闘では盾での攻撃が戦闘パターンに追加されたわけだ。」

「くそつ・・・・・・こうなつたら・・・・・・」

一か八かの大技連発で一体できれば一体倒す！

「『一匹狼の勇氣』^{ロングーウルフ・ブレイブ}」

溜めてから使用するほうが強いが今回もすこしでもステータスが上げるために使用。ここからアーツの連発が始まる。

トルはまず狼一匹を召喚し、その後すぐに三体いるガーディアンのうち二体に一體ずつ《ウルフバレット》で突撃させ二体の抑止力にしガーディアンと一対一に持ち込んだ。

まずは、厄介な盾を破壊するため『レイ・エッジ』・光属性付加の斬撃・つづいて『ヴォルフファング』でガーディアンにダメージを稼ぐ。

一対一に持ち込んだガーディアンは盾を無くし、手に持っている槍も一緒に吹き飛ばしたので全くの無防備となつた。

「いいで決める！」

隙だらけとなつたガーディアンにもう一度とどめの「ウォルフファンク」を叩きこもうとした時、背後から何かが近付いてくる気配がした。見なくてもわかつた他のガーディアンが背後から攻撃しようとしていることを…。

トルは確信して、「ああ、負けたな」と思つた時

ズドン！

その音とともに何かが固いものにぶつかる音がした。トルに衝撃がくることがなく『ウォルフファンク』が隙だらけのガーディアンに当たり破壊した。

カースト遺跡にて・前編（後書き）

《質問回答コーナー》

トール「わーぱぱぱぱ…」の原稿はどうつかと思うんだけど…

シルク「深く悩んだらダメだよ。たぶんこれはこの原稿を書いた人の思つづっぽだと思つ

トール「…そう、だな。よし、気持ちを切り替えて…」

シルク「今回ほどいかでとられていた質問を回答します」

トール「えっとまざ…『部長の成績は良い方なんですか?』」

シルク「部長ってラインさんだけ?どうなんだトール?」

トール「残念なことに馬鹿じゃない…学校内での成績としては上の
中ぐらいはある」

シルク「そんな悔しそうな顔するなよ…じゃあ気を取り直して次の
質問』シェイドさん、私もかつて某MMOでギルマスしてました。
ついでに面倒みがよかつたためか、複数の方から言い寄られ、ギルド
内の雰囲気が…』…」

トール「…はい、じゃあ質問コーナー終わりとします。またこうい
う質問があらばいいなー」

シルク「…そうですね。僕やトールについての質問が無いのが残念

ですが……いや、僕はこりゃないですナビ

「さて、オチがないのもひどいから何かしないか?」じやんけんとか

シルク「いいですが、負けませんよ?」

トール&シルク「最初はグージゃんけん」

シルク「チヨキ！」トール「バー！」

シルク「…」んなオチは誰も望んでないですね」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2425j/>

CHAOS ONLINE

2011年1月28日13時16分発行